八田村文化財調査報告書　第３集

山梨県中巨摩郡八田村

Enokihara　*Tenjin*

榎原・天神遺跡

高度農業情報センター建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００１

八田村教育委員会

八田村文化財調査報告書　第３集

山梨県中巨摩郡八田村

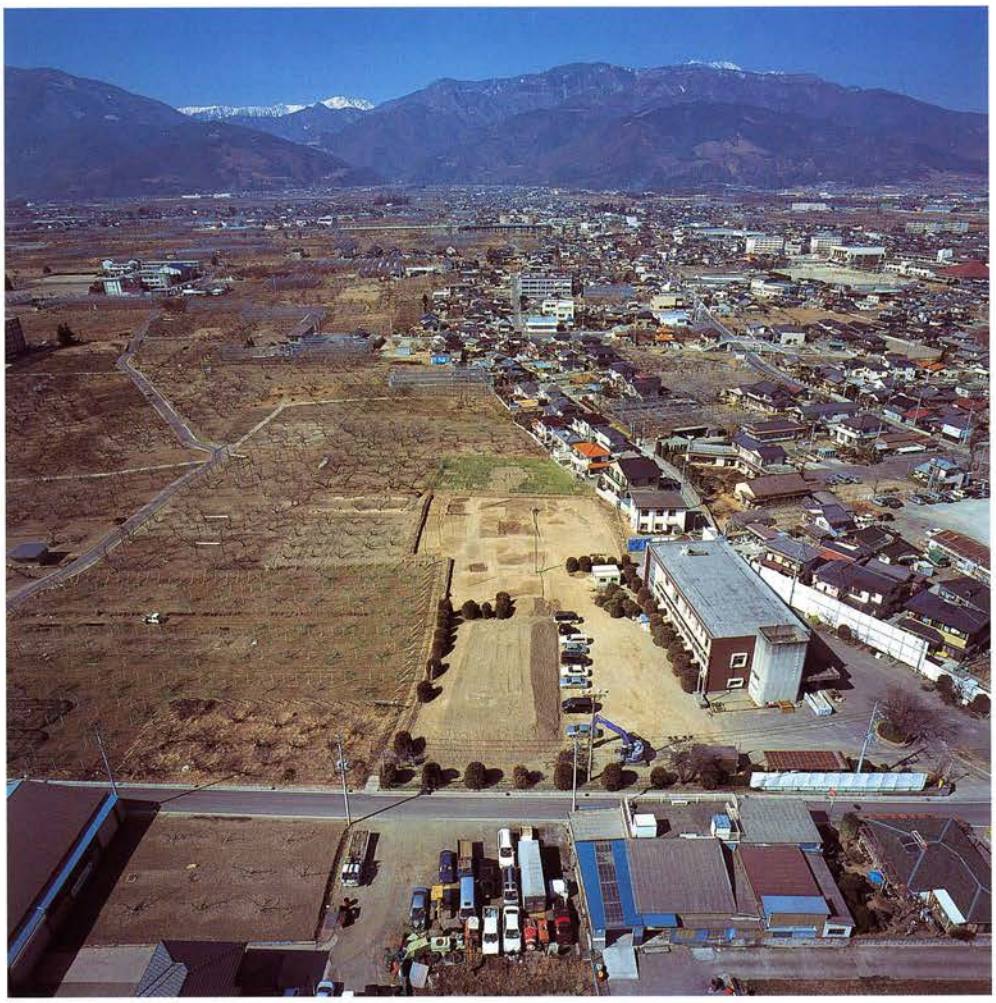
Enokihara　*Tenjin*

榎原・天神遺跡

高度農業情報センター建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００１

八田村教育委員会



1．榎原・天神遺跡　全景

2．１号住居址竈および棚状施設

序　　文

本書は、旧八田村中央公民館の解体、および跡地への八田村高度農業情報センター（愛称　ふれあい情報館）建設に伴い、八田村教育委員会が平成11年度に発掘調査した榎原・天神遺跡の報告書であります。

榎原・天神遺跡は御勅使川扇状地北部の扇央部に位置しております。遺跡のすぐ北側の県道芦安竜王線は大正時代まで御勅使川の流路にあたり、この流路を地元では「前御勅使川」と呼んできました。遺跡は前御勅使川のちょうど右岸に立地しているとも言えます。

発掘調査の結果、10世紀代の平安時代の住居跡や区画溝、畑状遺構など多数の遺構が発見されました。とくに平安時代の住居跡に造られていた棚状施設は、県内でも検出例が少ない注目すべき遺構です。調査以前、遺跡周辺で発掘調査が行われた例はなく、古代の歴史環境はほとんど知られていませんでした。その意味で、今回の調査によって多数の遺構が発見された意義は決して小さなものではないでしょう。また、榎原・天神遺跡の西側、白根町百々地区では山梨県埋蔵文化財センターによって百々遺跡が発見されております。百々遺跡ではやはり10世紀を中心とした平安時代の住居址が200軒以上検出され、県内でも最大規模の遺跡であることが判明しました。榎原・天神遺跡はこの百々遺跡と同時期であり、両者には深い関係があると考えられます。百々遺跡とともに榎原・天神遺跡は、地域の歴史を語る上で非常に重要な遺跡であると言えるでしょう。

今回の調査結果が、八田村のみならず山梨県の歴史を解明する一助となり、文化財保護、普及活動に役立てれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって御指導御協力を賜りました関係諸機関及び関係者、並びに調査・整理に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

平成13年３月

八田村教育委員会
教育長　内田一雄

例　　言

1．本書は、山梨県中巨摩郡八田村榎原に所在する榎原・天神遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は、八田村高度農業情報センターの建設工事に伴い八田村教育委員会が実施した。
3．遺跡の名称は、遺跡の所在する小字名と大字名を組み合わせて榎原・天神遺跡とした。
4．本書の執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅳ章 ……パリノ・サーヴェイ株式会社
その他 ……斎藤秀樹（八田村教育委員会）

5．編集は小林素子、斎藤が行い、遺物、遺構の写真撮影は斎藤が担当した。
6．発掘調査期間は、第１次調査が平成12年１月18日から平成12年３月３日まで、第２次調査が平成12年４月17日から平成12年４月21日までである。
7．遺物実測図は、江川晶子、潮田憲幸、斎藤が作成した。
8．本報告書のトレースは、小林、藤原洋子、穂坂美佐子が行い、版組は穂坂、斎藤が担当した。
9．発掘調査における分析依頼および委託した事業は以下の通りである。

基準点測量	㈱八田測量
航空撮影	㈱フジテクノ
植物珪酸体分析・微細物分析	㈱パリノ・サーヴェイ

10．発掘調査から報告書作成まで、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意としたい。（敬称略・五十音順）

今福利恵、大嶌正之、河西　学、櫛原功一、小林健二、諏訪間伸、田尾誠敏、立花　実
田中大輔、平野　修、保坂康夫、宮里　学、森原明廣、米田明訓
帝京大学山梨文化財研究所、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター
㈱湯澤工業

11．本報告書にかかわる出土品および記録図面、写真等は八田村教育委員会に保管してある。

凡　　例

1．遺構および遺物の実測図の縮尺は、それぞれ図に明記しているが、原則として以下のとおりである。

(1)遺構　　住居址……1/40
　　竈……1/20
　　焼土遺構……1/40
　　ピット群……1/40・1/80
　　溝状遺構……1/30・1/40・1/60・1/80・1/300
　　畑状遺構……1/100

(2)遺物　　土器……1/4

2．第Ⅲ章の遺構図版に用いたスクリーントーン・ドットは、以下のものを表す。

(1)スクリーントーン

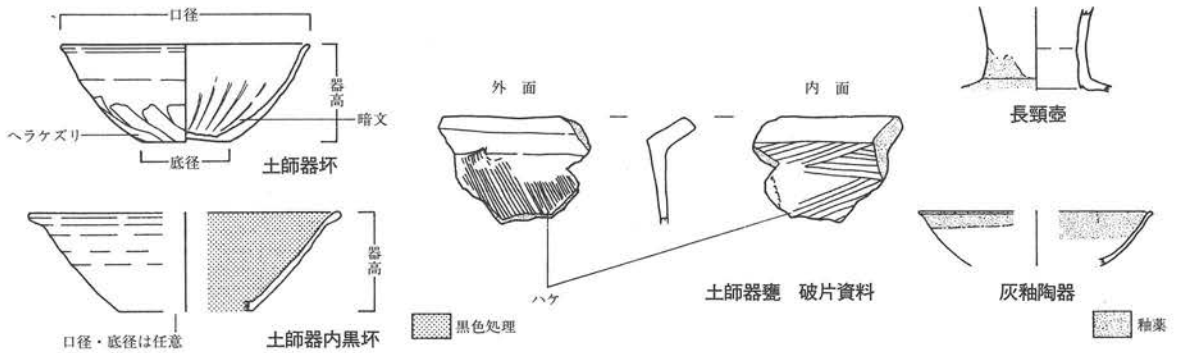
地山　試掘坑　カクラン
粘土・竈袖　黒褐色土　焼土

(2)遺物分布図におけるドットは次の遺物を表す（第26図は図凡例参照）。

土器……●
炭化物……■
石……○

3．遺構断面図、土層図における数値表示は標高を表す。

4．遺物実測図の表現は、以下のとおりである。



土器の口縁部または底部の残存率が1/4以下のものについては、正確な口径が求められないため任意の口径とし、口縁部を中心線の左右で切って図示している。

また、破片資料の場合、断面図の右側に内面を、左側に外面を描き表現した。

5．挿図中の遺物番号、遺物観察表、写真図版の遺物番号はすべて一致している。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
第Ⅰ章　調査の概要……1
　第１節　調査に至る経緯と経過……1
　　(1)　調査に至る経緯……1
　　(2)　調査の経過……1
　　(3)　調査組織……1
　第２節　調査の方法……1
　　(1)　調査方法とグリッドの設定……1
　　(2)　基本層序……2

第Ⅱ章　地理・歴史環境……5
　第１節　地理環境……5
　　(1)　甲府盆地……5
　　(2)　八田村の地形……8
　　(3)　遺跡の立地……8
　第２節　歴史環境……13

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物……16
　第１節　遺構の調査……16
　　(1)　住居址……16
　　(2)　焼土遺構……26
　　(3)　ピット群……26
　　(4)　溝状遺構……26
　　(5)　畑状遺構……39
　第２節　遺構外出土遺物……40

第Ⅳ章　自然科学分析……41
　第１節　榎原・天神遺跡発掘調査に伴う自然科学分析報告……41

第Ⅴ章　調査の成果と課題……49
　第１節　住 居 址……49
　第２節　溝状遺構……54
　第３節　畑状遺構……55
　第４節　まとめと今後の展望……55

遺物観察表……59
写真図版……61

挿図目次

第１図　基本層序柱状図
第２図　榎原・天神遺跡全体図（1/250）
第３図　山梨県地形図（1/100万）
第４図　甲府盆地における扇状地（1/40万）
第５図　八田村位置図（1/10万）
第６図　八田村地形図（1/50,000）
第７図　御勅使川扇状地地形分類図（1/50,000）
第８図　榎原・天神遺跡周辺地形図（1/10,000）
第９図　榎原・天神遺跡および周辺の遺跡位置図（1/10,000）
第10図　榎原・天神遺跡と周辺の地割図(1/2,000)
第11図　１号住居址平・断面図（1/40）
第12図　１号住居址竈・棚状施設および土坑１平・断面図（1/20）
第13図　１号住居址出土遺物（1/4）
第14図　２号住居址平・断面図（1/40）
第15図　２号住居址竈平・断面図（1/20）
第16図　２号住居址出土遺物（1/4）
第17図　焼土遺構平・断面図（1/40）
第18図　１号ピット群平・断面図（1/40・1/80）
第19図　２号ピット群平面図（1/80）
第20図　１号溝平・断面図（1/40・1/300）
第21図　２号溝平・断面図（1/40・1/80）、３号溝平・断面図（1/40）および１・２号溝石出土状況（1/40）
第22図　４・５・６号溝平・断面図（1/60・1/30）
第23図　７・８・９・10号溝平・断面図（1/40）
第24図　畑状遺構平・断面図（1/100）
第25図　畑状遺構および遺構外出土遺物（1/4）
第26図　１号住居址グループ別遺物出土状況（1/40）

表目次

第１表　ピット計測表（第２・18・19図）
第２表　ピット計測表（第２・18・24図）
第３表　山梨県内で検出された棚状施設一覧
第４表　グループ別遺物分布一覧
第５表　榎原・天神遺跡出土土器観察表(1)
第６表　榎原・天神遺跡出土土器観察表(2)

写真図版目次

写真図版１……63
１．榎原・天神遺跡　全景
２．榎原・天神遺跡調査区南側　遠景

写真図版２……64
１．１号住居址遺物出土状況（西から）
２．１号住居址竈（西から）
３．１号住居址竈遺物出土状況（西から）

写真図版３……65
１．１号住居址竈・棚状施設（西から）
２．１号住居址棚状施設（西から）
３．１号住居址竈・棚状施設・土坑１（西から）
写真図版４……66
１．１号住居址土坑２
２．１号住居址土坑４
３．１号住居址坏出土状況
４．１号住居址坏出土状況
５．２号住居址遺物出土状況（西から）
写真図版５……67
１．２号住居址（西から）
２．２号住居址坏出土状況
３．２号住居址竈遺物出土状況（西から）
４．２号住居址坏出土状況
５．２号住居址竈・土坑（西から）
写真図版６……68
１．焼土遺構（北から）
２．Ａ,Ｂ－３～８区１・２・３号溝（北から）
３．１・２号溝石出土状況（南から）
４．１号溝石出土状況（南から）
写真図版７……69
１．２号溝石出土状況（南東から）
２．１号溝床面ステップ状遺構（南から）
３．Ｊ～Ｐ－３，４区１号溝（西から）
４．５号溝（左）・６号溝（右）（南から）
５．４号溝（西南から）
写真図版８……70
１．７号溝（北から）
２．８号溝（南から）
３．９号溝（南から）
４．10号溝（南から）
写真図版９……71
１．１号ピット群・焼土遺構・１号溝遠景（北西から）
２．１号ピット群・焼土遺構（西から）
３．畑状遺構全景（西から）
写真図版10……72
１．畑状遺構台付甕脚部出土状況
２．台付甕脚部出土状況
３．調査風景（１号住居址）
４．調査風景（焼土遺構）
写真図版11……73
１．１号住居址出土遺物
写真図版12……74
１．１号住居址出土遺物
写真図版13……75
１．１号住居址出土遺物
２．２号住居址出土遺物
写真図版14……76
１．２号住居址出土遺物
２．畑状遺構出土遺物
３．遺構外出土遺物

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯と経過

(1)　調査に至る経緯

今日まで、八田村は果樹を中心とする農業を推進してきた。しかし、都市化の進行や農業従事者の高齢化、後継者不足、産地間競争の激化など多くの問題が生じ、農業を取り巻く環境は厳しくなりつつある。このような状況の中、農業後継者の育成や農地利用集積の推進、観光農業の振興を図るため、農業をはじめとする様々な情報をネットワーク化し、その情報を迅速、的確に発信する施設が必要となった。こうした背景から平成11年度に、「高度農業情報センター」と命名された施設の建設が八田村によって計画された。

計画予定地は、現在、県道芦安竜王線となっているいわゆる「前御勅使川」の隣接地にあたり、前御勅使川の右岸を守る堤防址が埋没している可能性が推測された。そのため、八田村と八田村教育委員会で協議を行い、試掘確認調査の実施を決定した。平成11年12月14日、教育委員会が試掘確認調査を実施し、溝状遺構や住居址など複数の遺構を確認した。この調査結果を踏まえ、再度八田村と教育委員会で協議を行った結果、本格調査の実施が決定された。

(2)　調査の経過

高度農業情報センターは平成12年度着工予定のため、急きょ発掘調査を計画し、平成12年１月18日調査に着手した。調査期間は平成12年１月18日～３月３日までである。また、調査によって調査範囲外に１号溝が延びていることが判明したため、１号溝を対象とした追加調査を平成12年４月17日～４月21日まで行った。

(3)　調査組織

調査主体　　八田村教育委員会
調査担当者　　斎藤秀樹（八田村教育委員会）
調査参加者　　潮田憲幸、江川晶子、長田美智子、小林素子、斉藤なおみ、桜井理恵、清水早枝子
　　高添美智子、新津かつみ、藤原洋子、穂坂美佐子、保延　勇、矢崎康美

第２節　調査の方法

(1)　調査の方法とグリッドの設定

試掘調査の結果を基に、発掘調査では地山となる第Ⅳ層直上までバックホーで掘削し、その後人力で遺構確認を行った。また、任意の場所に試掘トレンチを設定し、確認面より下の堆積状況および遺構の有無を確認しながら調査を進めた（第２図）。

調査を行うにあたって、国土座標をもとに以下に示すグリッドを設定した。グリッドは一辺５ｍの正方形を一つの単位とし、調査区西から東へアルファベット（Ａ，Ｂ，Ｃ・・・）、北から南へ数字（１，２，３・・・）を与え、両者を組み合わせてグリッド名を表記した。例えば１号住居址の位置は、Ｂ－７，８区となる。第Ⅲ章での文中の遺構位置はこのグリッド名で記載している。また、グリッドを区画するグリッドラインにもグリッド名と同様にアルファベットと数字を与えた（第２図）。南北ライン名は、各ラインの西側グリッド名と同じアルファベットとし、東西ライン名は各ラインの北側グリッドと同じ数字とした。また、第Ⅲ章遺構図面には基本的にこのグリッドラインが交差する十字を記入し、遺構図と全体図（第２図）とを照合するための基準とした。

(2) 基本層序

調査区は御勅使川扇状地の地形に沿って、西から東へ傾斜する緩斜面上に位置する。第１図は１号試掘トレンチの南壁断面をもとに作成した層序（そうじょ）である。調査区北側には御勅使川の旧流路となる前御勅使川が東西に延びているため、調査区北側には砂礫層（されきそう）の堆積が予想された。しかし、調査の結果、上層に砂礫層は見られず、Ⅰ～Ⅳ層までの層序がおおむね調査区全体に広がっていることが判明した。

土層説明

Ⅰ　褐色土。耕作土。

Ⅱ　褐色土。耕作土。粘性ややあり。

Ⅲ　暗褐色土。古墳時代以降の遺物包含層（いぶつほうがんそう）。

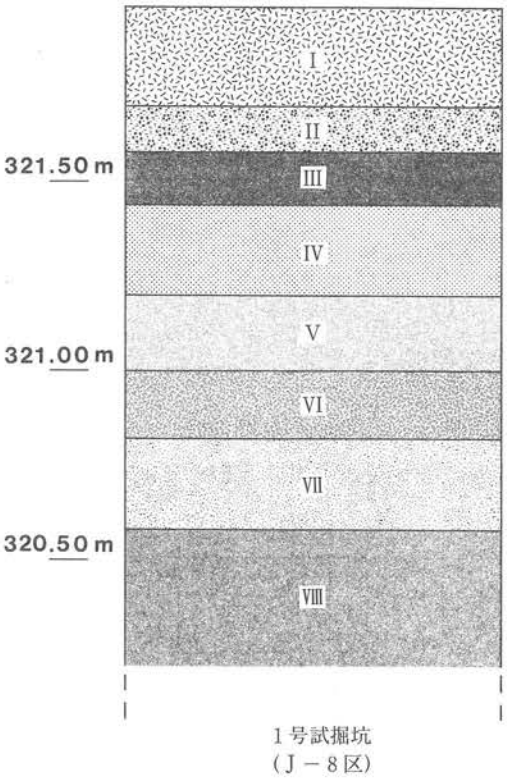
Ⅳ　明褐色土。粘土質。遺構確認面。

Ⅴ　明褐色土。粘土質。Ⅳよりやや暗い。

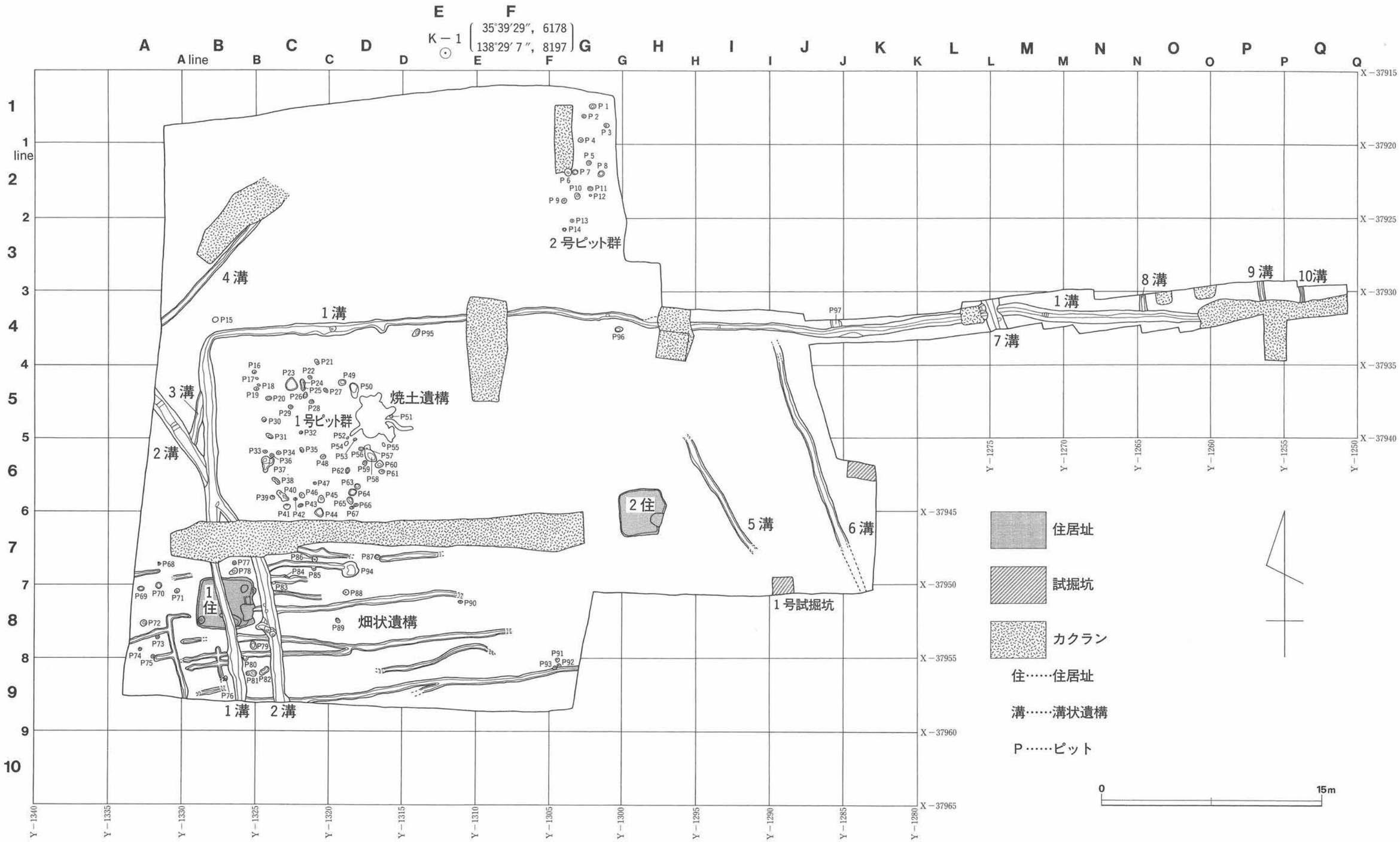
Ⅵ　褐色土。粘土質。

Ⅶ　褐色土。砂・小石をふつうに含む。

Ⅷ　褐色土。砂を少量含む。



第１図　基本層序柱状図



第2図　榎原・天神遺跡全体図（1/250）

第II章　地理・歴史環境

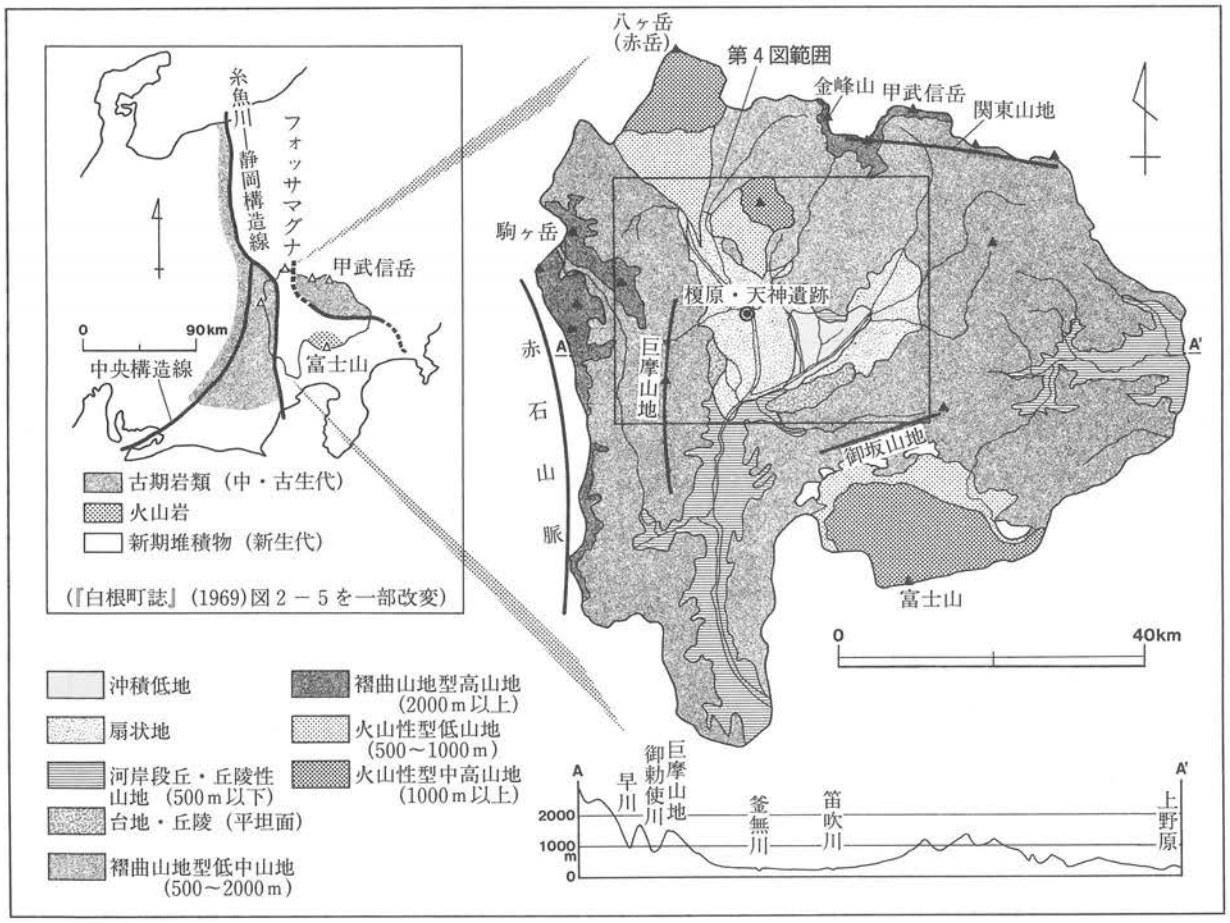
第1節　地理環境

(1)　甲府盆地

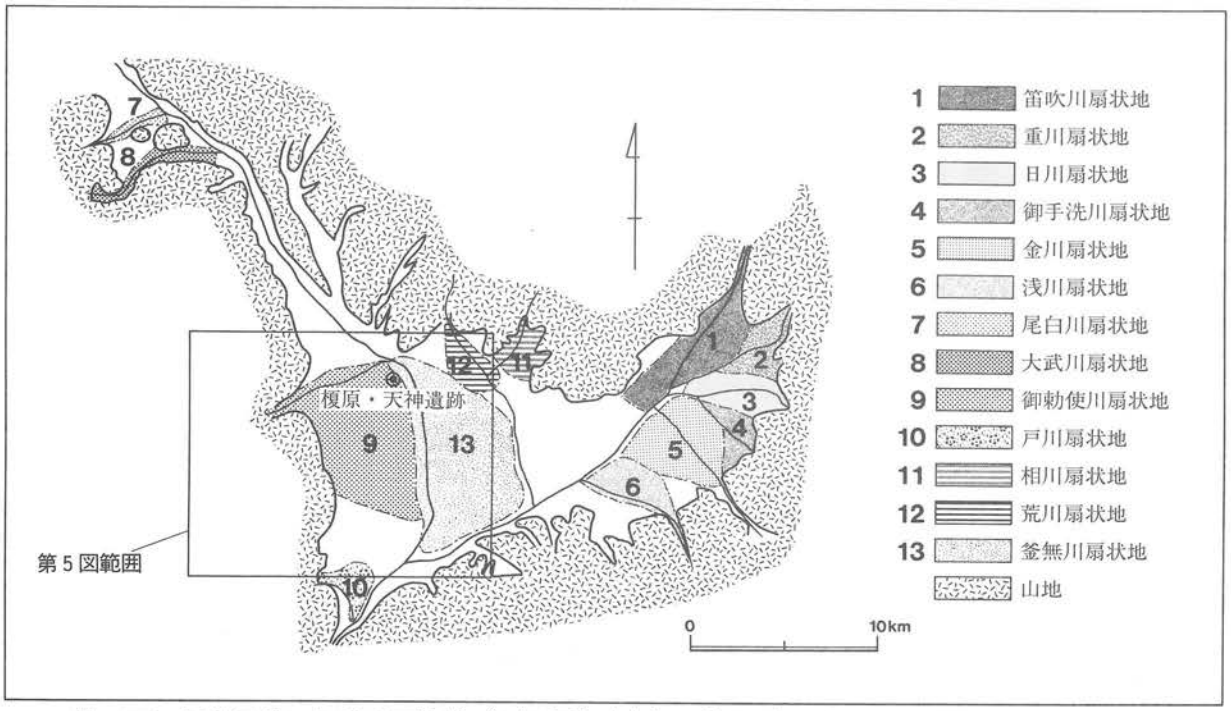
日本列島の中央部にはフォッサマグナ（Fossa Magna）と呼ばれる地帯が南北に走り、日本を西南日本と東北日本に二分している。(註1) 甲府盆地は長野県の松本盆地や諏訪盆地とともに、フォッサマグナの一画を占める。甲府盆地西部にはフォッサマグナの西縁である大断層、糸魚川・静岡構造線が南北に走り、甲府盆地の西端を画している。巨摩山地や御坂山地、南アルプスなど盆地周囲の山々が褶曲して隆起したのに対し、盆地地域は逆に沈降し現在の甲府盆地が形成された（第3図）。

甲府盆地は山梨県のほぼ中央に位置し、周囲を複数の山系によって囲まれている。北から東は関東山地の主尾根にあたる秩父山地と大菩薩山地、南を御坂山地とその北麓に位置する曽根丘陵、西を南アルプスの前衛である巨摩山地に囲まれ、盆地床は韮崎市、増穂町、塩山市を頂点としたやや歪んだ三角形となっている。盆地中央部で東西25km、南北15kmの広がりをもち、総面積は約350km²、標高は250～400mを数える。

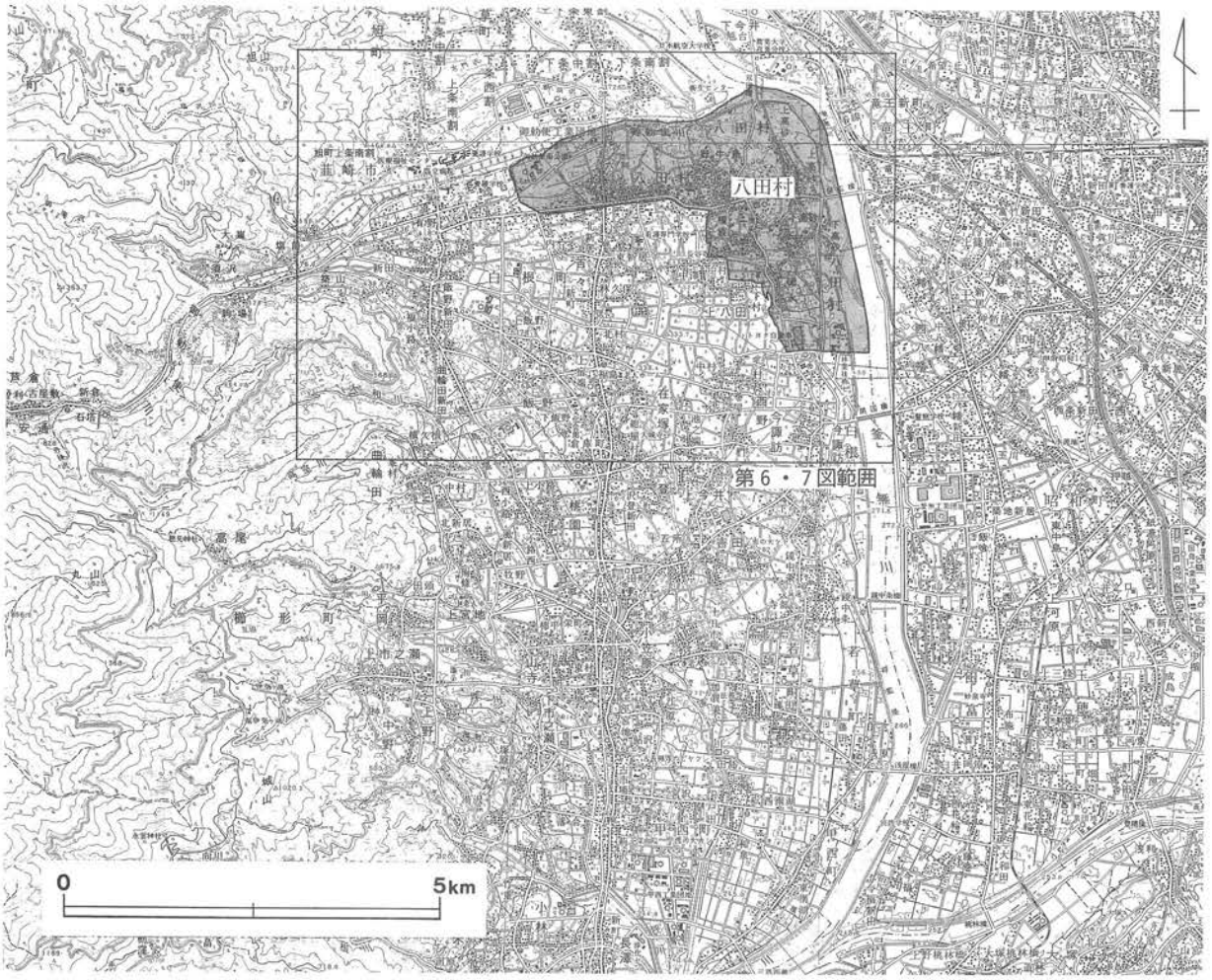
こうした山々に囲まれた盆地内部の地形は、盆地へ流れ込む諸河川によって作り出されていると言っ



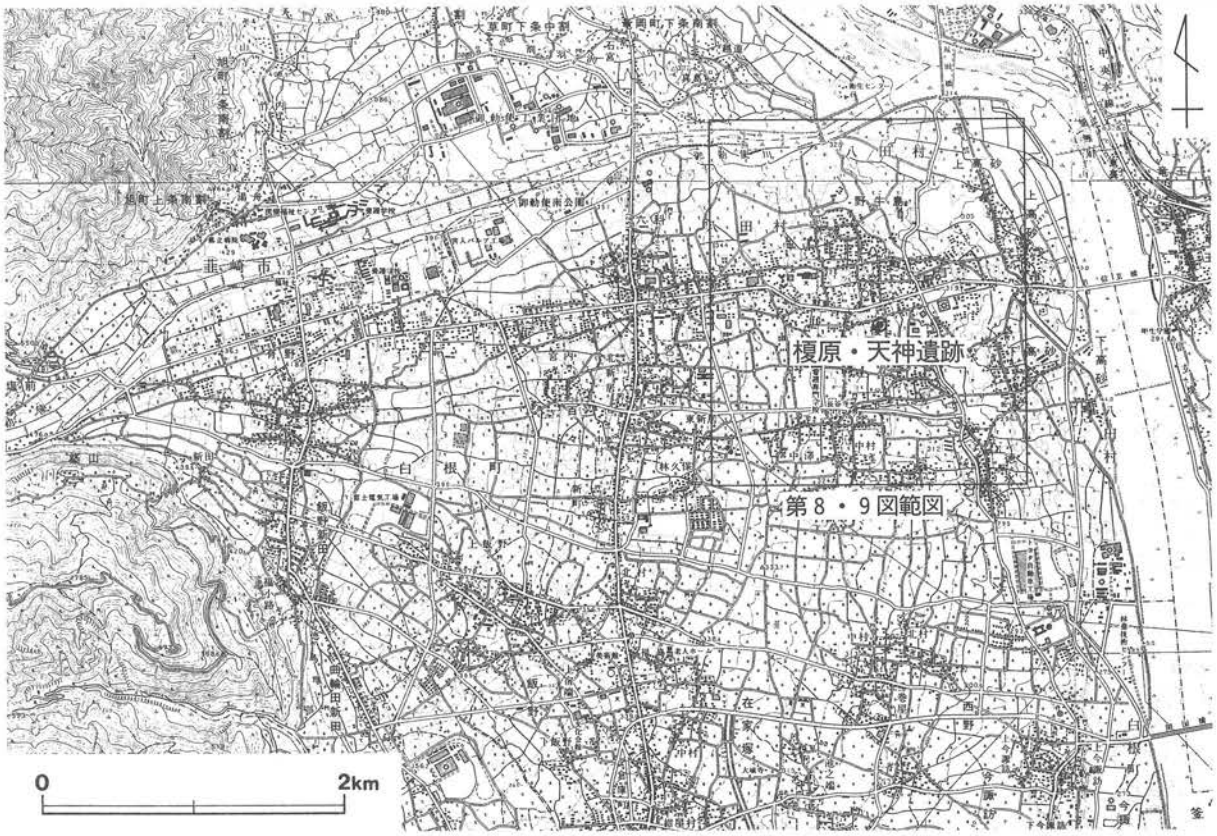
第3図　山梨県地形図（1/100万）（山梨県地形区分図および土地分類図を基に作成）



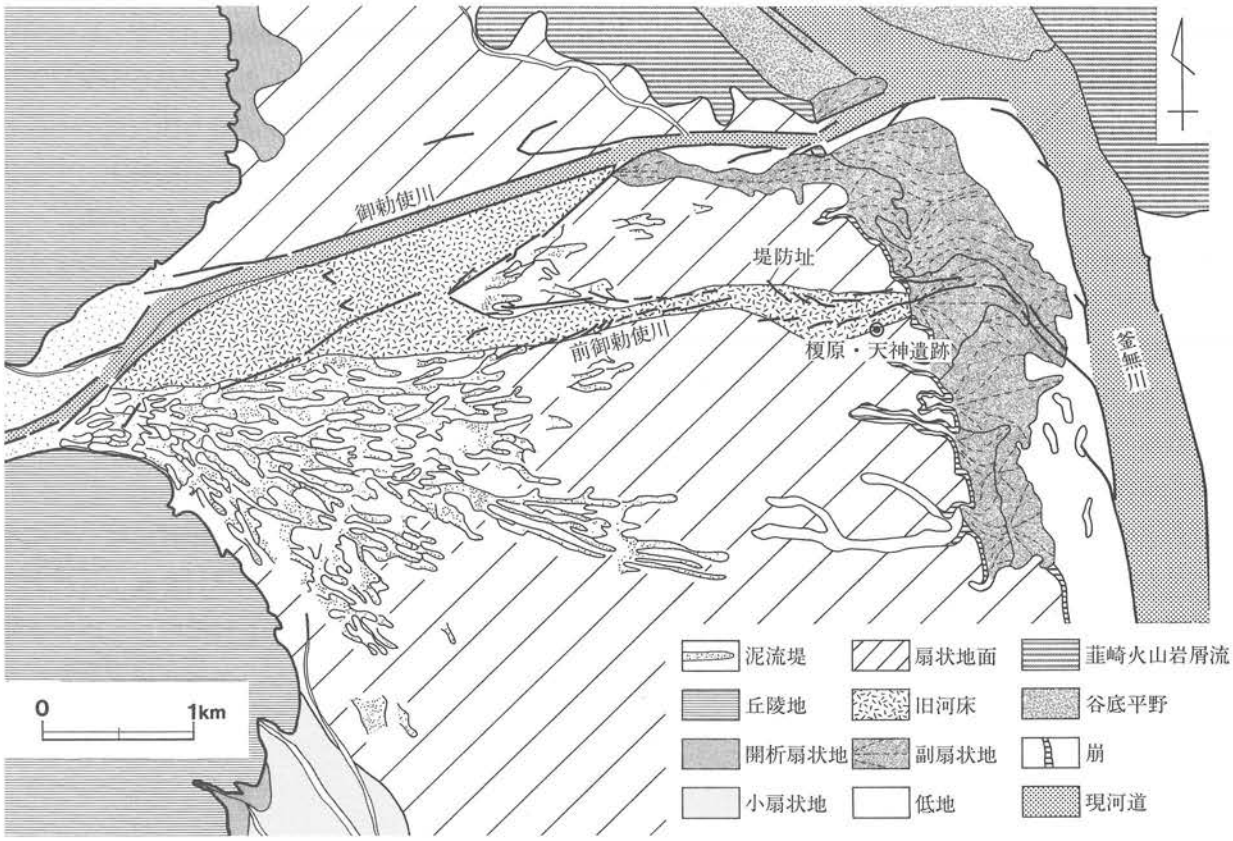
第4図　甲府盆地における扇状地（1/40万）（高木・中山〔1987〕による第1図に加筆修正）



第5図　八田村位置図（1/10万）



第6図　八田村地形図（1/50,000）



第7図　御勅使川扇状地地形分類図（1/50,000）
（高木・中山〔1987〕による第8図を基に山梨県地形分類図・明治21年測量図を考慮し作成）

てよい。なかでも釜無川と笛吹川は他河川と比べ規模が大きな二大河川であり、両河川は流域に広大な沖積平野を生み出している。一方、山地から流れ下る多くの河川は、盆地山麓にそれぞれ大小様々な扇状地を作り出している(第4図)。甲府盆地西部では巨摩山地から御勅使川が東流し、遺跡の立地する御勅使川扇状地が形成されている（第5図)。

(2) 八田村の地形

八田村の地形は御勅使川によって作られた扇状地と釜無川によって形成された沖積低地とに大きく分かれる。村西部は御勅使川扇状地にあたり、西から東へゆるやかに傾斜する扇状地地形が広がっている。一方村東部は、村の東側を南流する釜無川によって御勅使川扇状地の扇端部が削り取られているため、ほぼ平坦な沖積低地となっている。この結果、扇状地と沖積低地の境には、高さ10～20mにもおよぶ崖が形成されており、その崖は両者を区画する境界となっている（第6・7図)。

このように八田村の地形は大きく2つに分かれるが、より細かく地形を見ていくと、沖積低地上には御勅使川の旧流路によって小扇状地が形成されている。(註2) 現在の御勅使川は唐松峠、ドノコヤ峠（1,700m）に源を発し、巨摩山地を流下して白根町塩前付近で平野に入り、八田村の北側を東流して釜無川に合流している。しかし、御勅使川扇状地の名が示すとおり、扇状地は御勅使川が幾度となく河道変更した結果形成された地形であり、御勅使川は固定したルートを流れていたわけではない。御勅使川の前流路は、現在、芦安と竜王を結んでいる県道芦安竜王線であった。明治21年作成の2万分の1の地形図や明治時代に作成された地籍図では、現在の道路が御勅使川の流路として図示されている。一般にこの流路は「前御勅使」と呼ばれ、大正時代に廃河川となるまで機能していた。

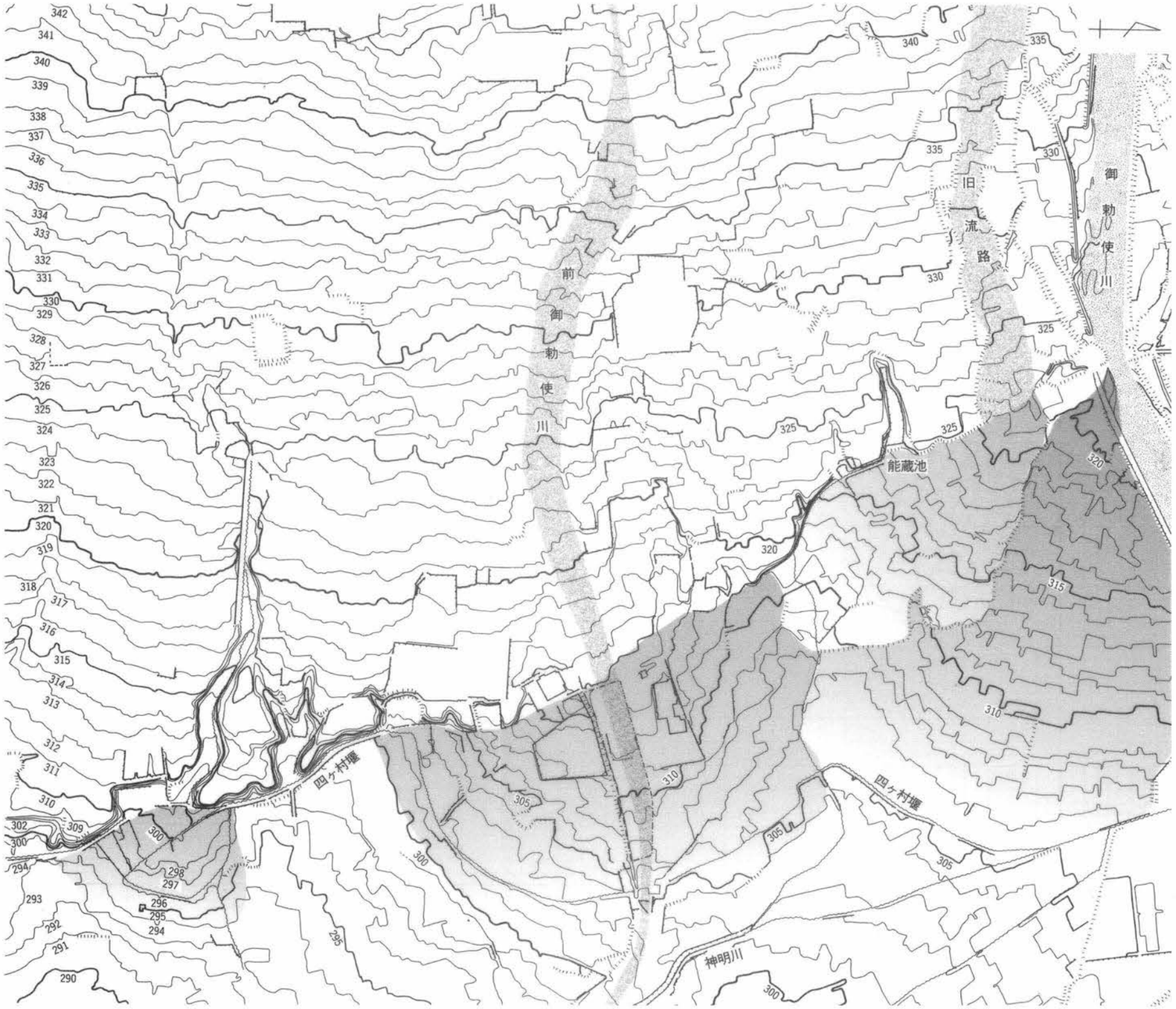
前御勅使川の流路上には扇状地と低地を画する崖線が見られない。それは前御勅使川の運ぶ堆積物が崖線を埋積し、沖積低地上に小規模の扇状地を形成しているからである。こうした旧流路と小扇状地は八田村北部および南部にも見られる。現在の御勅使川よりやや南側に、東西に延びる落ち凹み箇所がある。この落ち込みは、大塚遺跡の中央部で確認された流路跡に通じ、仲田遺跡を埋積して沖積低地上に小扇状地を形成している。地形図を見ると、さらに北側に別の小扇状地が作り出されていることがわかる。(註3) 一方、前御勅使川の南側、長谷寺から東へ下るルート上にも小規模な小扇状地が形成されている。このように沖積低地上には複数の小扇状地が重なり合う複合扇状地が形成されている（第8・9図)。

沖積低地上に形成された小扇状地は、水路や道路、地割りなど現在の土地利用にも大きな影響を与えている。例えば上高砂、下高砂および徳永の集落の重要な水源となっている四ケ村堰は、それぞれの小扇状地の地形に沿って弧を描きながら南流している。また、道路も同様の軌跡をたどり、畑はそれぞれの小扇状地の地形にあわせて放射状に広がっている。

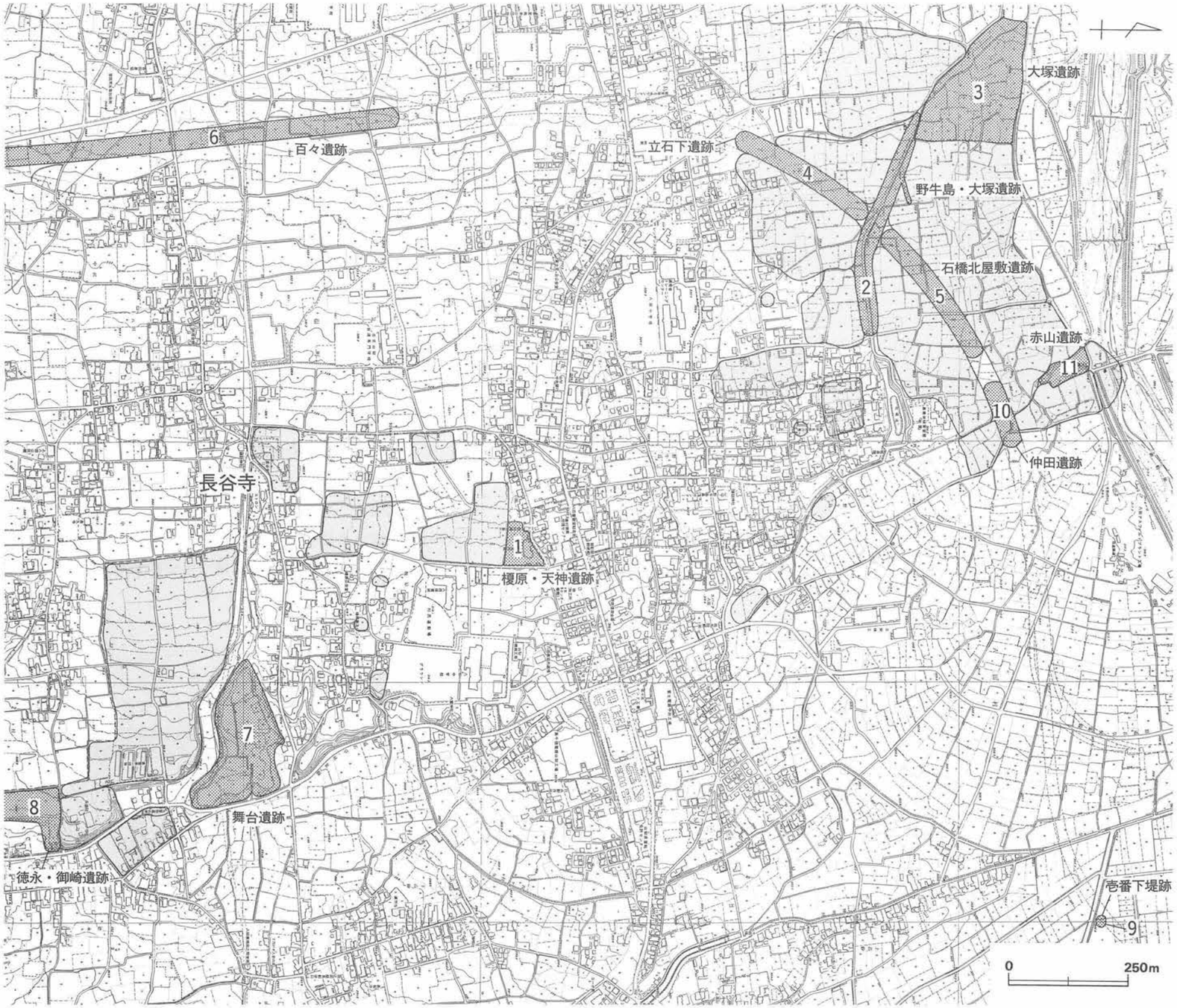
河川の働きによって形成された御勅使川扇状地と沖積低地、小扇状地のほかに、八田村には小規模ながら火山起源の台地も存在する。それは「赤山」と呼ばれる小高い丘で、韮崎と八田村を繋ぐ堀切橋の南側に位置している。今日では御勅使川によって二分されているが、この「赤山」は韮崎市に広がる龍岡台地と本来一続きの台地であり、龍岡台地の南端にほかならない。龍岡台地は八ヶ岳火山の崩壊による韮崎火山岩屑泥流を基盤としている。

(3) 遺跡の立地（第8・9図）

榎原・天神遺跡は、御勅使川扇状地扇央部に位置する。北側には芦安竜王線つまり前御勅使川が東西

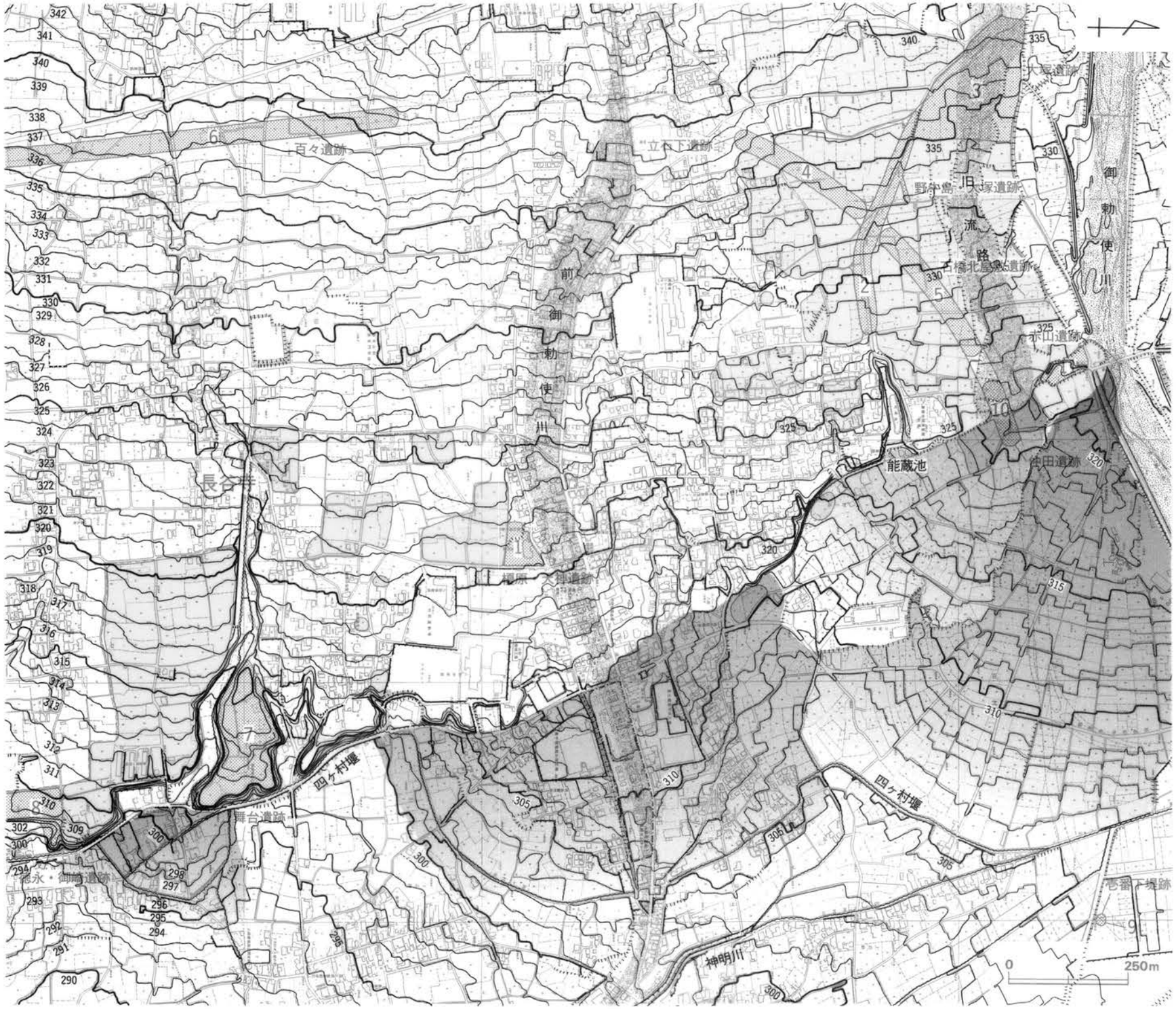


第８図　榎原・天神遺跡周辺地形図（1/10,000）



試掘・調査された遺跡　　分布調査で確認された遺跡

第９図　榎原・天神遺跡および周辺の遺跡位置図（1/10,000）



試掘・調査された遺跡　　分布調査で確認された遺跡

に延び、前御勅使川の南側を守る堤防址が遺跡に隣接している。地形図をみると、遺跡周辺では前御勅使川に沿って等高線が若干東へ張り出しており、自然堤防状の微高地上に遺跡が立地していることがわかる。標高は現地表面の調査区西端で323m、東端で321mを数え、扇状地の地形に従ってゆるやかに東へ傾斜している。

調査区の南側は東から西へ傾斜する扇状地特有の緩斜面が続いている。長谷寺から東の低地へ進むルート上は、扇端部が浸食され小河谷状を呈し、さらに沖積低地上には小扇状地が形成されている。このルートは現在道路となっているが、以前は沢であったという。このルートの西側に等高線の張り出しが認められるため、御勅使川の流路と考えたが、百々遺跡を調査した今福利恵氏から、この地点に平安時代以前の流路跡はないとの御教示を受けた。このため、この小河谷は長谷寺付近から湧出した御勅使川の伏流水によって浸食されたと推定される。

第2節　歴史環境

八田村はこれまで、遺跡の少ない地域として考えられてきた。しかし、工場や甲西バイパスの建設など近年増加した大規模開発に伴って、新たな遺跡が発見され、複数の遺跡で本格調査が行われている。また、平成11年に実施された村内遺跡詳細分布調査では、村内各所に多数の遺跡が発見され、八田村が決して遺跡の空白地ではないことが判明した。(註4) 以下、試掘および本格調査が実施された遺跡を中心に、榎原・天神遺跡周辺の歴史環境を概観していく。

前御勅使川の北側、とくに野牛島地区の御勅使川扇状地上では多数の遺跡が確認され、その内、4遺跡の発掘調査が行われている。野牛島・大塚遺跡（2）は平成11年度、八田村教育委員会が調査を行い、8世紀後半から9世紀中頃の住居址9軒、溝状遺構、畑状遺構などを検出した。(註5) 野牛島・大塚遺跡北

第10図　榎原・天神遺跡と周辺の地割図（1/2,000）

西に位置する大塚遺跡（3）、南の立石下遺跡（4）および北の石橋北屋敷遺跡（5）は甲西バイパス建設に伴い、山梨県埋蔵文化財センターによって調査が実施されている。大塚遺跡では古墳時代前期および8世紀中頃から9世紀中頃の奈良・平安時代の集落址が発見され、[註6] 立石下遺跡では9世紀の住居址を中心として、炭焼き窯、溝状遺構等が検出された。一方、石橋北屋敷遺跡では、8世紀後半の住居址のほか、鎌倉時代とみられる道路状遺構や中世の遺構が調査区北側で発見された。[註7]『八田村誌』によれば、能蔵池の北側が野牛島の集落の発祥地と伝えられている。石橋北屋敷遺跡の出土状況と伝承を考えてみれば、少なくとも中世には能蔵池の北側に野牛島の集落が成立していたと解釈できる。このように、野牛島地区の扇状地北西部には中世村落が位置する一方、扇状地中央部には奈良・平安時代（8世紀中頃から9世紀中頃）の集落が展開していたと考えられる。

野牛島地区から前御勅使川を挟んだ南方の扇状地上からも多数の遺跡が発見されている。本報告書の遺跡である榎原・天神遺跡（1）では10世紀の住居址および畑状遺構、溝状遺構を検出した。榎原・天神遺跡の西方、白根町百々地区に位置する百々遺跡（6）は、平成11～12年度、山梨県埋蔵文化財センターによって調査が行われ、貴重な資料が多数検出されている。遺跡の主体は10世紀代を中心とした平安時代の集落址で、住居址が200軒以上発見されたほか、八稜鏡や石帯、多数の牛馬の獣骨などの遺物が検出された。こうした遺構および出土遺物は、質、量ともに一般集落とは異なる様相を示している。

百々遺跡から東方は遺跡の空白地となっているが、これは遺跡が全くないことを示しているわけではない。扇状地ゆえに地表での遺物採取が困難で、未だ遺跡が確認されていないためと考えられる。八田村の遺跡分布から見た場合、百々遺跡がさらに東へ広がるのは確実であろう。長谷寺周辺の扇央部から東方の扇端部では、分布調査によって多数の遺跡が確認された。とくに崖上の扇端部には舞台遺跡（7）をはじめとして広範囲に広がる遺跡が多い。これは、扇頂から運ばれる土砂が少ないため、遺構確認面が浅く、遺物が広範囲で採取できるためである。このように百々遺跡から扇端部まで多数の遺跡が埋没している可能性があるが、その時代はいつ頃であろうか。発掘調査が行われていないため、正確な年代は摑めない。しかし時代を推定するいくつかの手がかりがある。まず、原七郷の守り神として古来より信仰を受けてきた長谷寺の創建年は、社寺記によると天平年間（729－48）行基の開創と記されている。しかし、それを保証する資料的裏付けはない。建築物から見た場合、本堂は室町時代の特徴を示していることから、少なくとも中世には周辺に集落が成立していたと考えてよいだろう。この周辺の分布調査では、平安時代の土器片が採取された。また、舞台遺跡の試掘調査では、地表から約20cmの地点で、平安時代と推測される住居跡を確認した。こうした調査結果や長谷寺、百々遺跡、榎原・天神遺跡などの立地を考慮すれば、平安時代、この地域に比較的大きな集落が成立していた可能性は高い。また、扇端部に位置する徳永・御崎遺跡（8）では、調査の結果、縄文時代後期の配石遺構が検出された。徳永・御崎遺跡周辺に縄文時代後期の集落が展開していたと考えられる。

沖積低地上でも少ないながら遺跡の調査が行われている。甲西バイパス建設に伴い、上高砂地区に位置する壱番下堤跡（9）が調査され、中世末から近世初頭の堤防跡が発見された。また、御勅使川扇状地と沖積低地の境界に位置する仲田遺跡（10）では、中世の水田跡や諏訪神社への参道と推測される石列などの遺構が発見されている。

仲田遺跡の東方に位置する赤山遺跡（11）は、前述したとおり韮崎火山岩屑泥流を基盤とする龍岡台地上に立地している。調査は行われてはいないが、古くから縄文時代の遺跡として知られ、縄文土器や石斧が採取されている。

（註１）　フォッサマグナを和訳すれば「大きな溝」である。エドムンド・ナウマンによって名付けられ、今日まで重要な地質区分の名称・概念として使用されている。しかしその東端は決定されておらず、その性格・成因についても未だに不明な点が多い。近年、糸魚川・静岡構造線を北アメリカプレートとユーラシアプレートの境界とみなし、２つのプレートの動きにフォッサマグナの成因を求める考え方があるが、なお問題が残されている。

（註２）　高木・中山　1987

（註３）　河西　2000

（註４）　斎藤　1999

（註５）　斎藤　2000

（註６）　新津　1997

（註７）　小林他　2000

引用・参考文献

河西　学　1999　「中部横断道試掘調査のテフラ分析」『研究紀要』15　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

2000　「石橋北屋敷遺跡周辺の地形環境」『石橋北屋敷遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第178集　山梨県教育委員会他

経済企画庁　1973　『土地分類図－山梨県－』

小林健二他　2000　『石橋北屋敷遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第178集　山梨県教育委員会他

斉藤享治　1998　『日本の扇状地』　古今書院

斎藤秀樹　1999　『村内遺跡詳細分布調査報告書』　八田村文化財調査報告書　第１集　八田村教育委員会

2000　『野牛島・大塚遺跡』　八田村文化財調査報告書　第２集　八田村教育委員会他

白根町誌編纂委員会　1969　『白根町誌』　白根町

高木勇夫・中山正民　1983　「甲府盆地西部地域の地形」『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』第18号

1987　「微地形分析よりみた甲府盆地における扇状地の形成過程」『東北地理』39

新津　健　1997　『大塚遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第137集　山梨県教育委員会他

畑　大介他　1998　『山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第152集　山梨県教育委員会他

八田村誌編集委員会　1972　『八田村誌』　八田村

保坂康夫　1999　「御勅使川扇状地の古地形と遺跡立地―中部横断道の試掘調査の成果から―」『研究紀要』15　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

山下　昇他　1995　『フォッサマグナ』　東海大学出版会

山梨県　1984　『国土調査　土地分類基本調査　甲府』

山梨県　1985　『国土調査　土地分類基本調査　御岳昇仙峡』

山梨県　1986　『国土調査　土地分類基本調査　韮崎・市野瀬』

山梨県　1993　『国土調査　土地分類基本調査　大河原・鰍沢』

山梨県教育委員会　1979　『山梨県遺跡地名表』

雄山閣　1968　『甲斐国志』

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

第１節　遺構の調査

(1)　住居址

１号住居址（第11・12・13図、第６表、写真図版２・３・４・11・12・13）

位置　Ｂ－７，８区に位置する。

遺存　遺存状態は比較的良好で、確認面から床面まで約30cmを数える。

形状　長方形プランを呈す。

規模　東西軸は上端で3.8ｍ、下端3.5ｍ、南北軸は上端で3.45ｍ、下端3.3ｍを測る。

床面　橙色と乳白色が混じった色調である。北側が南側と比較してわずかに高くなっている。硬化面はおもに住居中央～東側で検出したが、硬化面の明確な範囲は確認できなかった。

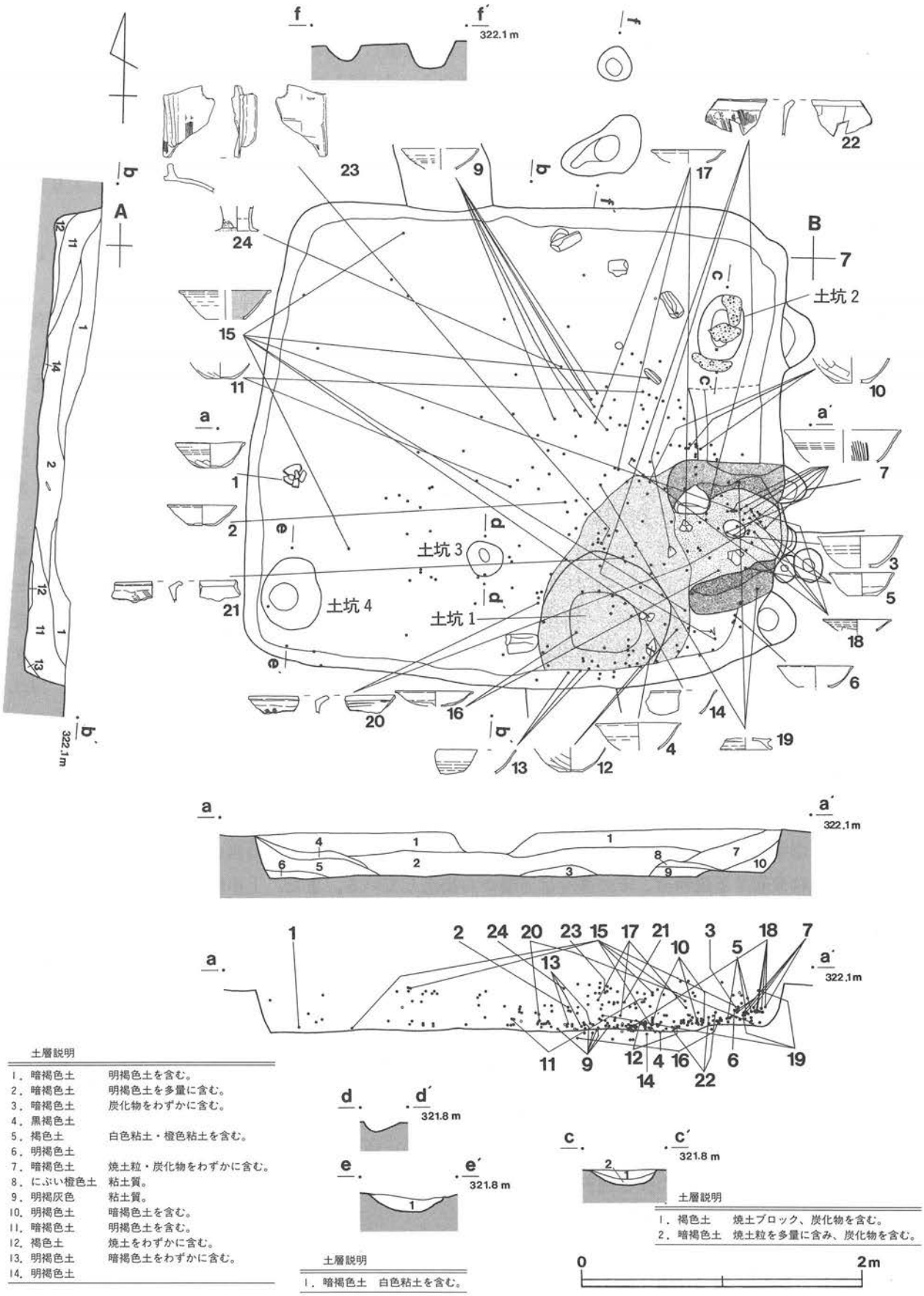
柱穴／壁溝　確認できなかった。

竈　東壁やや南よりの位置に造られている。天井部および袖上部は残存していない。袖はおもに明褐色粘土で造られ、北側の袖には心材として幅約35cm、長さ約80cmの矩形の石がやや南側に傾斜して埋め込まれていた。南側の袖では石を発見できなかったが、床面を精査した結果、石の抜き取り痕と推測される小さなピットを発見した。この小ピットに石が埋め込まれていた可能性がある。支脚には楕円形の川原石が用いられており、表面はうっすらと赤みがかり、火を受けた痕跡をとどめていた。支脚の上面および側面からは坏片が貼り付いた状態で検出された。調査時には１個体の坏を支脚に被せたものと考えたが、整理作業の結果、２個体の坏片であることが判明した。この２個体の坏片は、竈内から出土した別の坏片と接合するが、支脚上の２片だけはうっすらと黒みがかり、軽く熱を受けた痕跡が見られた。この被熱痕は非常に薄いため、竈使用時に何度も繰り返し焼かれてできたものとは考えにくい。こうした点を考えると、竈廃絶時に、２片の坏片は支脚上に置かれ、その後熱を受けたものと推測される。

土坑　１号住居址では、住居内で４基の土坑を発見した。以下、土坑１～４についてそれぞれ記述してゆく。

土坑１　竈南側に隣接して掘り込まれた、いわゆる「貯蔵穴」と呼ばれる土坑である。長軸（東西）が約95cm、短軸（南北）が85cm、深さ約12cmを測る。土坑の上層には、竈からの流失土と考えられる炭化物を多量に含んだ黒褐色土層が広範囲に堆積していた。一方、土坑内に第１層の堆積は認められず、暗褐色土と乳白色粘土をベースとした、焼土、炭化物を含んだ第２層が堆積していた。こうした土層堆積は、竈廃棄時に、土坑１がすでに２層によって埋没していたことを示唆する。なぜなら、住居廃棄時にもし土坑が埋まっていないならば、黒褐色土は土坑内の下層に堆積するはずだからである。また、土坑１は竈の袖に接するほど非常に大きく、仮にそのままの大きさで利用されたと考えると、竈を使用する時にあまりにも邪魔となる。以上の点から、竈廃棄時には、土坑１は少なくとも一部、あるいはすべて埋められた状態であったと推測される。

土坑２　住居北東隅で小さな土坑を検出した。明確な掘り方がなく本来は不整形な形状である。長軸（南北）48cm、短軸（東西）32cm、深さ10cmを測る。この土坑上からは焼土ブロックおよ



土層説明

1.	暗褐色土	明褐色土を含む。
2.	暗褐色土	明褐色土を多量に含む。
3.	暗褐色土	炭化物をわずかに含む。
4.	黒褐色土	
5.	褐色土	白色粘土・橙色粘土を含む。
6.	明褐色土	
7.	暗褐色土	焼土粒・炭化物をわずかに含む。
8.	にぶい橙色土	粘土質。
9.	明褐灰色	粘土質。
10.	明褐色土	暗褐色土を含む。
11.	暗褐色土	明褐色土を含む。
12.	褐色土	焼土をわずかに含む。
13.	明褐色土	暗褐色土をわずかに含む。
14.	明褐色土	

土層説明

1. 暗褐色土　白色粘土を含む。

土層説明

1. 褐色土　焼土ブロック、炭化物を含む。
2. 暗褐色土　焼土粒を多量に含み、炭化物を含む。

第11図　1号住居址平・断面図（1/40）

び炭化物がまとまって出土した。覆土は焼土、炭化物を含む褐色土である。焼土ブロックは直に土坑床面に接しておらず、間には褐色土が堆積していた。また、床面にはかすかな焼け跡が見られたものの顕著な焼土面は検出できなかった。以上の点から、焼土ブロックや炭化物はこの土坑で生じたのではなく、竈の構築材がこの土坑にまとめられた可能性を考えておきたい。

土坑３　住居中央やや南よりの地点から、直径約25cm、深さ８cmの小さな円形土坑を検出した。土坑の覆土は、土坑１の上層を覆っていた土と同じ黒褐色土である。土坑の位置から入り口施設などの役割が推定されるが、断定できる資料は発見できなかった。

土坑４　住居南西隅で楕円形の土坑を検出した。長軸（南北）52cm、短軸（東西）43cm、深さ10cmを数える。

棚状施設　竈の北側に隣接して棚状施設を検出した。現存幅で東西45cm、南北60cmを測る。調査時の掘りすぎのため正確な北端は不明だが、すぐ北側には土坑２が位置しているため、さらに北側へ大きく延びることはないと考えられる。形状は矩形で、地山を掘り残して造られている。棚の高さは床面から10cm前後を数え、棚の上面は若干西側へ傾斜している。

棚状施設の西側には白色粘土が堆積していた。調査時には竈袖の流れ込みと考えたが、この付近の遺物分布を調べた結果、白色粘土層上面に遺物が並ぶことが判明した。これらのことから、地山で造られた棚状施設が、粘土を用いて西側へ拡張されていた可能性がある。

遺物　出土した遺物の量は非常に多い。出土地点を記録した資料だけでも、270点に及ぶ。とくに甲斐型の坏片が多い。１～14は甲斐型坏である。全体的に摩耗が進んでおり、体部下半のヘラケズリは、１、２、８、10、11、12でのみ認められた。７と８には内面にかすかな暗文を確認できた。３と７は支脚上から出土した坏片で、器面はうっすらと黒く、熱を受けた痕跡が見られる。15は内黒の坏、16、17、18は甲斐型の皿で、体部下半にヘラケズリが施されている。19は高脚高台付坏の脚部である。20、21、22は甲斐型の甕である。23は峡西地域では出土例が少ない置竈型土器である。24は長頸壷の肩部で、外面に緑釉が付着している。

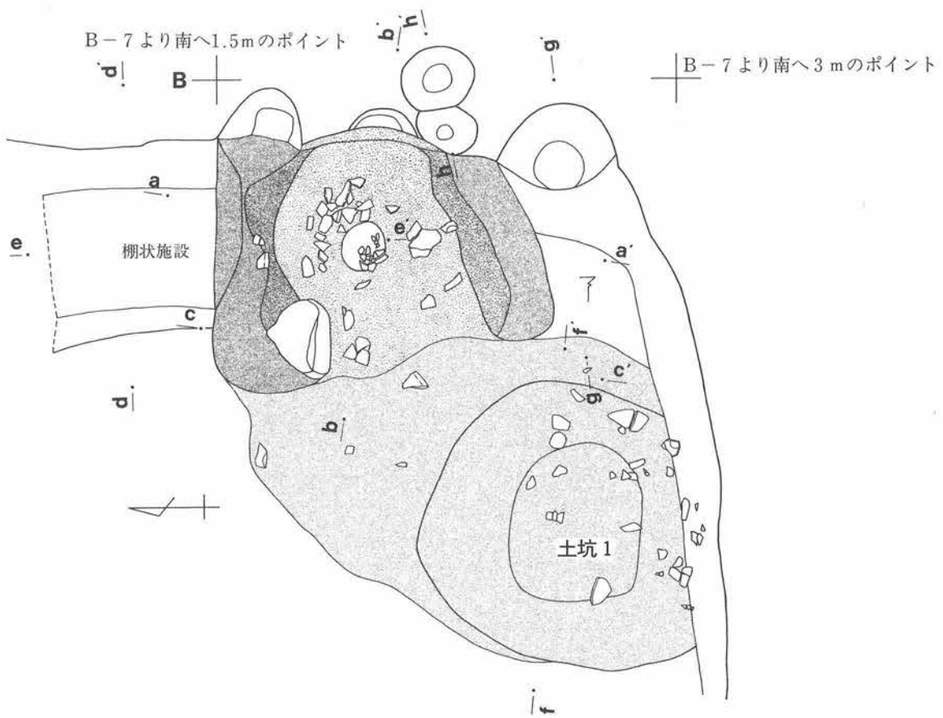
出土状況　平面上の遺物分布を概観すれば、竈を中心として住居址南西側に遺物が集中している。とくに竈内部、土坑１内、棚状施設の西側からまとまって出土した。遺物分布を垂直方向から見た場合、遺物は上層から下層まで多数出土したが、とくに下層に多い。上述した３カ所の位置に分布する遺物も、その多くは下層から出土している。また、上中層の遺物を平面でみてみると、垂直、水平の遺物分布にある程度のまとまりがあり、いくつかのグループに分かれる。このように、１号住居では遺物の水平分布のまとまりと垂直分布のまとまりがある程度対応していると考えられる。なお、１号住居の遺物分布については、第Ⅴ章にまとめているので参照していただきたい。

時期　宮ノ前Ⅷ～Ⅸ期に比定される。

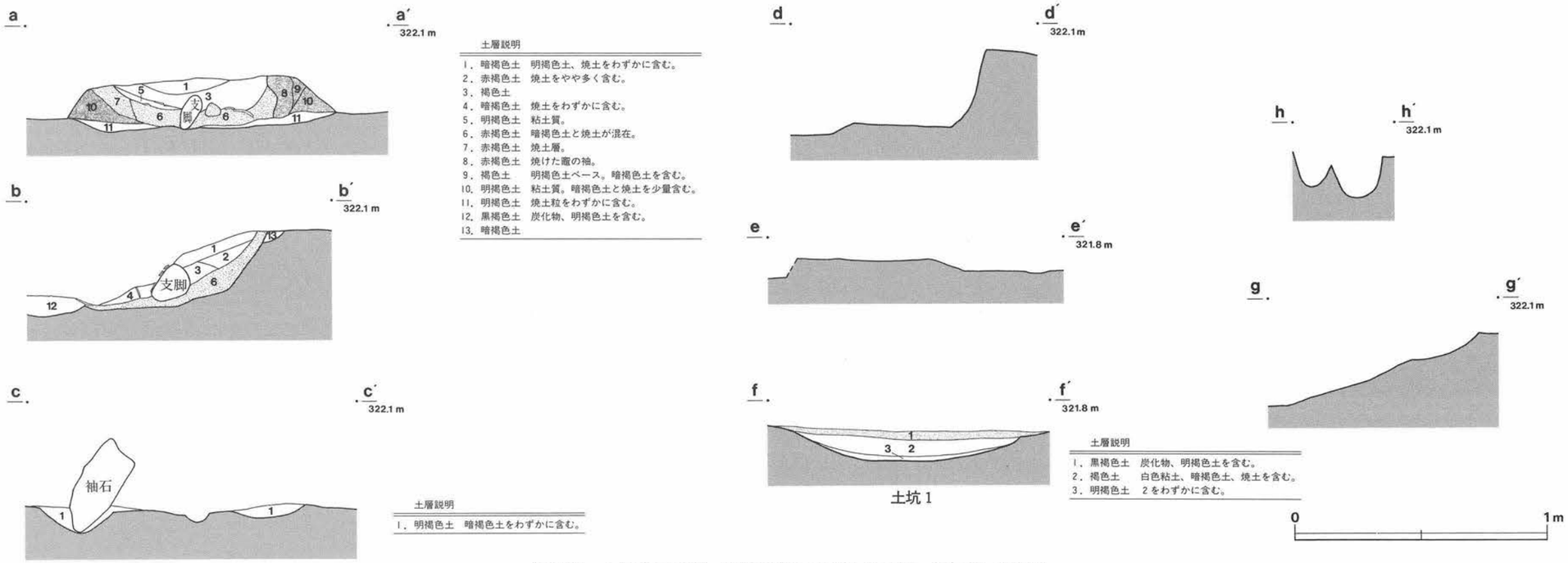
備考　竈南側にはピット状の張り出しがある。このピットと住居址の覆土には顕著な差が認められなかったため、ピットが住居に伴う遺構である可能性がある。また、このピットの西側は、垂直に落ち込むのではなく、なだらかに傾斜し床面に続いている。土器の出土状況からは、この傾斜に盛土を用いた棚状施設を示唆する証拠は得られなかったが、調査時土層の確認をしていなかったため、その判断はできない。

２号住居址（第14・15・16図、第７表、写真図版４・５・13・14）

位置　Ｇ，Ｈ－６，７区に位置する。



竈堀方平面図



土層説明

1．暗褐色土　明褐色土、焼土をわずかに含む。
2．赤褐色土　焼土をやや多く含む。
3．褐色土
4．暗褐色土　焼土をわずかに含む。
5．明褐色土　粘土質。
6．赤褐色土　暗褐色土と焼土が混在。
7．赤褐色土　焼土層。
8．赤褐色土　焼けた竈の袖。
9．褐色土　明褐色土ベース。暗褐色土を含む。
10．明褐色土　粘土質。暗褐色土と焼土を少量含む。
11．明褐色土　焼土粒をわずかに含む。
12．黒褐色土　炭化物、明褐色土を含む。
13．暗褐色土

土層説明

1．明褐色土　暗褐色土をわずかに含む。

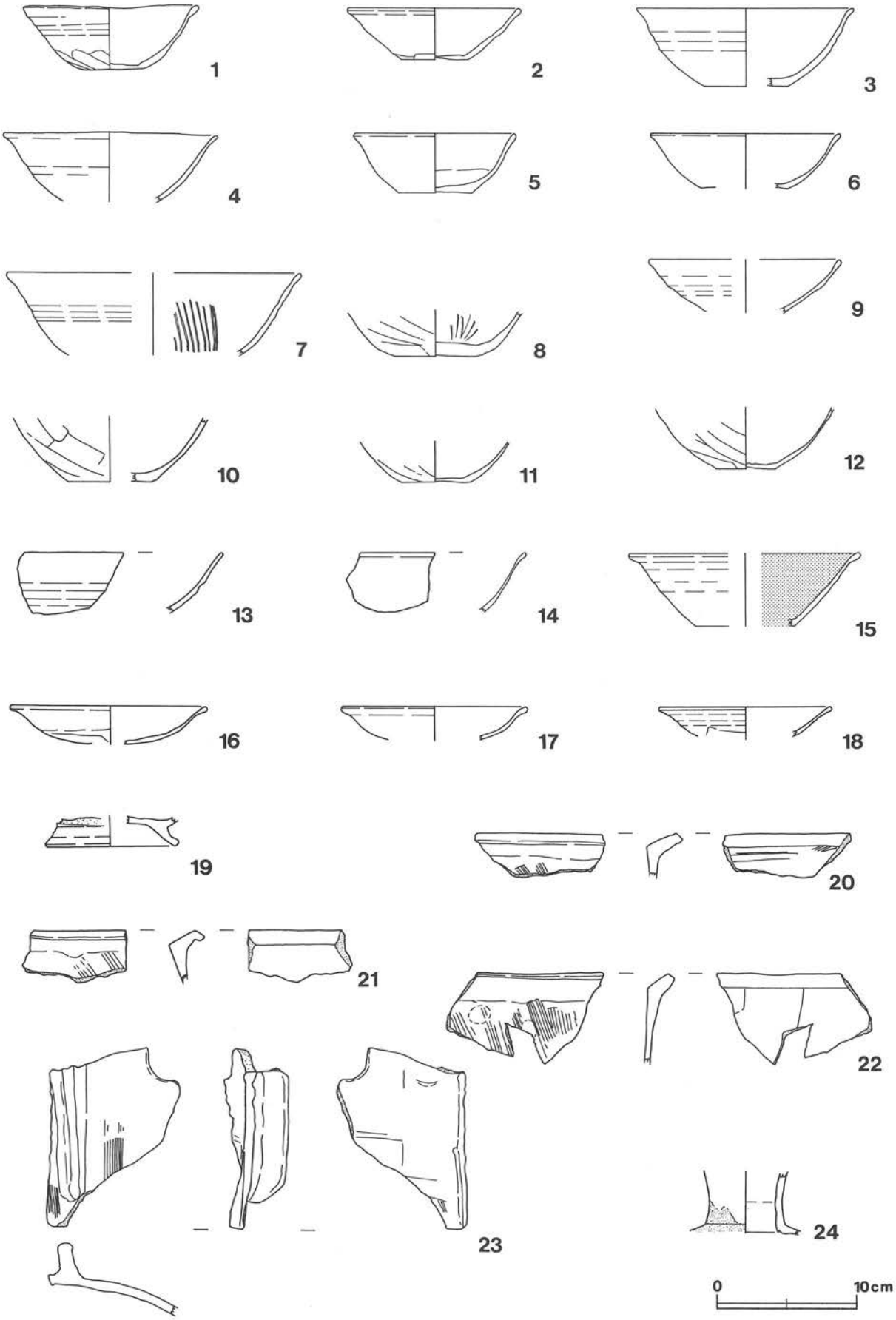
土坑1

土層説明

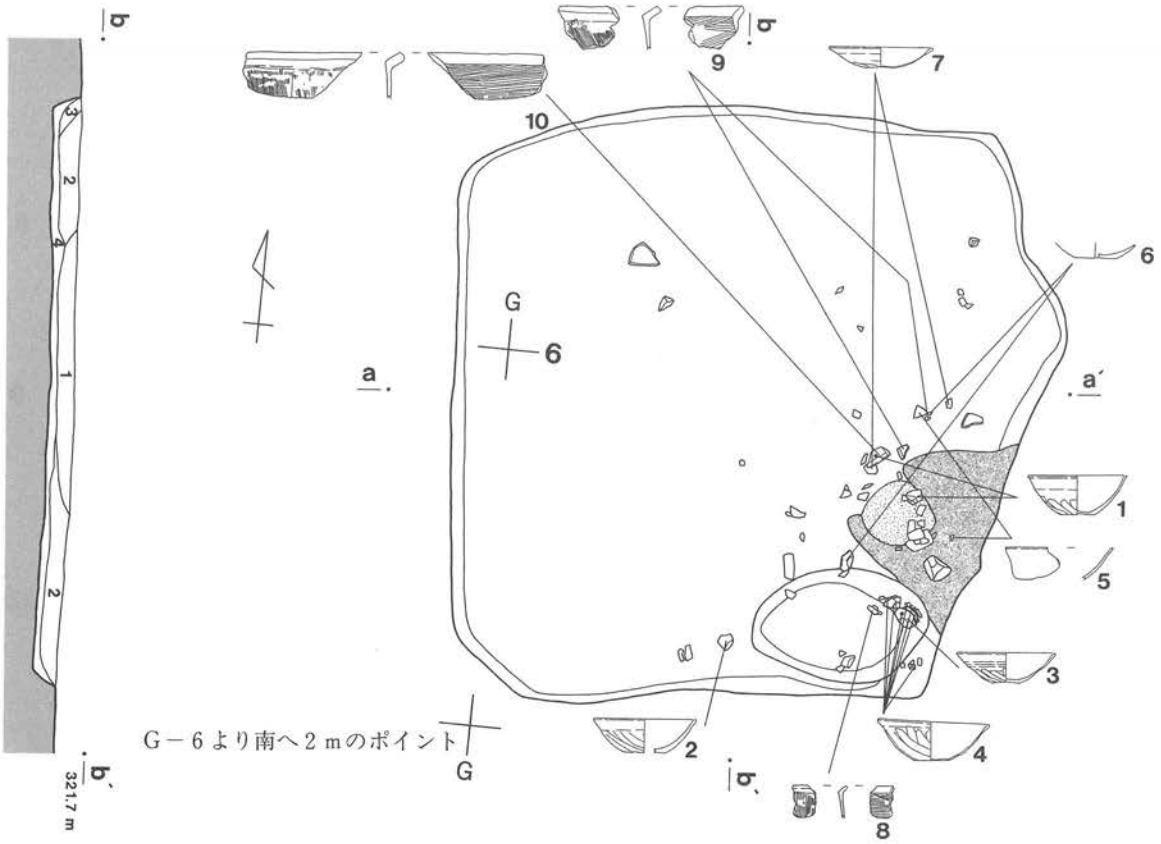
1．黒褐色土　炭化物、明褐色土を含む。
2．褐色土　白色粘土、暗褐色土、焼土を含む。
3．明褐色土　2をわずかに含む。

0　1m

第12図　1号住居址竈・棚状施設および土坑1平・断面図（1/20）

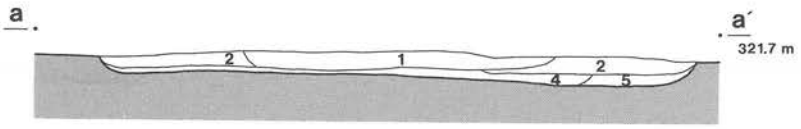


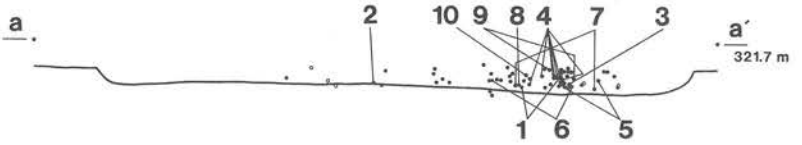
第13図　1号住居址出土遺物（1/4）



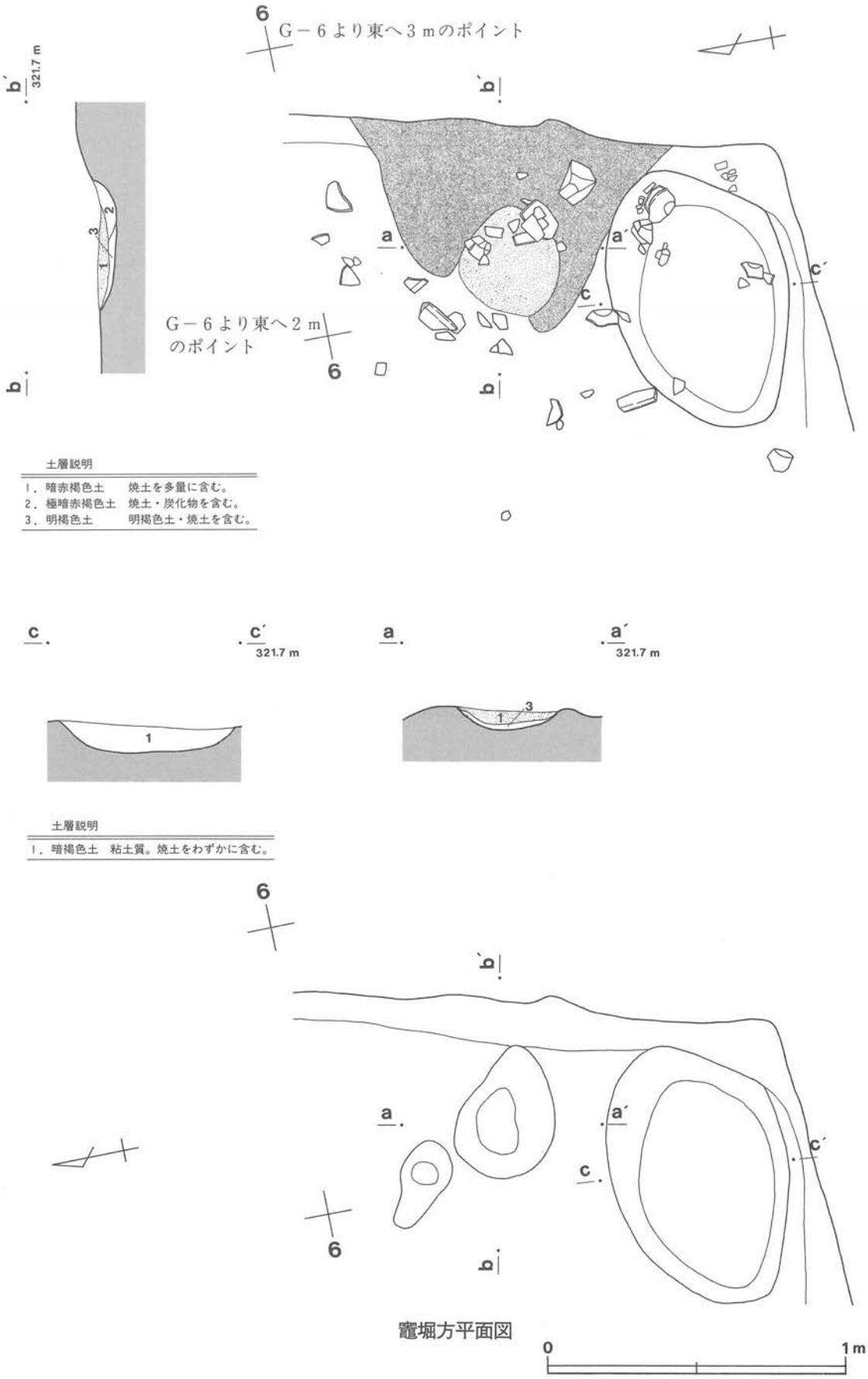
土層説明

1.	暗褐色土	明褐色土をわずかに含む。
2.	暗褐色土	明褐色土を少量含む。
3.	暗褐色土	明褐色土をやや多く含む。
4.	褐色土	明褐色土を多く含む。
5.	暗褐色土	色調がやや暗い。

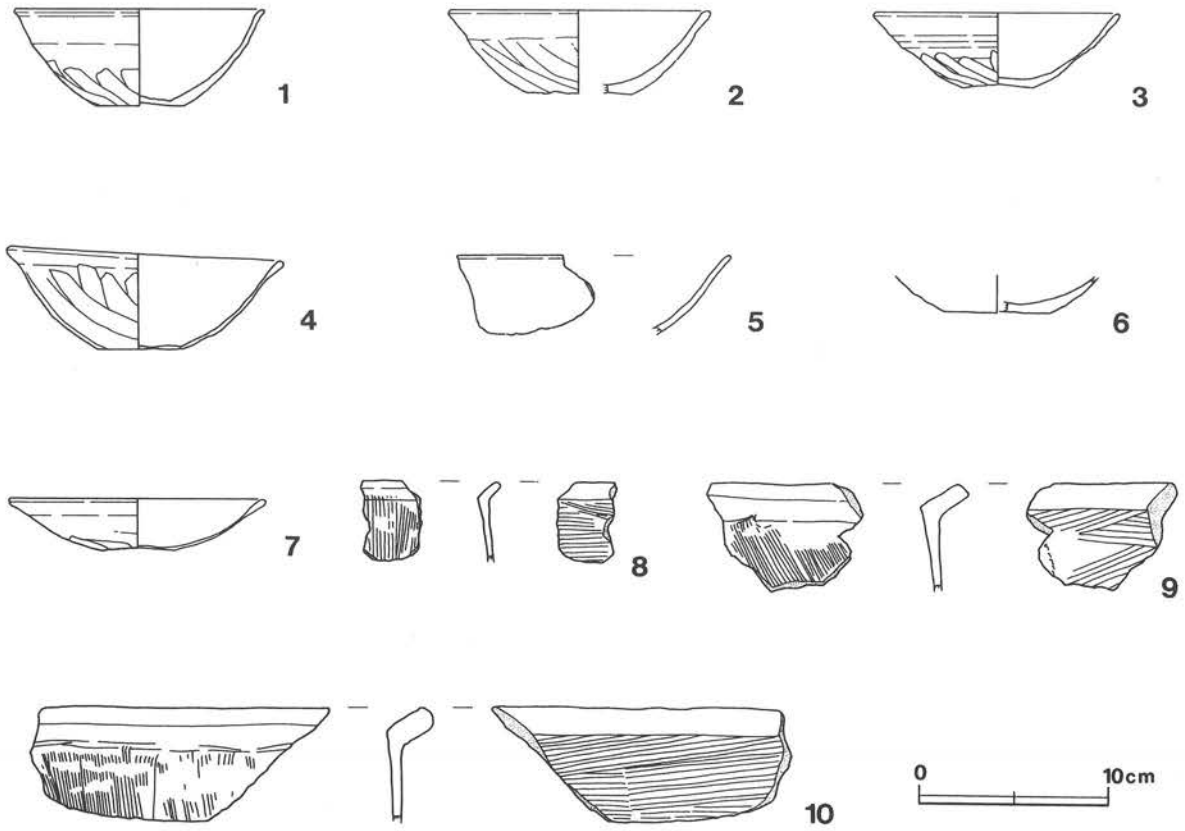




第14図　2号住居址平・断面図（1/40）



第15図　2号住居址竈平・断面図（1/20）



第16図　2号住居址出土遺物（1/4）

遺存　遺構上部はすでに削平されており、遺存状態は良好ではない。確認面から床面までの高さは約15cmを数える。

形状　東壁の北側がやや張り出す不整形な正方形プランを呈す。

規模　東西軸は上端で3.0m、下端2.8m、南北軸は上端で3.1m、下端3.0mを数える。

床面　顕著な硬化面は確認できなかった。

柱穴／壁溝　確認できなかった。

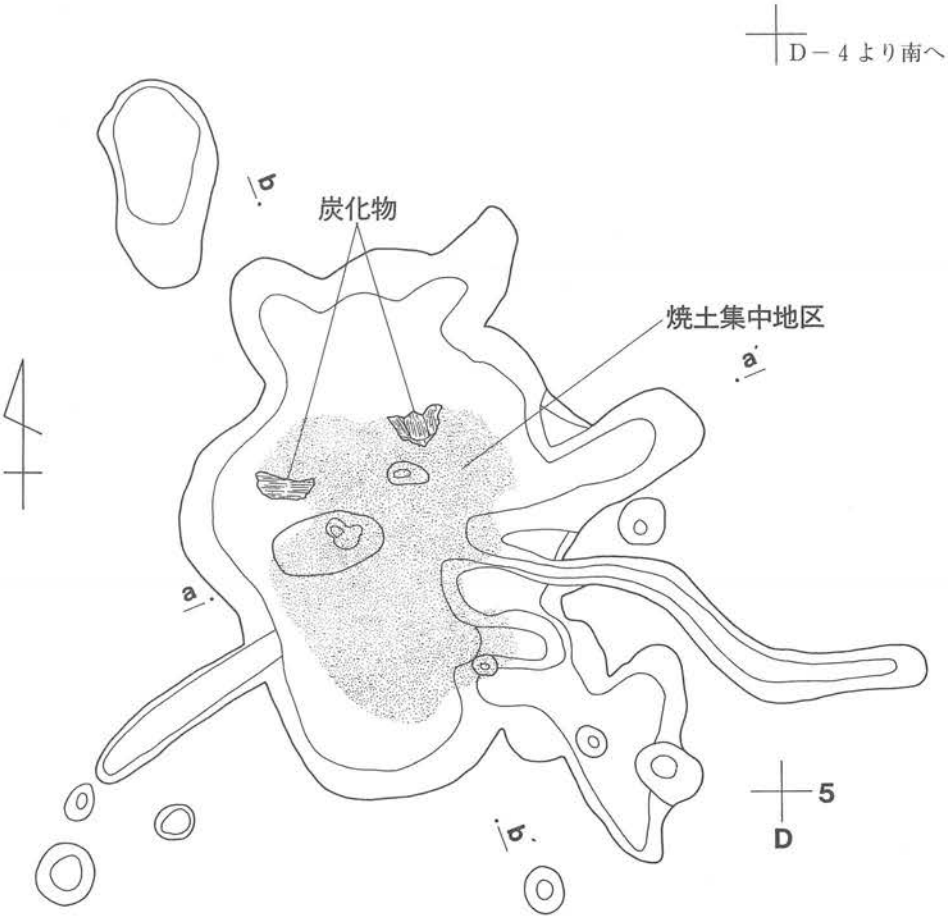
竈　東西の中心軸から南よりの東壁に構築されている。天井部や袖の上部はすでに削平されており残存していない。袖は地山を掘り残し、さらに明褐色土を用いて造られている。

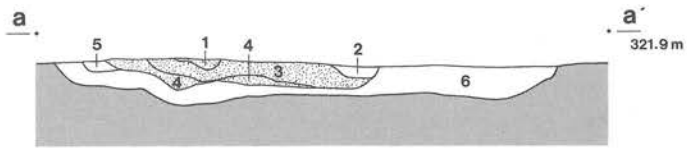
土坑　竈の南側に隣接して掘り込まれている。長軸（東西）が約92cm、短軸（南北）が60cm、深さ約9cmを数える。覆土には焼土を含む暗褐色土が堆積していた。

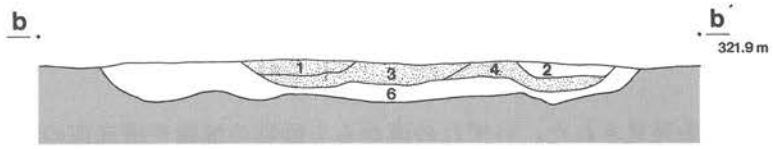
遺物　器種は土師器（はじき）の坏片が多い。須恵器（すえき）は外面に叩きが施された甕片が1点のみ出土した。1～6は甲斐型の坏で体部下半にはヘラケズリが施されている。6は摩耗が激しい。7は甲斐型の皿で、破片の1片が黒く焼けていた。割れてから熱を受けたと考えられる。8～10は甲斐型の甕である。

出土状況　平面上の遺物分布を概観すれば、竈および土坑周辺に遺物が集中し、住居址北側と西側にかけてはほとんど遺物は検出されなかった。そのため土器の接合関係は、竈周辺に限定された。

時期　甲斐型坏からみて宮ノ前Ⅷ～Ⅸ期に比定される。







土層説明

1.	暗褐色土	褐色土と焼土が混在。
2.	明褐色土	
3.	赤褐色土	焼土層。炭化物をやや多く含む。
4.	暗褐色土	焼土層。
5.	明褐色土	焼土、炭化物をわずかに含む。
6.	褐色土	やや砂質。地山と類似。

第17図　焼土遺構平・断面図（1/40）

(2) 焼土遺構（第17図、写真図版６・９）

位置　１号ピット群の北東、Ｄ，Ｅ－５，６区に位置する。

形状／規模　遺構の形状は不定形である。遺構中央に焼土が10cm前後堆積していた。上面でははっきりとしたプランが摑めなかったため、ベルトを設定して掘り進めたが、地山と覆土の差がわずかで明瞭な掘りこみは確認できなかった。

遺物　焼土中から30×10cmと20×30cmの炭化物片および炭化物の細片を検出した。これらの炭化物を微細物分析した結果、ブナ属とコナラ属コナラ亜属クヌギ節が１点ずつ同定された。

(3) ピット群（第１・２表）

ほとんどの土坑の性格が不明なため、本調査では土坑状の遺構を全てピットとし番号を与えた。ピットはＢ，Ｃ，Ｄ－５，６，７区とＧ－１，２，３区からまとまって検出されたため、それぞれ１号ピット群、２号ピット群とし、以下に概要を記す。そのほかのピットや個々のピットについては計測表を参照されたい。

１号ピット群（第18図、写真図版９）

位置　Ｂ，Ｃ，Ｄ－５，６，７区に位置する。

形状／規模　多くのピットが集中して検出された。中でも30cm以下の比較的小さなピットが多い。ピットの配置を見ると、柱穴が一定の間隔を保ち矩形に並ぶ掘建柱建物址は想定できないものの、楕円形状に配列している可能性がある。また、焼土遺構に隣接しているが、遺物など両者の関係を示す証拠がないため、焼土遺構とピット群との具体的な関係は不明である。

遺物　出土していない。

２号ピット群（第19図）

位置　Ｇ－１，２，３区に位置する。

形状／規模　直径30cm前後の比較的小さなピットがまとまって検出された。確認した範囲では、掘建柱建物址などを示唆するような、規則性のあるピットの配列は見られない。

遺物　出土していない。

(4) 溝状遺構

本調査では溝状遺構が合計10条発見された。いずれの溝からも砂利の堆積や溝底面の酸化など、水が流れた直接的な痕跡は確認できなかった。

１号溝（第20・21図、写真図版６・７）

位置　Ｂ～Ｏ－４～９区に位置する。

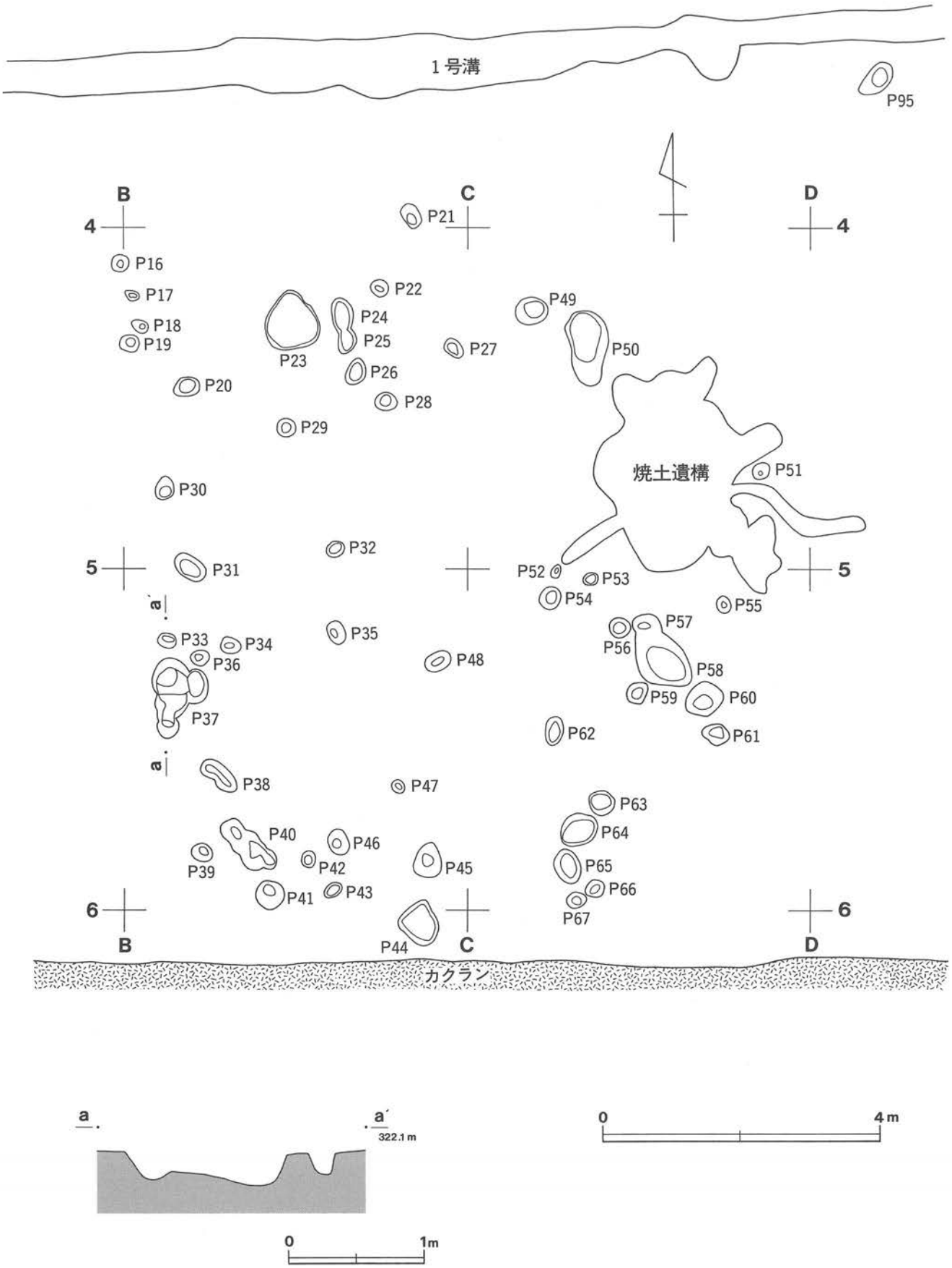
形状／規模　幅35～100cm前後、深さ約45cmを数える。南から北へ延び、Ｂ－４区地点で90度方向を変え東へ延びる。方向は現在の畑の地割りとほぼ一致する。底面標高は南端で321.822ｍ、溝が方向を変えるＢ－４区で321.907ｍ、東端で320.577ｍを測る。断面形態は逆台形型である。Ｍ－

第1表　ピット計測表（第2・18・19図）

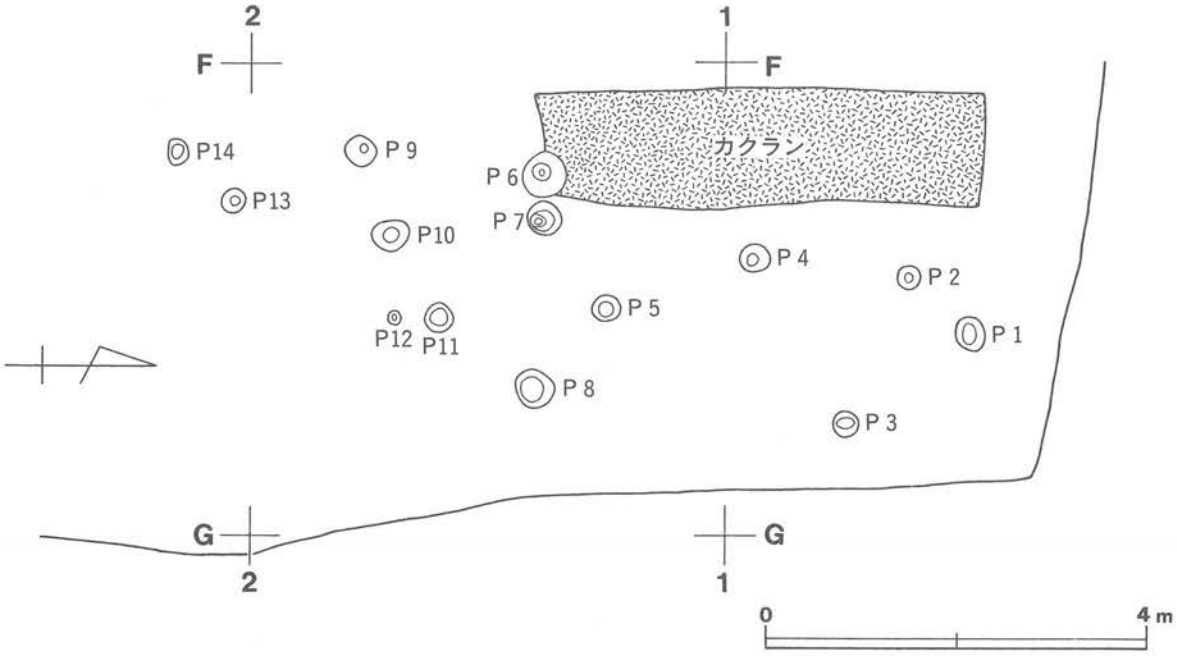
番号	グリッド	形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備　　考
1	G－1	円　形	40	35	11	321.49	2号ピット群
2	G－1	円　形	25	25	12	321.49	2号ピット群
3	G－1	円　形	28	27	7	321.51	2号ピット群
4	G－1	円　形	33	31	17	321.44	2号ピット群
5	G－2	円　形	30	28	20	321.37	2号ピット群
6	G－2	円　形	49	48	29	321.29	2号ピット群
7	G－2	円　形	37	36	25	321.32	2号ピット群
8	G－2	円　形	43	38	27	321.29	2号ピット群
9	G－2	円　形	32	31	20	321.33	2号ピット群
10	G－2	円　形	39	34	19	321.34	2号ピット群
11	G－2	円　形	30	30	14	321.41	2号ピット群
12	G－2	円　形	15	15	5	321.48	2号ピット群
13	G－3	円　形	27	23	13	321.35	2号ピット群
14	G－3	円　形	29	22	4	321.43	2号ピット群
15	B－4	楕円形	47	36	6	322.04	
16	B・C－5	円　形	26	25	10	321.89	1号ピット群
17	C－5	楕円形	21	15	7	321.91	1号ピット群
18	C－5	楕円形	27	19	11	321.86	1号ピット群
19	B・C－5	円　形	29	27	5	321.92	1号ピット群
20	C－5	楕円形	40	28	6	321.88	1号ピット群
21	C－4	楕円形	37	25	17	321.71	1号ピット群
22	C－5	円　形	26	25	9	321.78	1号ピット群
23	C－5	不整形	87	77	10	321.82	1号ピット群
24	C－5	－	－	33	6	321.82	1号ピット群
25	C－5	－	－	28	8	321.80	1号ピット群
26	C－5	楕円形	41	28	9	321.79	1号ピット群
27	C－5	楕円形	32	23	7	321.80	1号ピット群
28	C－5	円　形	33	28	5	321.82	1号ピット群
29	C－5	円　形	28	28	9	321.82	1号ピット群
30	C－5	楕円形	33	27	7	321.85	1号ピット群
31	C－5・6	楕円形	48	31	18	321.74	1号ピット群
32	C－5	円　形	26	23	8	321.82	1号ピット群
33	C－6	円　形	26	21	15	321.76	1号ピット群
34	C－6	円　形	30	25	16	321.74	1号ピット群
35	C－6	楕円形	46	25	9	321.80	1号ピット群
36	C－6	円　形	30	24	22	321.69	1号ピット群
37	C－6	不整形	118	80	24	321.67	1号ピット群
38	C－6	不整形	63	27	7	321.86	1号ピット群
39	C－6	円　形	30	27	8	321.84	1号ピット群
40	C－6	不整形	98	24	10	321.82	1号ピット群
41	C－6	円　形	43	41	13	321.79	1号ピット群
42	C－6	円　形	25	21	6	321.84	1号ピット群
43	C－6	楕円形	30	22	5	321.85	1号ピット群
44	C－6・7	不整形	60	49	8	321.81	1号ピット群
45	C－6	楕円形	51	38	15	321.73	1号ピット群
46	C－6	楕円形	40	30	16	321.74	1号ピット群
47	C－6	円　形	20	17	9	321.80	1号ピット群
48	C－6	楕円形	40	30	17	321.70	1号ピット群
49	D－5	円　形	45	40	12	321.72	1号ピット群

第２表　ピット計測表（第２・18・24図）

番号	グリッド	形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	備　　考
50	D－5	不整形	111	53	11	321.64	１号ピット群
51	D－5	円　形	25	25	9	321.62	１号ピット群
52	D－5	楕円形	21	14	7	321.73	１号ピット群
53	D－6	円　形	21	20	4	321.75	１号ピット群
54	D－6	円　形	32	32	10	321.70	１号ピット群
55	D－6	円　形	25	21	4	321.69	１号ピット群
56	D－6	円　形	31	29	11	321.75	１号ピット群
57	D－6	－	42	－	8	321.78	１号ピット群
58	D－6	楕円形	－	70	10	321.76	１号ピット群
59	D－6	円　形	35	29	7	321.78	１号ピット群
60	D－6	円　形	59	53	14	321.69	１号ピット群
61	D－6	楕円形	42	31	10	321.72	１号ピット群
62	D－6	楕円形	43	29	7	321.81	１号ピット群
63	D－6	円　形	39	35	6	321.81	１号ピット群
64	D－6	楕円形	58	47	7	321.80	１号ピット群
65	D－6	楕円形	51	38	9	321.78	１号ピット群
66	D－6	円　形	30	25	8	321.78	１号ピット群
67	D－6	円　形	30	25	6	321.80	１号ピット群
68	A－7	不整形	27	20	9	322.08	
69	A－8	楕円形	38	30	12	322.09	
70	A－8	円　形	42	39	8	322.07	
71	A－8	楕円形	37	32	18	321.91	
72	A－8	円　形	46	44	13	322.06	
73	A－8	円　形	28	26	12	322.04	
74	A－8	円　形	24	24	8	322.13	
75	A－8・9	円　形	25	24	9	322.09	
76	B－9	楕円形	41	21	11	321.96	
77	B－7	円　形	25	25	11	321.85	
78	B－7	不整形	64	35	19	321.79	
79	B・C－8	楕円形	57	40	10	321.90	
80	B－8・9	－	－	39	8	321.95	
81	B・C－9	不整形	72	30	13	321.90	
82	C－9	不整形	72	34	25	321.76	
83	C－7・8	楕円形	27	17	11	321.86	
84	C－7	－	－	－	7	321.89	
85	C－7	円　形	40	35	10	321.83	
86	C－7	円　形	28	26	9	321.84	
87	D－7	円　形	36	35	7	321.78	
88	D－8	円　形	40	35	12	321.79	
89	D－8	円　形	27	24	13	321.76	
90	E－8	円　形	24	21	12	321.62	
91	G－9	円　形	30	26	12	321.46	
92	G－9	円　形	27	25	11	321.48	
93	G－9	円　形	30	25	13	321.48	
94	D－7	不整形	125	－	24	321.66	
95	E－4	楕円形	60	35	15	321.60	
96	G・H－4	楕円形	53	38	22	321.29	
97	J－4	－	－	70	9	321.24	



第18図　1号ピット群平・断面図（1/40・1/80）



第19図　2号ピット群平面図（1/80）

4区の溝底には、地山を掘り残してステップ状の遺構が造られている。東西幅約40cm、床面からの高さは約12cmを数える。本溝の機能としては、方形に延びる形状から区画溝と考えられる。

切合関係　畑状遺構、1号住居址、2号溝を壊して造られている。

遺物　1号住居址を壊している部分から甲斐型甕の胴部片が出土した。しかし、この遺物は1号溝に伴うものではなく、1号住居址から流れ込んだ遺物である可能性が高い。B－5，6区からは石が多数出土した。ほとんどの石には加工された痕跡はないが、約2割の石が熱を受けている。石の多くは溝底面よりやや浮いた位置で検出された。これらの石とともに馬のものと見られる歯が出土した。

2号溝（第21図、写真図版6・7）

位置　A，B，C－5～9区に位置する。

形状／規模　ゆるい弧を描いて南から北西へ延びる溝を検出した。溝幅約1m、深さ30cmを測る。底面標高は北西端で321.852m、南端で321.763mを数え、北西から南へゆるやかに傾斜していることがわかる。断面形態は逆台形型である。溝の北西では溝の底面が10～20cm深く掘られている部分があり、この落ち込んだ部分の周辺から石が多数出土した。加工された痕跡はないが、熱を受けているものが多い。

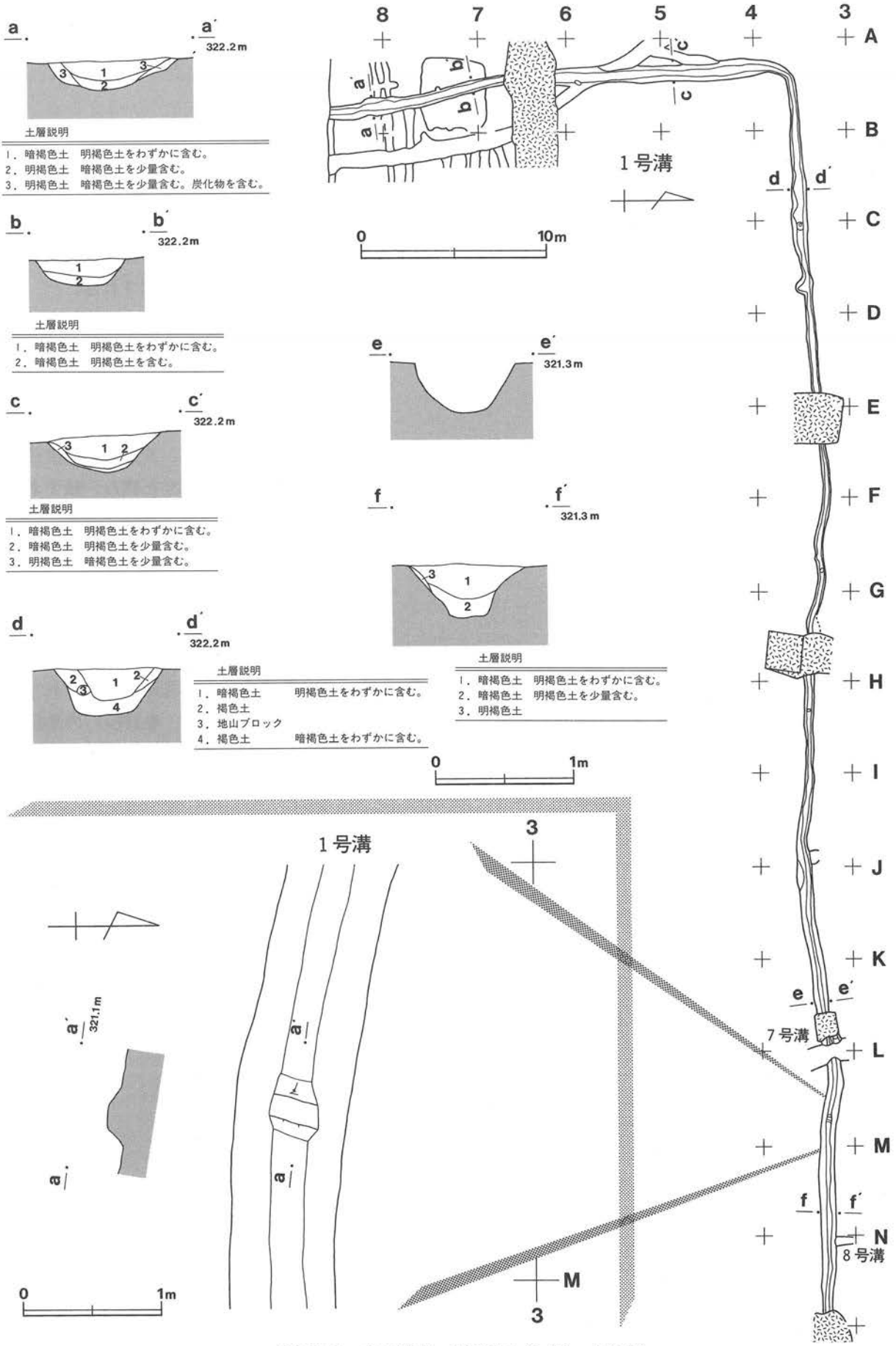
切合関係　畑状遺構を破壊して掘られている一方、1号溝によって一部破壊されている。

遺物　土師器の坏および甕の小片を検出した。

3号溝（第21図、写真図版6）

位置　B－5，6区に位置する。

形状／規模　幅50cm前後、深さ約14cmを数える。1号溝と2号溝を繋ぐように北北東から南南西方向に延びている。溝として番号を与えたが、1、2号溝の外側には延びていないことから、縦



第20図　1号溝平・断面図（1/40・1/300）

長の土坑とも考えられる。底面標高は北端で321.957m、南端で321.867mを測り、1、2号溝と比べて浅く、両溝との接点では床面に段差が生じている。

遺物　土師器の小片が出土した。

4号溝（第22図、写真図版7）

位置　A，B，C－3，4区に位置する。

形状／規模　幅30～48cm、深さ17cmを数える。南西から北東方向へ延びている。底面標高は南西端で321.974m、北東端で321.864mを測り、南西から北東へ傾斜していると推測される。

遺物　出土していない。

5号溝（第22図、写真図版7）

位置　H，I－6，7区に位置する。

形状／規模　幅50cm前後、深さ9cmを数える。南東から北西方向へ延びており、6号溝とほぼ並行して検出された。方向は、畑の地割りとは一致しないが、堤防沿いの地割りと概ね一致する。地形を考慮すれば、溝は北から南に傾斜していると推測される。断面形態は皿形である。

遺物　出土していない。

6号溝（第22図、写真図版7）

位置　J，K－4～7区に位置する。

形状／規模　幅50cm前後、深さ10cm前後、最大幅14cmを数える。南南東から北北西に延びており、5号溝とほぼ並行して検出された。方向は、畑の地割りとは一致しないが、堤防沿いの地割りと概ね一致する。床は全体的に平坦で、底面標高は北端で321.252m、南端で321.172mを測り、北から南へ傾斜している。断面形態は皿形である。

遺物　出土していない。

7号溝（第23図、写真図版8）

位置　L，M－4区に位置する。

形状／規模　幅115cm前後、深さ43cmを測る。南南東から北北西へ延び、底面標高は北端で320.687m、南端で320.702mを数える。調査範囲が狭いため傾斜方向は判断できない。断面形態は、底面が狭い逆台形型である。

遺物　出土していない。

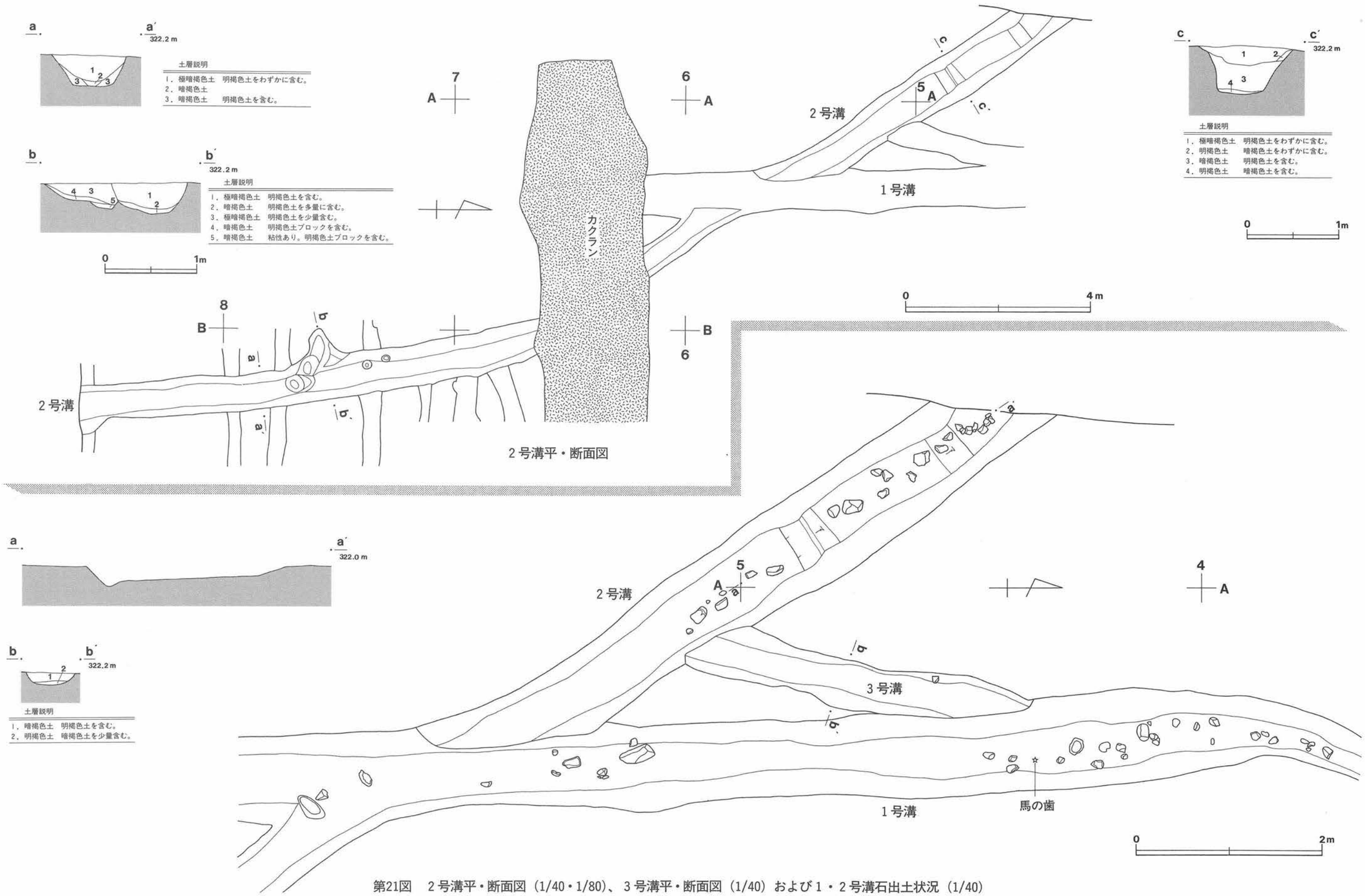
8号溝（第23図、写真図版8）

位置　O－4区に位置する。

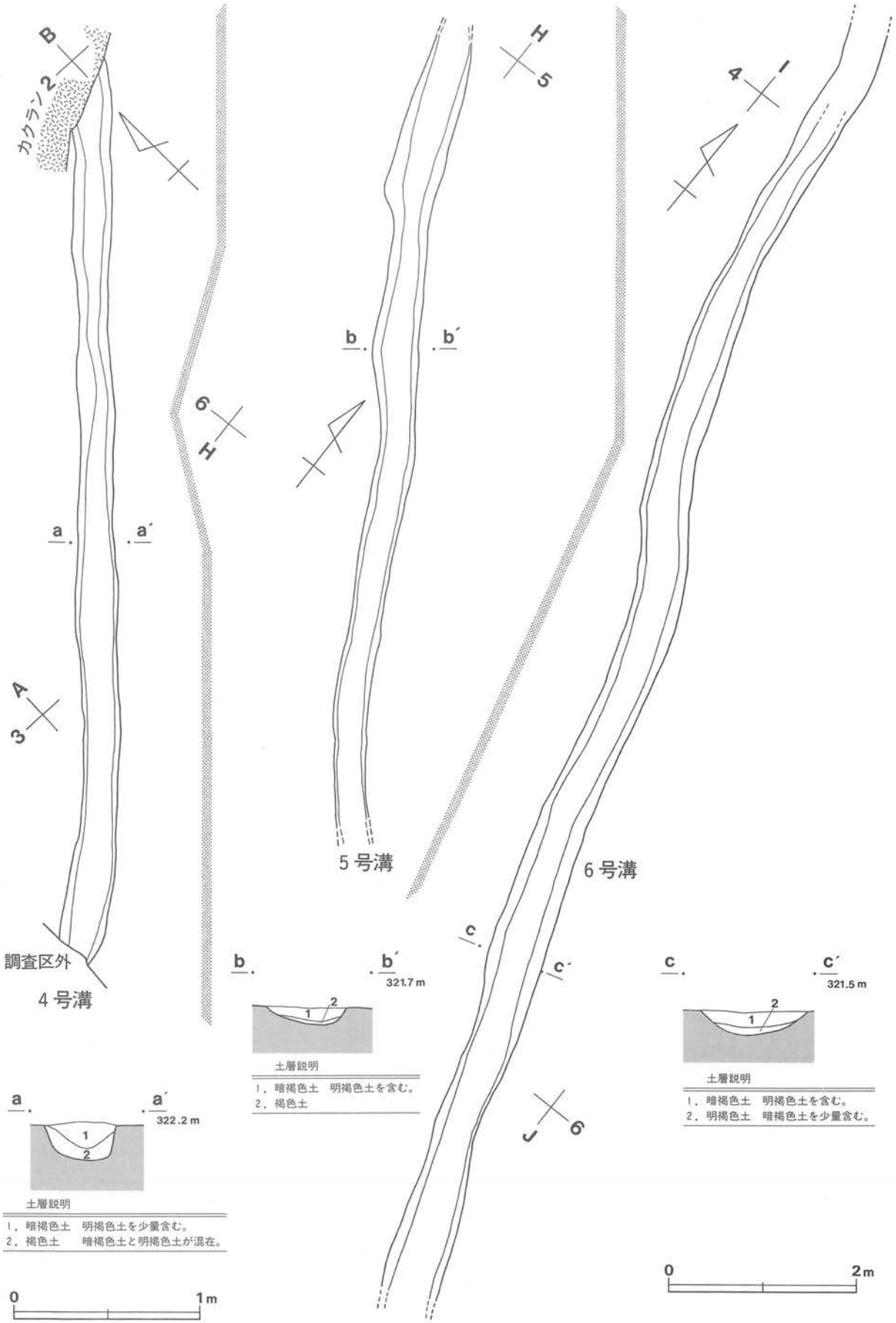
形状／規模　幅40cm前後、深さ10cmを数える浅い溝である。ほぼ南北に延びている。底面標高は北端で320.842m、南端で320.822mを測る。調査範囲が狭いため傾斜方向は判断できない。断面形態は皿形である。

遺物　出土していない。

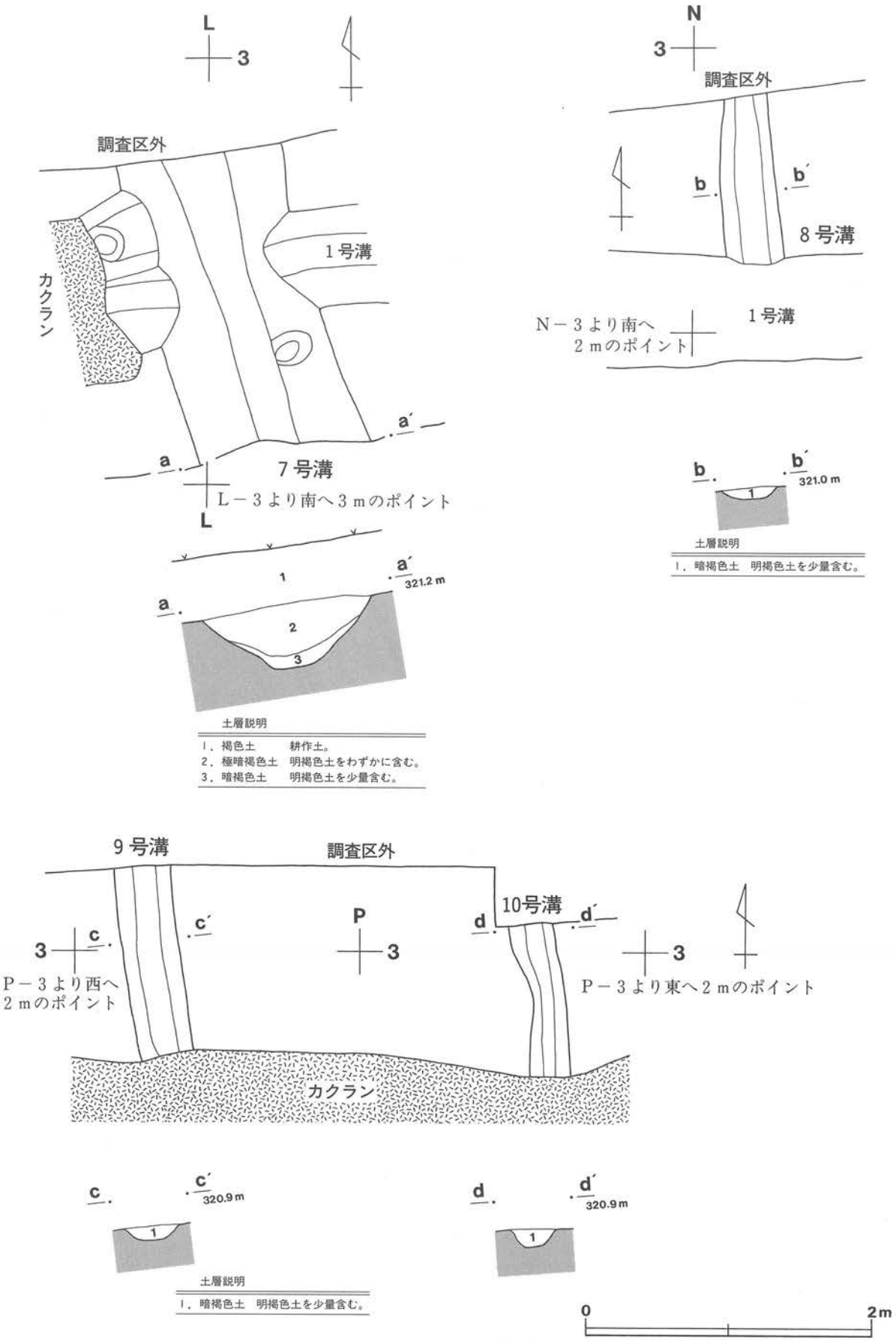
9号溝（第23図、写真図版8）



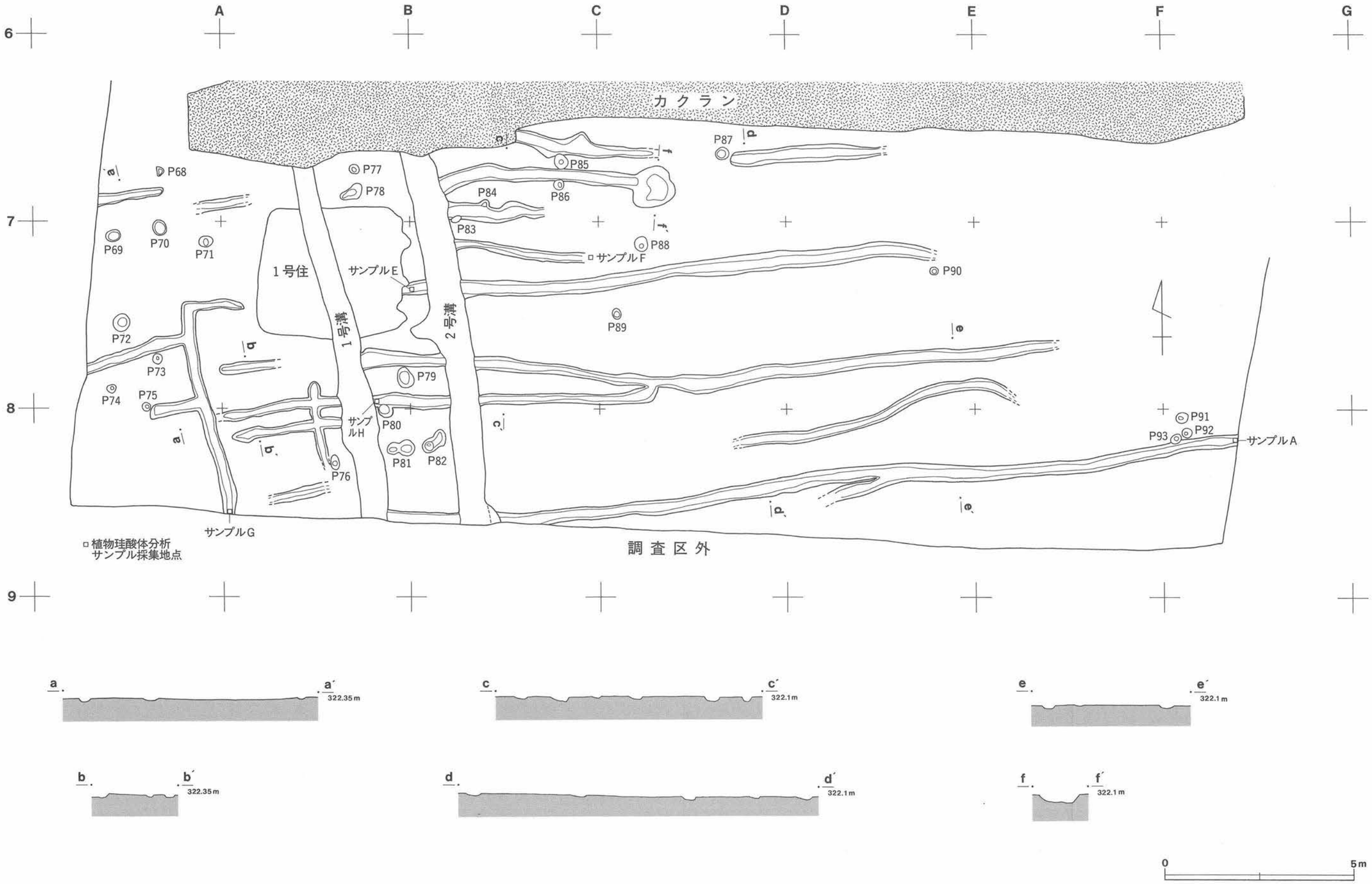
第21図　2号溝平・断面図（1/40・1/80）、3号溝平・断面図（1/40）および1・2号溝石出土状況（1/40）



第22図　4・5・6号溝平・断面図（1/60・1/30）



第23図　7・8・9・10号溝平・断面図（1/40）



第24図　畑状遺構平・断面図（1/100）

位置　Ｐ－３，４区に位置する。

形状／規模　幅約40cm前後、深さ約７cmを数える浅く幅の狭い溝である。北から南に延び、南側はカクランによって消失している。底面標高は北端で320.617ｍ、南端で320.627ｍを測る。調査範囲が狭いため傾斜方向は判断できない。断面形態は皿形である。

遺物　出土しなかった。

10号溝（第23図、写真図版８）

位置　Ｑ－３，４区に位置する。

形状／規模　幅約30cm前後、深さ約７cmを数える浅く幅の狭い溝である。９号溝と並行して検出された。北から南に延び、南側はカクランによって消失している。底面標高は北端で320.527ｍ、南端で320.597ｍを測る。調査範囲が狭いため傾斜方向は判断できない。断面形態は皿形である。

遺物　出土していない。

(5)　畑状遺構（第24・25図、写真図版９・10・14）

調査区南西側で東西に並行して走る浅く細長い溝を多数検出した。畑と類似した形状を呈するため、本報告書ではこの遺構に対し畑状遺構の名称を用いた。

位置　Ａ～Ｇ－７，８，９区に位置している。

遺存状況　もともと浅い溝であるため、一部消滅している箇所がある。とくに、調査区東側で確認できた溝の数は少ない。これは調査区西側と比べ東側が深く削平を受けたためであり、本来はより多くの溝が東へ続いていたと考えられる。

形状／規模　30×10ｍの範囲から浅く幅の狭い溝が多数検出された。ほとんどの溝はほぼ並行し、やや蛇行しながら東西方向へ延びているが、南北に走る溝も検出されている。溝幅は20～40cm、深さ８cm前後を測る。溝間の距離は一定しておらず、狭い所で50cm、広い所で2.7ｍを数える。扇状地の地形に合わせ、溝は西から東へゆるやかに傾斜している。標高は遺構西端で322.212ｍ、東端で321.513ｍを測る。

切合関係　１、２号溝、および１号住居によって破壊されている。

遺物　１は台付甕の口縁部と脚部である。Ｃ－８区を中心とした複数の溝から出土した。直接接合しないが、同一個体である可能性が高い。

なお、畑状遺構の５地点（サンプルＡ・Ｇ・Ｈ・Ｅ・Ｆ）で採取した覆土について植物珪酸体分析を行った。その結果、栽培植物のプラントオパールは発見されず、植物の栽培を積極的に支持する資料は得られなかった。ただし、覆土に人為的撹乱を示す粒団が形成されており、耕作地として利用された可能性も否定しがたい。植物珪酸体分析についての詳細は第Ⅳ章の分析結果を参照されたい。

時期　10世紀前半に比定される１号住居址によって破壊されているため、少なくとも10世紀以前と考えられる。古墳時代前期の台付甕片が複数の溝から検出されたが、遺構に伴うものか、後世の混入かの判断は難しい。ここでは事実記載にのみ留めておく。

第25図　畑状遺構および遺構外出土遺物（1/4）

第２節　遺構外出土遺物

検出された遺構外出土遺物は少ない。その中で灰釉陶器１点を第25図に図示した。この灰釉陶器はG，H－８区の調査区南壁から出土したものである。

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節　榎原・天神遺跡発掘調査に伴う自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

榎原・天神遺跡は御勅使川扇状地扇央部に位置する。今回の発掘調査では、古墳時代～10世紀頃の畑状遺構、10世紀頃の住居址、区画溝と考えられる溝状遺構、時期不明の焼土遺構などが検出されている。このうち、畑状遺構は幅40～50cm、深さ10cm前後の溝が東西方向に平行して検出されており、住居址により破壊されている状況が捉えられている。

今回の自然科学分析調査では、畑状遺構の機能・用途に関する情報、とりわけ栽培植物の有無について植物珪酸体分析により検討する。また、住居址の竈および土坑、時期不明の焼土遺構から出土した炭化物の種類を同定・計数を行い、当時の植物の利用状況に関する情報を得る。

１．サンプル（第24図）

畑状遺構のサンプルは、浅い溝状の遺構群の５箇所の溝内から採取された（サンプルＡ・Ｇ・Ｈ・Ｅ・Ｆ）。サンプルの状態は、いずれもシルト・微粒砂からなり、粒団構造が形成されている。また、植物根跡とみられる痕跡も認められる。これら５点のサンプルについて植物珪酸体分析を実施した。

遺構出土炭化物サンプルは９点あったが、同一サンプル名のものを統合すると、１号住竈内焼土、１号住土坑２、１号住土坑１、２号住土坑、焼土遺構の５つの遺構にまとめられる。これら各遺構から採取されたサンプルについて微細物分析を実施し、樹種および種実の同定計数を行った。

２．分析方法

(1)　植物珪酸体分析

植物珪酸体分析は、近藤・佐瀬（1986）の方法を参考にした。数ｇを秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，１分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステイト，比重2.4）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、これらの珪酸体を包含する組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

(2)　微細物分析

双眼実体顕微鏡下で観察し、種類が特定できそうな微細物を抽出する。この中で比較的大型の炭化物片は、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。また、検出された種実遺体も、その形態的特徴から種類を同定する。

3．結　果

(1)　植物珪酸体分析

結果を表1、図1に示す。各サンプルからは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。植物珪酸体組成をみると、タケ亜科の割合が短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに非常に高い。その他、ヨシ属やウシクサ族、イチゴツナギ亜科がわずかに、あるいは稀に認められる。一方、サンプルA・H・Fからイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体がわずかに認められる。

(2)　微細物分析

結果を表2に示す。全サンプルとも微細な炭化材が多数検出されている。炭化材は微細なため同定できるものは少なかったが、比較的大きめのものを拾っ

表1　植物珪酸体分析結果（個数）

種　類	畑状遺構				
サンプル番号	A	G	H	E	F
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	8	−	−	−	−
タケ亜科	114	127	128	107	105
ヨシ属	2	4	3	−	2
ウシクサ族コブナグサ属	1	−	−	1	−
ウシクサ族ススキ属	5	3	3	1	3
イチゴツナギ亜科	23	11	8	21	11
不明キビ型	56	16	22	40	36
不明ヒゲシバ型	8	1	2	2	2
不明ダンチク型	40	49	46	55	46
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	1	−	2	−	4
タケ亜科	57	110	73	105	74
ヨシ属	1	−	−	−	−
ウシクサ族	18	10	3	10	20
シバ属	4	1	2	1	4
不明	23	25	23	25	21
合　計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	257	211	212	227	205
イネ科葉身機動細胞珪酸体	104	146	103	141	123
総　計	361	357	315	368	328

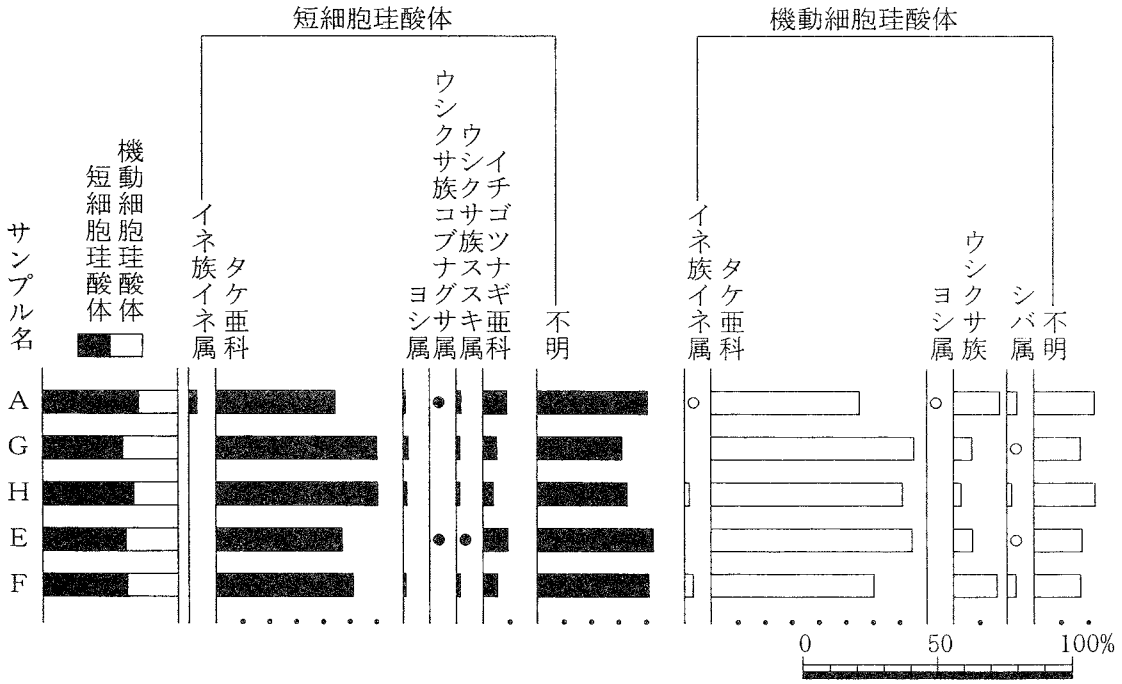


図1　植物珪酸体群集の層位分布

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満の種類を示す。

表2　微細物分析結果

遺構名・サンプル名	同定結果		
	種実	木材	その他
1号住　竈内焼土		エノキ属(2)	炭化物片（細片多数）
1号住　土坑2			炭化物片（細片多数）
1号住　土坑1	ヒノキ科(1)		炭化物片（細片多数）
	オヒシバ属(1)		炭化物片（細片多数）
2号住　土坑			炭化物片（細片多数）
焼土遺構	カヤツリグサ科(1)	ブナ属(1)	炭化物片（細片多数）
		コナラ属コナラ亜属クヌギ節(1)	炭化物片（細片多数）

＊括弧内の数字は個数を示す

て樹種同定を試みた。その結果、1号住竈内焼土の炭化材は、落葉広葉樹のエノキ属に同定された。また、焼土遺構の炭化材は、1点がブナ属、1点がコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。また、種実は1号住土坑1、焼土遺構から3種類検出されたがいずれも炭化していない。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

＜木材＞

・ブナ属（*Fagus*）　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性III型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・エノキ属（*Celtis*）　ニレ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～15細胞幅、1～50細胞高で鞘細胞が認められる。

＜種実＞

・ヒノキ科（*Cupressacae*）

葉の破片が検出された。褐色で偏平。、鱗状で一枚の大きさは1㎜程度。

・オヒシバ属（*Eleusine*）　イネ科

種子が検出された。楕円形で大きさは2㎜程度。表面は褐色で柔らかい。表面には縞模様が存在する。

・カヤツリグサ科（*Cyperaceae*）

果実が検出された。褐色、3稜形で、大きさは2㎜程度。表面は薄くてやや堅く、ざらつく。先端がやや尖る。

4．考　察

(1)　畑状遺構について

今回調査を行った畑状遺構を構成する堆積物は、シルト～微粒砂を主体とする堆積物からなる。遺跡の立地を考慮すると、河川の氾濫等の影響下で堆積したことが想定されるが、堆積時に形成された構造

は堆積後の撹乱作用により確認できなかった。いずれのサンプルも土壌化が進行しており、３～５㎜程度の粒団が形成されている。粒団間の孔隙は比較的大きく、大きさも揃っており、撹乱作用が及んでいることが窺える。このような撹乱作用の原因としては、植生による撹乱や人間による撹乱などの可能性が考えられる。

この撹乱作用が及ぶ畑状遺構堆積物の植物珪酸体組成は、いずれのサンプルもタケ亜科が高率を占めた。栽培種の種類では、Ａ・Ｈ・Ｆの３サンプルからイネ属が検出されたが、いずれも出現率は低率であった。このほかウシクサ族（ススキ属を含む）・イチゴツナギ亜科などが認められたが、ムギ類などイネ科に属する他の栽培植物の種類は認められなかった。このような植物珪酸体組成の特徴からみて、畑状遺構ではイネ科に属する栽培植物の種類が栽培されていたとは考えにくい。また、３箇所の地点で検出されたイネ属についても低率であったこと、全ての遺構から検出されなかったことから、畑状遺構で栽培されていたとするには充分ではない。イネ属の由来としては、畑状遺構が構築されている堆積物にもともと取り込まれていたものである可能性、稲藁（いなわら）が農業資材として畑にもちこまれた可能性などが考えられる。いずれにしても、本遺構が構築以前の時期に、周辺地域で稲作が行われていたことが窺える。

一方、畑状遺構の植物珪酸体組成で卓越したタケ亜科にはタケ類・ササ類が含まれる。本遺跡の後背（こうはい）山地（さんち）は冷温帯に属しており、現在の植生は植林を除けば落葉広葉樹林に覆われている。このような冷温帯落葉広葉樹林の林床（りんしょう）を覆う植物にもタケ亜科の仲間が認められる。また、伐採や災害（山火事・台風など）、樹木の枯死などにより生じた開けた空間にもタケ亜科の仲間が認められる。ここでのタケ亜科については、その種類を特定することができないが、当時の遺跡周辺にはタケ亜科が分布する、開けた場所が存在した可能性がある。このことはススキ属を含むウシクサ族の産状（さんじょう）からも窺える。また、扇状地面の幾分湿った場所にはヨシ属なども分布していたことが推定される。

以上、畑状遺構からは栽培植物の種類はほとんど確認されなかったため、生産遺構であることを積極的に指示することはできなかった。ただし、撹乱作用が及んでいる土壌からなることから他のイネ科以外の栽培植物が生息していた可能性も否めない。甲府盆地では、これまでに、古墳時代～古代の遺跡で、イネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエ、キビなどが検出されているが(櫛原，1998)、今回の畑状遺構の時代観はそれらよりも新しい時代になる可能性がある。今後、本遺構の畝部分に相当する堆積物について種実分析を行い、イネ科以外の作物の種類の産状を調べると同時に、扇状地形成に関わった流路充填堆積物（りゅうろじゅうてんたいせきぶつ）について花粉分析を行うことで、地域的な栽培植物の消長に関する情報が蓄積されていくものと考えられる。

(2)　住居址および焼土遺構出土炭化物について

住居址竈や焼土遺構から検出された炭化物には炭化材が認められた。これら炭化材は燃料材として利用された木材の一部が炭化・残存した可能性がある。樹種は、１号住がエノキ属、焼土遺構がブナ属とクヌギ節であった。現在の植生や潜在自然植生（せんざいしぜんしょくせい）（宮脇，1985）から、いずれも遺跡周辺で入手可能であったと考えられる。今回の結果では、遺構によって種類構成が異なっている。この結果から、燃料材の中でも使用目的などによって用材選択が異なっていた可能性がある。今後さらに資料を蓄積して詳細を明らかにしたい。

また、炭化物サンプルから検出された種実はいずれも炭化していないものであった。これら種実は燃料材として紛れ込んだのではなく、遺構の埋積過程（まいせきかてい）で取り込まれたものと考えられる。ヒノキ科は周辺で生育していた樹木に由来するのであろう。またオヒシバ属やカヤツリグサ科は、遺構周辺に草地が存在し、そこからもたらされたものと考えられる。

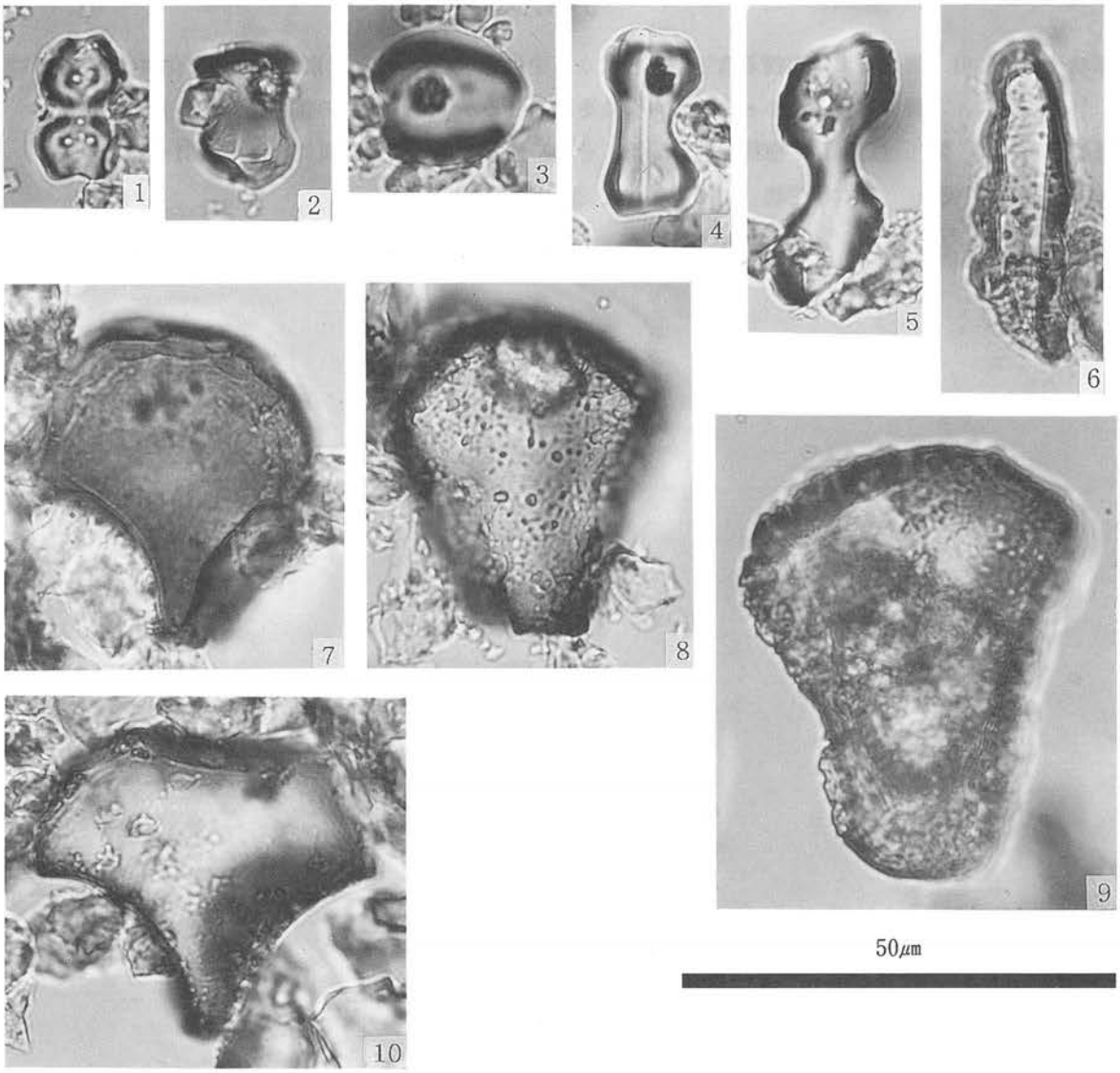
引用文献

櫛原功一　(1998)　炭化種実から探る食生活－古代から中世を中心に－.「帝京大学山梨文化財研究所1998年度研究集会　遺跡・遺物からなにを読みとるか（2）　食の復元　資料集」, p.39-53.

近藤錬三・佐瀬　隆　(1986)　植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.

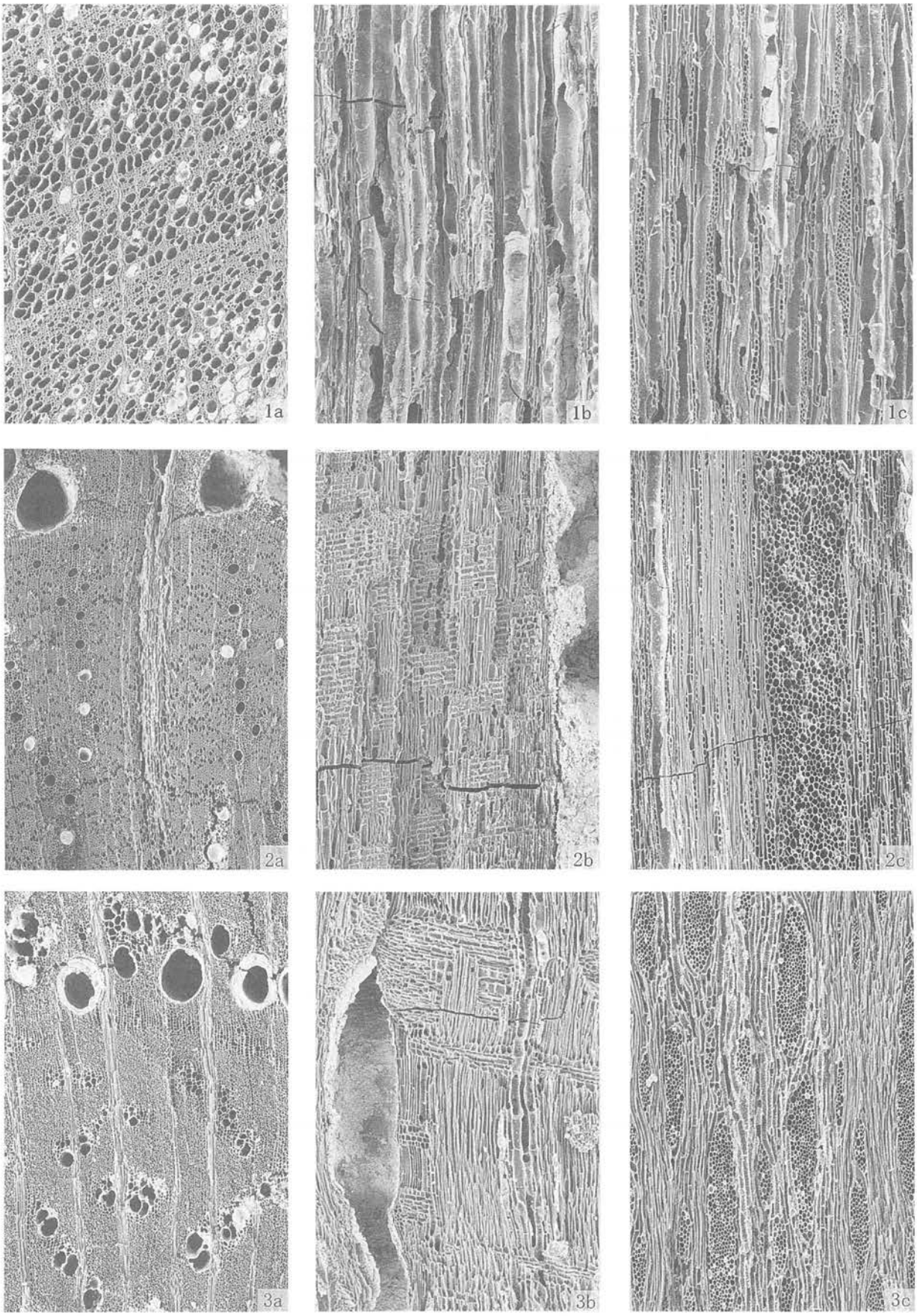
宮脇　昭編　(1985)　日本植生誌　中部. 604p., 至文堂.

図版１　植物珪酸体



1．イネ属短細胞珪酸体（サンプルA）
2．タケ亜科短細胞珪酸体（サンプルG）
3．ヨシ属短細胞珪酸体（サンプルF）
4．コブナグサ属短細胞珪酸体（サンプルE）
5．ススキ属短細胞珪酸体（サンプルH）
6．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（サンプルE）
7．イネ属機動細胞珪酸体（サンプルF）
8．タケ亜科機動細胞珪酸体（サンプルG）
9．ウシクサ族機動細胞珪酸体（サンプルA）
10．シバ属機動細胞珪酸体（サンプルA）

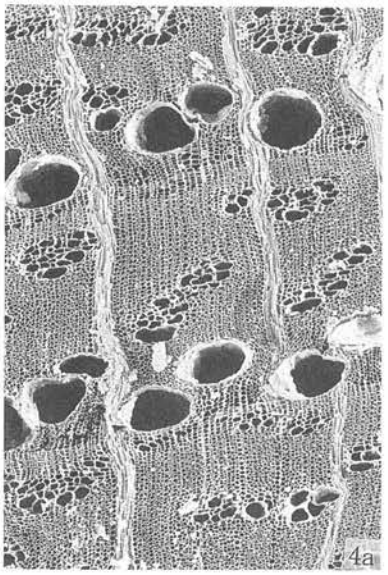
図版2　木材

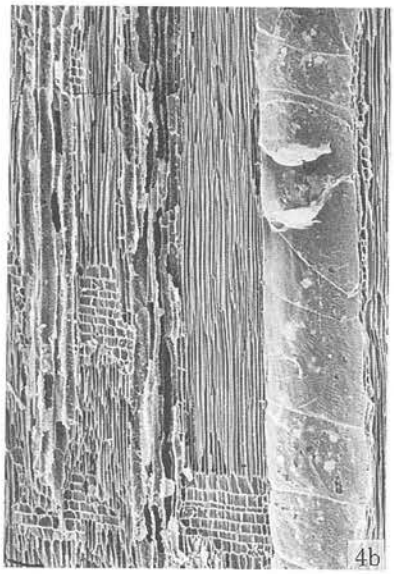


1．ブナ属（焼土遺構）
2．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（焼土遺構）
3．エノキ属（1号住　竈内焼土）
（a：木口　b：柾目　c：板目）

200μm：a
200μm：b，c

図版３　木材・種実遺体





200μm：a
200μm：b，c

1 mm

（5－7）

4．エノキ属（1号住　竈内焼土）
5．ヒノキ科（1号住土坑1）
6．カヤツリグサ科（焼土遺構）
7．オヒシバ属（1号住土坑1）
　（a：木口　b：柾目　c：板目）

第Ⅴ章　調査の成果と課題

本章では、調査によって検出された遺構の中で、住居址、溝状遺構、畑状遺構についてまとめてみたい。

第1節　住　居　址

本節では、とくに住居の構造と住居内の遺物出土状況について整理し、若干の考察を行う。遺物出土状況については、比較的良好な残存状況で、ある程度の遺物の垂直分布が記録できた1号住居を例として、遺物分布から埋没過程を考えたい。

(1)　住居の構造

検出された住居址は2軒と少ないため、時期、地域を考慮した遺跡内での位置づけはできない。このため、本節ではすでに調査が行われ概要が明らかにされている大塚遺跡、野牛島・大塚遺跡、石橋北屋敷遺跡など、8世紀中頃から9世紀中頃の集落が主体となる野牛島地区の遺跡を参考にしながら、榎原・天神遺跡の住居址について検討していく。

住居の構造については、平面形、規模、床面積および竈の位置などのａ．住居プランと、竈・土坑・壁溝・柱穴などのｂ．住居内施設の2点に注目し、以下それぞれまとめていく。なお、1、2号住居の時期は、出土土器から宮ノ前Ⅷ～Ⅸ期、10世紀前半に位置づける。

ａ．住居プラン

平面形は、1号住居が長方形、2号住居がややいびつな正方形を呈する。**床面積**は1号住居が11.52㎡、2号住居が8.4㎡を測り、1号住居がやや広くなっている。**竈の位置**は、1、2号住居ともに東壁、南よりの位置に構築されている。

前御勅使川以北の野牛島地区では、9世紀に入るとともに住居の規模、床面積が10㎡前後に縮小・定形化し、正方形を呈する比率が増加する。同時に竈の位置が、住居長辺の北壁から住居短辺の東壁に移行する現象が見られる。(註1・2) こうした住居プランの変遷を考えると、榎原・天神遺跡の1、2号住居は9世紀代の傾向を踏襲していると言える。

ｂ．住居内施設

竈は、袖や天井部の心材として石を利用し、粘土で覆いを造るいわゆる石組み竈である。1号住居には北側の袖に石が用いられており、南袖にも石を抜き取った痕のようなピットが見られた。2号住居の竈内で検出した直径14cmの石も、袖の心材として利用されていた可能性は高い。竈の構築材として袖や天井部に石が利用されている例は、野牛島地区で一般的に見られる傾向で、竈が検出された44軒中20軒で石が確認されている。調査時にはすでに石が消失している竈もあることを考えれば、その使用率は比較的高いと言え、時期別にみても8世紀から9世紀後半まで、各時期を通して利用されている。榎原・天神遺跡の例では、10世紀に入っても竈の構築材として石が利用され続けていた。このような状況は、遺跡が前御勅使川に隣接し、石が入手しやすい環境にあったためと推測される。

竈の遺存状況は、1、2号住居いずれも上部は崩落し、削平されていた。とくに2号住居の遺存状態は悪く、袖の基底部のみを検出した。2号住居の竈については、人為的な破壊によるものか自然の崩落

かの判断は難しい。一方、１号住居の竈は、天井部および南側の袖の一部が崩れていたが、比較的遺存状態が良く、両袖とも残存し、支脚も元位置を保ったまま遺存していた。この支脚の上面および側面からは坏片が貼り付いた状態で検出されており、その特殊な出土状況から坏片は意図的に置かれたものと考えられる。その坏片には、使用時のものとは考えにくい薄い二次的な被熱痕が見られた。竈内から出土し、この坏片と接合した他の坏片には、この被熱痕がほとんど認められなかった。このため被熱痕の認められた坏片は住居廃絶時に一度だけ支脚上で熱を受けたと考えられる。こうした竈および遺物の遺存状況から、竈廃棄時に竈を壊し、坏片で支脚を覆うという一連の行為が行われた可能性が推測される。

土坑は、１号住居で４基、２号住居で１基を検出した。ここでは竈に隣接して掘り込まれた土坑、一般的に「貯蔵穴」と呼ばれる土坑に注目したい。１、２号住居の土坑はともに竈に向かって右側（竈の南側）に掘り込まれている。１号住居の土坑１は長軸（東西）が約95cm、短軸（南北）が85cm、深さが12cmを測る。２号住居の土坑は長軸（東西）が約92cm、短軸（南北）が60cm、深さが９cmを数える。両者とも長軸が90cmを越える大型の土坑のわりに、深さが10cm前後と浅いのが特徴である。野牛島・大塚遺跡でも、竈の右側（南側）に土坑が検出されているが、これらは直径がほぼ30～50cmで、榎原・天神

第３表　山梨県内で検出された棚状施設一覧

遺跡名	区名	住居No.	時期	竈位置	構築位置（竈に向かって）	平面形態	幅（m）	奥行き（cm）	床面からの高さ(cm)	構築方法	備考
榎原・天神		1	10C前	東壁やや南より	左側	イン	0.6	45	10	素掘り＋粘土	
石橋北屋敷	3	7	－	東壁やや南より	（両側）	イン	－	－	－	－	土器の出土状況から棚状施設の可能性
角力場第２地点		SI05	－	東壁やや南より	右側	イン	0.7～0.12	55	1～7	素掘り	緩く傾斜して床面に続いている。
上ノ原	A	1	9C中	東壁やや南より	左側	アウト	1.8	35	32	素掘り	
上ノ原	A	2	9C中	北壁西より	右側	アウト	1.5	20	40	素掘り	
上ノ原	A	4	9C中	東壁南より	左側	アウト	1.8	68	－	素掘り	盛土による棚状施設の可能性
上ノ原	B	16	9C中	東壁北より	左側	アウト	1	32	20	素掘り	
石原田北		2	－	－	－	－	－	－	－	素掘り	
石原田北		4	11C末	－	－	－	－	－	－	素掘り	
石原田北		5	11C末	－	－	－	－	－	－	素掘り	
石原田北		7	10C前	東壁やや南より	右側	アウト	－	－	35	素掘り	
石原田北		16	10C前	東壁南より	両側	アウト	0.25	－	15	素掘り	
					西壁	イン?	0.1～0.25	－	35	素掘り	棚状施設かは不明
石原田北		18	11C末	南西角	両側	－	0.15～0.2	－	40	盛土	
石原田北		31	－	－	－	－	－	－	－	－	

第３表　例言

1．時期は基本的に各報告書の時期に従っている。
2．平面形態での「アウト」は「アウトタイプ」を、「イン」は「インタイプ」を表す。
3．石橋北屋敷遺跡の３区７号住居については、土器の出土状況によって棚状施設の可能性が指摘されているため、幅、奥行きなどのデータは不明である。
4．角力場第２遺跡のSI05では、竈の左側である南側、住居址南東部がわずかに高く、緩く傾斜しながら床面に至っている。この部分が同じ棚状施設と捉えられるかは不明であるが、住居内側に造られる点や竈に隣接して素堀で造られている点など榎原・天神遺跡と共通点があるため、参考に挙げておく。また、SI05には、西壁から一部北壁にもおよぶ幅15～20cm、床面からの高さ７cmの「段差」が報告されている。この「段差」が棚状施設の範疇に入る可能性がある。
5．石原田北遺跡Ｊマート地点については、報告書が2001年刊行予定であるため、平野氏が既に論文誌上で発表したデータや図を基に作成した（平野1999ａ）。そのため、表に記載したデータは限られたもので、記載したデータも正式な報告書刊行時には変更となる可能性があることをお断りしておく。

遺跡の土坑と比較して小さい。榎原・天神遺跡に見られる大型の土坑が、御勅使川右岸という地理的な要因によるのか、10世紀という時期的な要因によるのかは、現時点では判断ができない。類例の増加を待って検討したい。また、第Ⅲ章の１号住居で述べたように、黒褐色土の堆積から、住居廃絶時に土坑１は少なくとも一部、あるいは全て埋められていた可能性が高い。

１、２号住居では、**壁溝**および**柱穴**は発見されなかった。野牛島地区でも柱穴が検出された例はなく、壁溝は３軒の住居址で検出されたにすぎない。(註3) こうした例をみると、榎原・天神遺跡でもほぼ前代の傾向が踏襲されていると言えよう。

住居内施設の中で最も注目される遺構は、１号住居で発見された**棚状施設**である。関東地方の棚状施設を集成し、詳細な研究を行っている桐生直彦氏の定義を借用すれば、棚状施設とは「竈を有する竪穴住居の竪穴壁に接して平行に設けられた段差を持つ屋内施設」である。(註4)

桐生氏は棚状施設の分析において、以下のような分類を行っている。平面形態から竪穴壁の外側に掘り込まれるもの（アウトタイプ）と内側に掘り込まれるもの（インタイプ）に大別し、さらに構築方法によって素掘りのもの、構築土を充塡するもの、盛土するものの３つに分類している。この基準によれば、第Ⅲ章で前述したとおり、榎原・天神遺跡の棚状施設は「インタイプ」にあたり、構築方法は素掘りで造られ粘土で化粧が施されるタイプとなる。

ここで山梨県内での棚状施設と呼ばれる遺構の検出例を見てみたい。報告書執筆時点で確認したのは14例である。表中には土器の出土状況によって棚状施設の可能性が指摘されている例も記載した。山梨県内では検出例が少ないながら、平野修氏が上ノ原遺跡や石原田北遺跡Ｊマート地点の調査で棚状施設を発見し、住居の構造的視点から研究を進めている。(註5) 平面形態および構築方法は、竪穴壁よりも外側に張り出して設けられる「アウトタイプ」を呈し、素掘りで造られたものがほとんどである。榎原・天神遺跡のような「インタイプ」で、粘土が施される例は確認されていない。

このように県内では棚状施設の類例は未だ少ない状況である。これは絶対数が少ない可能性もあるが、桐生氏や平野氏が指摘するように調査時の掘りすぎや調査者の認識不足に左右された結果とも考えられ、棚状施設はより一般的であった可能性がある。筆者自身、遺構検出時には、棚状施設に対する問題意識は希薄であった。調査時、棚状施設を含めた住居内施設に注意を払うことが必要であろう。

(2)　１号住居址の遺物分布と埋没過程

１号住居址から出土し、記録化（平面位置･標高）した遺物の点数は合計270点に及ぶ。通常、こうした情報は、遺物の水平・垂直分布図として報告書に掲載される。しかし、せっかく記録した情報であるにもかかわらず、水平・垂直分布が詳細に検討されていない場合も多い。ここでは水平・垂直の位置関係から遺物のまとまり（グループ）を抽出し、そのまとまりの分布、器種構成、接合関係から住居廃絶時の状況やその後の埋没過程にせまってみたい。(註6) なお、垂直方向を上・中・下層に分類したが、これはあくまで相対的な遺物の位置関係であって、厳密な基準ではない。

まず全体的な遺物分布パターンをみると以下の傾向が指摘できる。

垂直……上～下層まで出土しているが、特に下層（床面付近）に遺物が集中する。

水平……カマドを中心として住居址南西に遺物が集中している。

グループの設定

遺物の分布をより細かく検討すると、遺物の水平・垂直分布がリンクして、ある程度遺物がまとまりをもつことがわかった。ここでは仮にそのまとまりをグループと呼ぶ。各グループは水平と垂直の分布

第４表　グループ別遺物分布一覧

グループ	垂直位置(相対層位)	水平位置	遺物ドット数	推定個体種類数				
				坏	皿	甕	その他	合計(以上)
1	下～上層	竈内	36	4	2	1	0	7
2	下層	棚状施設西側	24	2	0	2	0	4
3	下層	土坑１内	38	5	1	1	0	7
4	下層	棚状施設の西側、グループ７の西側に集中	14	2	0	1	0	3
5	下層	土坑３の西側	7	3	0	1	0	4
6	中層	土坑１の北西側	15	3	0	1	0	4
7	上層	棚状施設北西側	9	2	0	1	0	3
8	上層	土坑１の北側	20	2	0	1	1	4
9	上層	土坑３の北西側	8	2	0	2	0	4

※推定個体種類数の数値は、推定できるなかで最も少ない数値である。

を考慮し大まかに設定したもので、厳密に区分したものではない。各グループの水平・垂直位置と遺物の総数、破片から推測される最低の遺物種類数を第４表に示す。

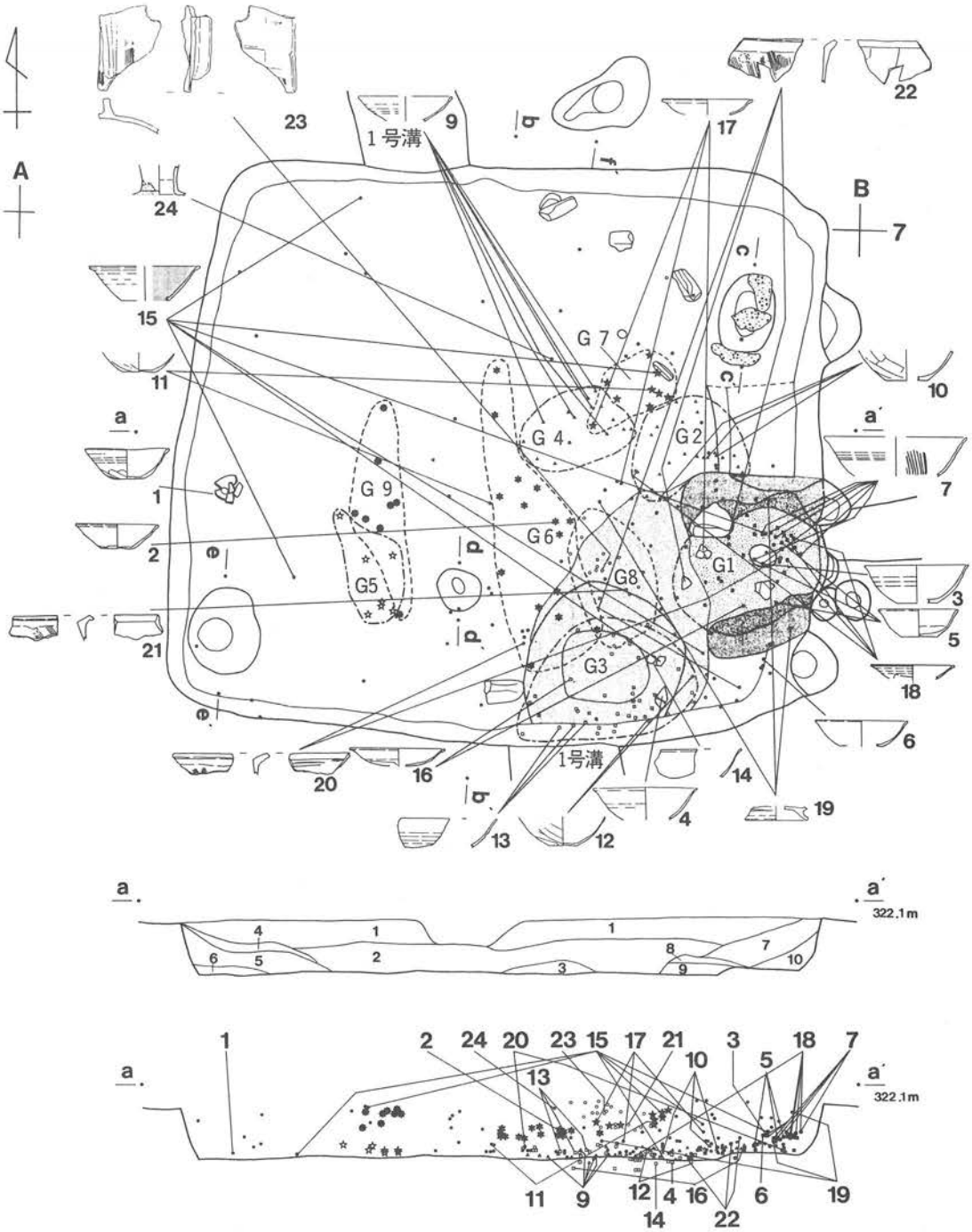
グループ別遺物分布と土器の接合関係

まず初めにグループごとの特徴を下層から記述する。下層にはグループ１～５（以下グループをＧとする）まで含まれる。Ｇ１は下層から上層まで遺物が分布するが、これは竈内の傾斜にそったものであり、ほぼ床面付近に集中すると考えてよい。遺物数が多く、少なくとも７種類以上の土器片が含まれている。竈内にもかかわらず、坏・皿片が多く出土し、甕片は少ない。Ｇ２は床面より約10cm浮いた位置に多くの遺物が分布する。これは棚状施設が西側へ粘土で拡張されていたことを示唆している。Ｇ２には４種類以上の土器片が混在している。Ｇ３は土坑内のため、床面付近のほか床面より下層にも遺物が分布する。また、床面からやや浮いた位置にも分布しているが、その多くが住居址南壁際から出土した遺物で、三角堆積がその要因と考えられる。遺物数が38点と多く、７種類以上の土器片が含まれており、中でも坏が５種類を占める。Ｇ４は土師器坏である１住－９の破片が多く、その他２種類の土器片が見られる。下層に比べ、中上層のＧ６～９は遺物数が少ない。Ｇ６は１号溝のルート上に位置するが、１号溝の底面よりも深いため、住居址に伴う遺物と考えられる。Ｇ６には４種類以上の遺物が含まれている。また、Ｇ６はＧ８と連続していると考えられる。Ｇ７は遺物数が７点と少ない割に、３種類以上の遺物が認められる。Ｇ８には４種類以上の土器片が分布する。西側が１号溝によって破壊されているため、ルート上に遺物は少ないが、本来さらに西側に広がっていた可能性がある。Ｇ５、Ｇ７と同じくＧ９は遺物数が８点と少ないながら、４種類の土器片を内包している。

次に土器の接合関係を見てみると、上中層グループの遺物は単片が多いのに対し、接合する遺物は下層グループに多く、下層のグループ内もしくはグループ間で接合する場合が多い。その中で、内黒坏の１住－15は上層と床面付近の破片が接合する。破片をそれぞれ観察すると、下層に位置する２つの破片（土坑内と住居址南西）は、それ以外の破片と色調が明らかに異なり、割れてから違った環境にあったと考えられ、破片が時期を異にして住居址に廃棄されたと考えられる。また、下層から10世紀前半の遺物が出土するのに対し、上層では11世紀の傾向をもつ土器片（１住－23）が出土するなど、上下層によって遺物に若干の時期差が認められる。このように上層と下層の遺物が接合する例や、上層と下層の遺物の時期差が少ない点、１号溝に切られている点を考えると、１号住居は下層から上層まで比較的短期間で埋没した可能性が示唆される。

遺物分布と埋没過程

こうしたグループの遺物分布と接合関係から、住居廃絶時の状況と埋没の過程を考察する。まず、垂



■ グループ1（G1）　✱ グループ6（G6）　上・中層グループ（G6～9）

△ グループ2（G2）　★ グループ7（G7）

□ グループ3（G3）　○ グループ8（G8）　下層グループ（G1～5）

▲ グループ4（G4）　✱ グループ9（G9）

☆ グループ5（G5）　● その他

※ドットは全て土器を示しており、石器は図示していない。

0　1m

第26図　1号住居址グループ別遺物出土状況（1/40）

直分布からＧ１～５は住居廃絶時、あるいは廃絶からあまり時をおかずに遺棄・廃棄されたと考えられる。とりわけＧ１（竈内出土）は、支脚上に置かれた坏片の出土状況や竈内にもかかわらず坏片が多い点を考えてみると、使用時のものとは考えにくく住居廃絶時に廃棄・遺棄された可能性が高い。下層のグループを平面上で見ると、竈の正面には遺物が少なく、竈内（Ｇ１）、棚状施設の西側（Ｇ２・４）、土坑１（Ｇ３）の住居壁際など、竈の周辺部にそれぞれまとまって遺物が分布する。こうした状況は、竈の正面が竈での調理空間であり、竈を破壊する時の作業空間であったため、遺物はその周辺に廃棄されたものと推測される。ただし、その廃棄パターンにまとまりがあることから、Ｇ２・３・４が使用時のモノの配置をある程度反映している可能性も考えられる。一方、住居址西側から北側にはほとんど遺物が見られず、住居廃絶時にはその区域に遺棄・廃棄された遺物はほとんどなかったと考えられる。

中層には住居址中央部（Ｇ６）に遺物が多いが、下層ほどのまとまりがなく広い範囲に分布している。竈周辺や他の区域にまとまった遺物の流入および廃棄は見られない。埋没の過程で、Ｇ１～５に続いて、廃棄あるいは流入したと考えられる。

上層にはＧ７・８・９が位置する。破片がまとまっている点や住居中央部に集中する点を考慮すれば、遺物は流入よりも廃棄されたと考えられる。つまり、住居址中央部（Ｇ６）へ遺物が廃棄・流入した後、継続して竈正面（Ｇ８）と棚状施設西側（Ｇ７）、住居中央西側（Ｇ９）に遺物が廃棄されたと推測される。また、１号溝のルート上に位置する遺物は、１号溝の埋没過程で廃棄・流入したものと推測されるが、その多くが１号住居覆土からの流れこみと考えられる。

小　結

以上、遺物の水平垂直の位置を詳細に検討し、１号住居址の廃絶状況および埋没過程を概観した。その結果、住居廃絶時から住居埋没過程における遺物の廃棄パターンが明らかとなった。しかし、住居廃絶時の「遺棄・廃棄」とその後の「廃棄」との判別や住居廃絶後の上屋構造と埋没過程との関係、住居の再利用の可能性など検討すべき課題も多い。また遺物の分布に偏りが見られない場合、グループの設定が難しく、グループの設定の仕方によって分析結果が異なる可能性もあるなど注意すべき点がある。とはいえ遺物分布の水平・垂直位置をていねいに検討することは、遺物の廃棄パターンをより詳細に理解することであり、住居址のライフサイクルを考える場合、必要不可欠な作業であると考えられる。調査時のみならず報告書作成まで遺物の水平、垂直の分布に注意を払いたい。

第２節　溝状遺構

本節では、溝状遺構の中でも１号溝に注目してみたい。１号溝は、調査区南壁から北へ延び、Ｂ－４地点で方向を90度東に転じ、Ｐ，Ｑ－４のカクランで消失している。未調査区域まで含めれば、矩形の形状を呈する可能性がある。確認した範囲で東西68ｍ、南北26ｍを測る。出土遺物が少なく細かな時代は特定できないが、出土遺物や１号溝が畑状遺構、１号住居址および２号溝を全て切っていることから、少なくとも平安時代終わりから中世の遺構であると考えられる。こうした矩形の溝状遺構は、榎原・天神遺跡北方に位置する大塚遺跡でも検出されている。

大塚遺跡の区画溝は、１号、３号、４号溝によって「コ」の字形に区画され、東西60ｍ、南北47ｍを測り、平安時代に比定されている。区画溝は、溝の北側を東西に走る谷に面した方形区画であり、その役割として生産の場、とくに牧との関係が指摘されている。(註７)

榎原・天神遺跡の北側には前御勅使川が流れていた可能性が高く、その場合、大塚遺跡の立地条件と類似する。しかし、大塚遺跡の区画溝のように北側を自然の谷や河川で区画するのではなく、北側にも

溝を巡らしているなど両者には相違点もある。本調査で得られた溝の形状や立地条件から、直接牧との関係は問えず、役割も特定し難いが、馬の歯と推定される獣歯が溝から出土しており、馬と関係する遺構である可能性も考えられる。

第3節　畑状遺構

本遺跡では幅が狭く、浅い溝が並行して延びる遺構群を、その形状から畑状遺構と呼称した。こうした溝跡を佐藤甲二氏は、1．畑跡上面の「畝間」と2．基盤層に掘り込まれた「耕作痕」の2つに分類して相違点を指摘し、両者を厳密に区分して研究する必要性を説いている。(註8) 佐藤氏の分類基準に従えば、榎原・天神遺跡で検出された溝跡は、1．地山である基盤層を掘り込んでいる、2．溝状となっている、3．連続せず断片的である、4．溝間は平坦である、などの点から「耕作痕」である可能性が考えられる。(註9) 以下、県内における畑状遺構の類例を参照し、畑状遺構に関する課題を整理したい。

2000年度日本考古学協会鹿児島大会で行われたシンポジウム「はたけの考古学」の資料集によれば、山梨県内で検出されている畑状遺構の数は7遺跡を数える。(註10) この他、宮ノ前遺跡の検出例を加えると畑状遺構の検出例は合計8遺跡となる。韮崎市宮ノ前遺跡では、畝状遺構として畝間の溝が発見された。時代は平安時代の住居址を切っていることから中世～近世と推測されている。(註11) 北巨摩郡高根町の大林上遺跡では、時代は特定されていないが、畝状遺構として畝間の溝が検出されている。(註12) 甲府市の東河原遺跡、(註13) 富士見一丁目遺跡(註14)では、近世以降の畝間の溝とともに畝自体が検出されている。両者ともイネのプラントオパールが検出され、イネ科植物が栽培されていた可能性が指摘されている。一方、中巨摩郡とりわけ富士川以西にあたる狭西地域では、榎原・天神遺跡、百々遺跡、村前東A遺跡、(註15) 野牛島・大塚遺跡(註16)の4遺跡で畑状遺構が検出されている。時代は榎原・天神遺跡が古墳～平安時代、百々遺跡が平安時代、村前東A遺跡が中世以降、野牛島・大塚遺跡が平安～中世にそれぞれ推定されており、甲府市と比べて遺構が古い。4遺跡とも検出されたのは溝跡のみで、畝自体は確認されていない。前御勅使川の北側に位置する野牛島・大塚遺跡では、榎原・天神遺跡と同様の特徴をもつ畑状遺構が検出されており、「耕作痕」である可能性がある。報告書が準備中の百々遺跡を除いて、3遺跡で行われた植物珪酸体分析結果を見てみると、いずれも栽培化を積極的に指示する証拠は得られていない。(註17)

以上の点を遺跡の立地環境を軸にまとめると、荒川扇状地に立地する遺跡（東河原遺跡、富士見一丁目遺跡）では、近世以降の畑状遺構が畝自体も含めて検出されている。植物珪酸体分析ではイネのプラントオパールが多量に検出され、稲作の可能性が指摘されている。これに対し、御勅使川扇状地に立地する遺跡（榎原・天神遺跡、百々遺跡、村前東A遺跡、野牛島・大塚遺跡）では、古墳時代～中世以降と遺構が古く、溝跡のみが検出されている。植物珪酸体分析では栽培化を積極的に指示する結果は得られない。

このように現時点では、近世以降の畑と比べ、御勅使川扇状地上に立地する古代～中世の畑状遺構では畝の検出例がなく、また、科学分析を利用しても役割を特定できていない状況である。古代から中世の畑状遺構に関しては、「はたけ」としての役割を念頭におきつつも、「はたけ」以外の可能性も考慮しながら、慎重に検討すべきであろう。

第4節　まとめと今後の展望

本節では榎原・天神遺跡周辺の遺跡状況を概観しまとめとしたい。

第II章でも述べたように、御勅使川扇状地上において前御勅使川を挟んで北側と南側では奈良・平安時代の集落の時期、構成、規模が異なっている。北側は野牛島地区に相当する。野牛島地区の北に現御勅使川の旧流路が存在し、また南には前御勅使川が流れていた可能性が強い。こうした点から野牛島地区は川に挟まれたひとつの地理単位と考えられる。一方、前御勅使川以南（広範囲なため複数の地域からなっているが、ここでは仮に百々地区と呼称する）も、北に前御勅使川が流れ、南には有野から西野を経由し釜無川へと続く古い御勅使川の流路が存在することから、(註18) やはり二つの河川によって挟まれた、ひとつの地理単位と見なすことができる。以下に野牛島地区、百々地区の特徴を示す。

野牛島地区（北限：現御勅使川南側を流れる旧流路、南限：前御勅使川）
遺跡　石橋北屋敷遺跡、大塚遺跡、立石下遺跡、野牛島・大塚遺跡
時期　8世紀中頃から9世紀中頃が主体
構成　竪穴式住居が主体。特殊な遺物は少ない。
規模　重複がほとんど見られない、散在的な集落。

百々地区（北限：前御勅使川、南限：旧御勅使川流路【有野－西野－釜無川】）
遺跡　榎原・天神遺跡、百々遺跡
時期　10世紀前後
構成　竪穴住居のほか掘立柱建物跡址も多い。石帯や鏡など、官衙を示唆する遺物が出土。
規模　百々遺跡では200軒以上の住居址が検出されている。

まず時期に注目すると、野牛島地区では9世紀終末に集落が見られなくなるのに対し、百々地区では9世紀の住居は少なく、10世紀の集落が主体である。この現象は、野牛島地区から百々地区へ集落が変化、つまり、人の移動が行われたことを示唆している。また、集落の構成、規模から見る限り、単なる居住地域の変更ではなく、社会的・政治的な権力が背景にあったと推測される。具体的な社会的・政治的背景を解明する上で、百々遺跡の正式な報告が待たれる。

以上、住居址、溝状遺構、畑状遺構を中心に榎原・天神遺跡についてまとめてきた。中には論理の飛躍や認識が不足している場所があるかもしれない。しかし、より多くのデータを提示することに努めたつもりである。多くの方々の御教示、ご批判を受け、今後の報告書作りに役立てたい。

最後に調査および報告書完成までにはさまざまな方々、諸機関にご協力いただいた。末筆ながら感謝を申し上げ、結びの言葉としたい。

（註1）　大塚遺跡、野牛島・大塚遺跡については、野牛島・大塚遺跡報告書の考察で、住居プラン、住居内施設について比較分析を行った(斎藤　2000)。考察以後に刊行された石橋北屋敷遺跡のデータを加え比較した結果、住居プランは上記のような変遷をたどることが明らかとなった。
（註2）　新津　1997：P101
（註3）　大塚遺跡B区9号住、野牛島・大塚遺跡I区9号住、石橋北屋敷遺跡2a区4号住。
（註4）　桐生　1997a：P3
（註5）　平野　1999a，1999b，1999c
（註6）　遺構の埋没過程を考える場合、当然ながら層位を考慮することが必要である。しかし、1号住居址の1層と2層は斬移的に変化しており、明瞭な境界が見られなかった。また、層位は発掘者の解釈であり、人によって層位

が異なる場合もある。このため、本稿では層位を考慮しつつも、遺物分布から埋没過程を考える。なお、上層は1層、中層は第2層の上層にほぼ対応している。

(註7)　新津　1997：P104～105

(註8)　佐藤　2000

(註9)　佐藤氏は、「耕作痕」ができる要因として「天地返し痕」、「根菜類用畝床痕」、「桑植栽痕」「畝間痕」の4点を推定している。(佐藤2000：P20)

(註10)　日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会　2000

(註11)　櫛原・平野　1992

(註12)　田口他　1999

(註13)　森原他　1994

(註14)　長沢他　2000

(註15)　三田村他　1999

(註16)　斎藤　2000

(註17)　野牛島・大塚遺跡の植物珪酸体分析は、イネ科のプラントオパールがほとんど検出されず、タケ亜科が卓越し、ウシクサ族を伴うという榎原・天神遺跡の結果とほぼ同じ結果であった。

(註18)　保坂は中部横断道試掘調査結果と明治21年地形図の土地利用図を分析し、このルートに御勅使川の旧流路があったことを指摘している(保坂1999)。また河西は、このルート上の御勅使扇状地と沖積低地を隔てる崖線が赤山から徳永を結ぶ崖線とズレている点に注目し、この流路が赤山－徳永の崖を埋積し、小扇状地を作り出していることを推定している（河西2000)。

引用・参考文献

石野博信　1990　『日本原始・古代住居の研究』　吉川弘文館

今泉　潔　1996　「竪穴住居の解体」『すまいの考古学－住居の廃絶をめぐって』　山梨県考古学協会

河西　学　2000　「石橋北屋敷遺跡周辺の地形環境」『石橋北屋敷遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第178集　山梨県教育委員会他

桐生直彦　1993　「「残された」遺物と「残った」遺物－自然廃屋・焼却廃屋と不慮廃屋の対比－」『東京の遺跡』

桐生直彦　1995a　「竈出現以降の竪穴住居址内の遺物出土状態をめぐる問題」『山梨県考古学協会誌』第7号　山梨県考古学協会

桐生直彦　1995b　「棚からボタモチ－竪穴住居址の壁際覆土から出土する遺物の認識について－」『東国史論』第10号　群馬県考古学研究会

桐生直彦　1996a　「遺物出土状態からみた竪穴住居の廃絶」『すまいの考古学－住居の廃絶をめぐって』　山梨県考古学協会

桐生直彦　1996b　「棚上の遺物－武蔵国における古代竪穴住居跡の事例から－」『東国史論』第11号　群馬考古学研究会

桐生直彦　1997a　「君は“棚”を見たか－武蔵国における棚状施設の事例分析－」『土壁創刊号』　考古学を楽しむ会

桐生直彦　1997b　「変貌する古代竪穴住居像－発掘調査の盲点となりがちな諸施設について－」『遺跡・遺物から何を読みとるか（Ⅰ)』　帝京大学山梨文化財研究所

桐生直彦　1999　「床面に段差のある竪穴建物跡－『幅広の棚状施設』をどのように理解するか－」『東国史論』第14号　群馬考古学研究会

桐生直彦　2000　「君は“棚”を見誤っていないか、見落としていないか－竈をもつ竪穴建物跡にみられる棚状施設の報告に関して－」『東国史論』第15号　群馬考古学研究会

櫛原功一・平野修　1992　『宮ノ前遺跡』　韮崎市遺跡調査会他
1999　『上ノ原遺跡』　上ノ原遺跡発掘調査団
甲元眞之　2000　「畑遺構の検出の問題点」『はたけの考古学』　日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第一集　日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会
小林謙一　1996　「竪穴住居跡のライフサイクルからみた住居廃絶時の状況－南関東の縄文中期集落での遺物出土状態を中心に－」『すまいの考古学－住居の廃絶をめぐって』　山梨県考古学協会
小林謙一　1997　「竪穴住居跡調査における一視点－集落論の前に住居調査論を－」『山梨県考古学協会誌』第9号　山梨県考古学協会
小林健二他　2000　『石橋北屋敷遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第178集　山梨県教育委員会他
斎藤秀樹　2000　『野午島・大塚遺跡』　八田村文化財調査報告書　第2集　八田村教育委員会他
佐藤甲二　2000　「畑跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題－仙台市域の調査事例をとおして－」『はたけの考古学』　日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集　第一集　日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会
末木　健　1996　「竪穴住居の埋没と出土遺物から」『すまいの考古学－住居の廃絶をめぐって』　山梨県考古学協会
高橋康子　1999　「貯蔵穴の研究－武蔵国豊島郡内の竈付き竪穴住居跡にみられる貯蔵穴の分析について－」『土壁』第3号　考古学を楽しむ会
田口明子他　1999　『大林上遺跡』他　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第165集　山梨県教育委員会他
田中大輔　1998　『角力場第2遺跡』　若草町教育委員会
堤　隆　1991　「住居廃絶時における竈解体をめぐって－竈祭祀の普遍性の一側面」『東海史学』第25号
堤　隆　1995　「竈の廃棄プロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌』第7号　山梨県考古学協会
長沢宏昌他　2000　『富士見一丁目遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第167集　山梨県教育委員会
新津　健　1997　『大塚遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第137集
西秋良宏　1996　「住居廃絶研究の視点－欧米の研究動向から－」『すまいの考古学－住居の廃絶をめぐって』山梨県考古学協会
日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会　2000　『はたけの考古学』　日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集　第1集
野崎　進　1997　「遺物の出土状態をめぐって」『山梨県考古学協会誌』第9号
能登　健　2000　「関東地方のはたけ－火山灰に埋まった畠・畑の調査」『はたけの考古学』　日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集　第一集　日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会
平野　修　1999a　「山梨県内における古代竪穴住居の構造－北巨摩郡長坂町石原田北遺跡Ｊマート地点の事例から－」『山梨考古学論集Ⅳ』　山梨県考古学協会
平野　修　1999b　「棚状施設について」『上ノ原遺跡　ダイワヴィンテージゴルフ倶楽部造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書』　上ノ原遺跡発掘調査団
平野　修　1999c　「奈良・平安時代の住居と集落」『山梨県史』　山梨県史編さん委員会
保坂康夫　1999　「御勅使川扇状地の古地形と遺跡立地―中部横断道の試掘調査の成果から―」『研究紀要』15　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
三田村美彦他　1999　『村前東Ａ遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第157集　山梨県教育委員会
森原明廣　1999　「竪穴住居の埋没過程分析の一視点」『遺跡・遺物から何を読みとるか（Ⅲ）―住まいと住まい方―』　帝京大学山梨文化財研究所
森原明廣他　1994　『東河原遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第95集　山梨県教育委員会他
山梨県考古学協会甲斐型土器研究グループ（ｅｄ）　1992　『甲斐型土器』－その編年と年代－　山梨県考古学協会

遺物観察表

第5表　榎原・天神遺跡出土土器観察表(1)

1号住居址出土土器観察表（第13図）

番号	器種	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
	器形	口径	底径	器高	内面	外面				
1	土師器 坏	11.8	4	4.6	ロクロ整形	体・底部ヘラケズリ	密、赤褐色粒子含	橙色	やや良	口縁一部欠損
2	土師器 坏	12	4.8	3.7	ロクロ整形	体・底部ヘラケズリ	やや密、白色粒子含	暗赤灰色	良	約1/4
3	土師器 坏	15.2	5.8	5.6	ロクロ整形	体・底部ヘラケズリ	やや密、赤褐色粒子含	明赤褐色	良	約1/5
4	土師器 坏	15			ロクロ整形	体部ヘラケズリ	やや密、赤褐色粒子含	明赤褐色	良	約1/3
5	土師器 坏	11.2	5.2	4.2	ロクロ整形	体・底部ヘラケズリ	密	明赤褐色	良	約1/4
6	土師器 坏	13.2	6	3.9	ロクロ整形	体・底部ヘラケズリ	密	黄橙色	普通	約1/4
7	土師器 坏				ロクロ整形 暗文	体部ヘラケズリ	密、赤褐色粒子含	明赤褐色	良	
8	土師器 坏		5.6		ロクロ整形 暗文	体・底部ヘラケズリ	密、赤褐色粒子含	明赤褐色	良	底部完存
9	土師器 坏				ロクロ整形	体部ヘラケズリ	密、褐色粒子含	暗赤褐色(外) にぶい橙色(内)	普通	口縁部1/5
10	土師器 坏		6		ロクロ整形	体・底部ヘラケズリ	密、赤褐色粒子含	橙色	普通	底部1/4
11	土師器 坏		4.8		ロクロ整形	体・底部ヘラケズリ	密、赤褐色粒子含	橙色	良	底部1/2
12	土師器 坏		4.2		ロクロ整形	体・底部ヘラケズリ	密、赤褐色粒子含	橙色(外) 暗赤褐色(内)	良	底部2/3
13	土師器 坏				ロクロ整形	体部ヘラケズリ	密、赤褐色粒子含	明赤褐色	良	口縁破片
14	土師器 坏				ロクロ整形	体部ヘラケズリ	密、赤褐色粒子含	橙色	良	口縁破片
15	土師器 内黒坏			5.2	ロクロ整形	体・底部ヘラケズリ	密	橙色(外) 黒色(内)	良	約1/6
16	土師器 皿	13.4			ロクロ整形	体部ヘラケズリ	密、赤褐色粒子含	橙色	良	口縁部3/5
17	土師器 皿	13			ロクロ整形	体部ヘラケズリ	密、赤褐色粒子含	明赤褐色	良	口縁部1/4
18	土師器 皿	12			ロクロ整形	体・底部ヘラケズリ	密、赤褐色粒子含	橙色	良	口縁部4/5
19	土師器 高脚高台坏			9	ロクロ整形		密、赤褐色粒子含	明赤褐色	良	脚部1/2
20	土師器 甲斐型甕				ヨコハケ	タテハケ	やや粗、金雲母含	暗赤褐色	普通	口縁破片
21	土師器 甲斐型甕				ヨコハケ	タテハケ	やや粗、金雲母含	赤褐色	普通	口縁破片
22	土師器 甲斐型甕				ヨコハケ	タテハケ	粗、金雲母含	暗赤褐色(外) 極暗赤褐色(内)	普通	口縁破片
23	土師器 置竈型土器				ヨコハケ	タテハケ	やや粗、金雲母含	明赤褐色(外) 暗赤褐色(内)	普通	口縁破片
24	緑釉陶器 長頸壺				ロクロ整形	緑釉	緻密	灰白色	普通	口縁～肩部

第６表　榎原・天神遺跡出土土器観察表(2)

２号住居址出土土器観察表（第16図）

番号	器種	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
	器形	口径	底径	器高	内面	外面				
1	土師器	13	4.6	5.2	ロクロ整形・回転糸切り		密、長石・白色粒子含	赤褐色	良	約1/2
	坏					体・底部へラケズリ				
2	土師器	13.4	5.4	4.4	ロクロ整形・底部糸切り		普通、長石・白色粒子含	橙色(外) 黒～橙色(内)	普通	底部1/2～ 口縁1/5
	坏					体・底部へラケズリ				
3	土師器	12.8	3.5	4	ロクロ整形		密、長石・石英・赤褐色粒子含	橙色	良	約1/2
	坏					体・底部へラケズリ				
4	土師器	14.4	4.4	5.4	ロクロ整形		密、赤色粒子含	橙色	良	ほぼ完形
	坏					体・底部へラケズリ				
5	土師器				ロクロ整形		密、白色粒子含	橙色	普通	口縁破片
	坏									
6	土師器		5.6		ロクロ整形		密、赤褐色粒子含	淡橙色	普通	底部1/2
	坏									
7	土師器	13.2	4	2.8	ロクロ整形		密、赤褐色粒子含	明赤褐色	良	約１/4
	皿					体・底部へラケズリ				
8	土師器						やや粗、金雲母・長石含	にぶい赤褐色(外) 黒褐色(内)	普通	口縁破片
	甕				ヨコハケ	タテハケ				
9	土師器						やや粗、金雲母含	にぶい赤褐色	普通	口縁破片
	甕				ヨコハケ	タテハケ				
10	土師器						やや粗、金雲母含	にぶい赤褐色	普通	口縁破片
	甕				ヨコハケ	タテハケ				

畑状遺構出土土器観察表（第25図）

番号	器種	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
	器形	口径	底径	器高	内面	外面				
1	土師器						普通、金雲母含	橙色(外)	普通	口縁破片、 脚部破片
	台付甕				ヨコハケ	タテハケ（脚）				

遺構外出土土器観察表（第25図）

番号	器種	法量(cm)			製作技法		胎土	色調	焼成	残存率
	器形	口径	底径	器高	内面	外面				
1	灰釉陶器				ロクロ整形		密	灰色(外)	良	口縁破片
	椀				施釉	施釉				

写 真 図 版

1．榎原・天神遺跡　全景

2．榎原・天神遺跡調査区南側　遠景

写真図版２

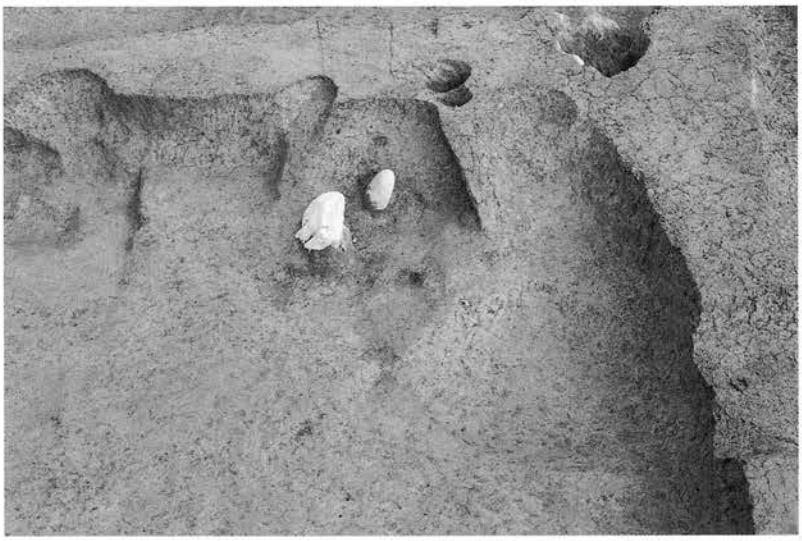
１．１号住居址遺物
出土状況（西から）

２．１号住居址竈
（西から）

３．１号住居址竈遺物出土状況（西から）

1．１号住居址竈・
棚状施設（西から）

2．１号住居址
棚状施設（西から）

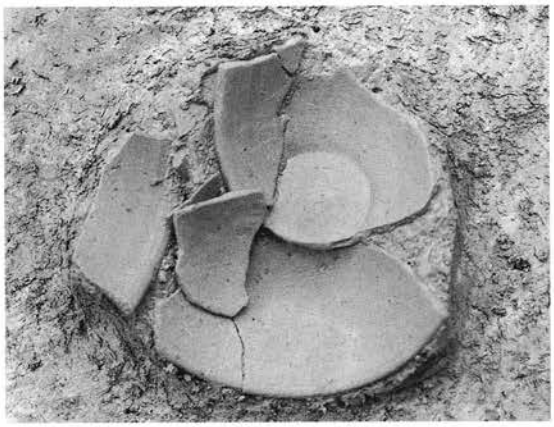


3．１号住居址竈・棚状施設・
土坑１（西から）

写真図版４

１．１号住居址土坑２

２．１号住居址土坑４



３．１号住居址坏出土状況

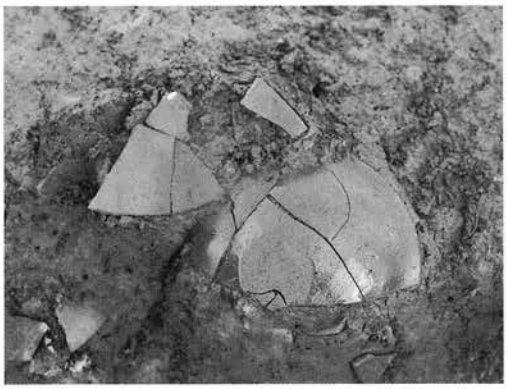
４．１号住居址坏出土状況

５．２号住居址遺物出土状況（西から）

１．２号住居址（西から）

２．２号住居址坏出土状況

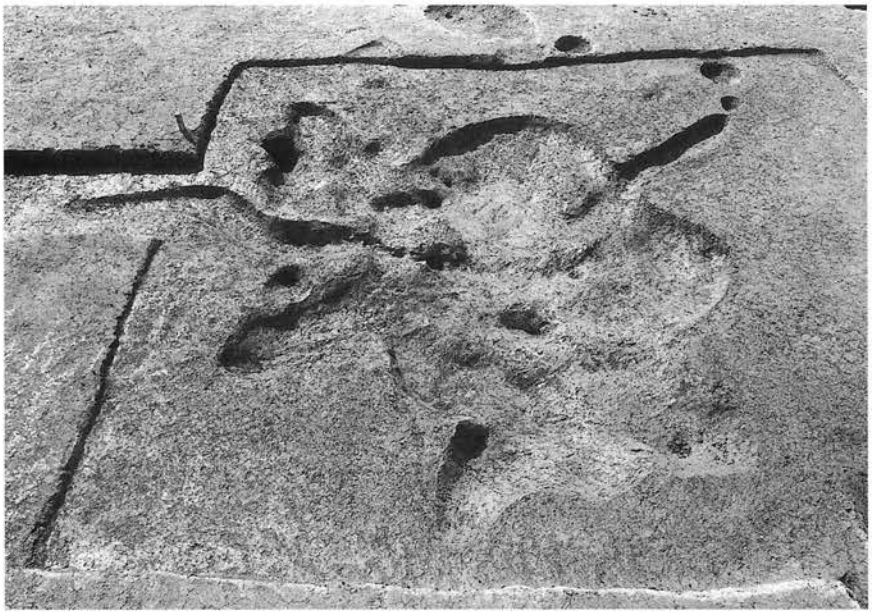
３．２号住居址竈遺物出土状況（西から）



４．２号住居址坏出土状況

５．２号住居址竈・土坑（西から）

写真図版６



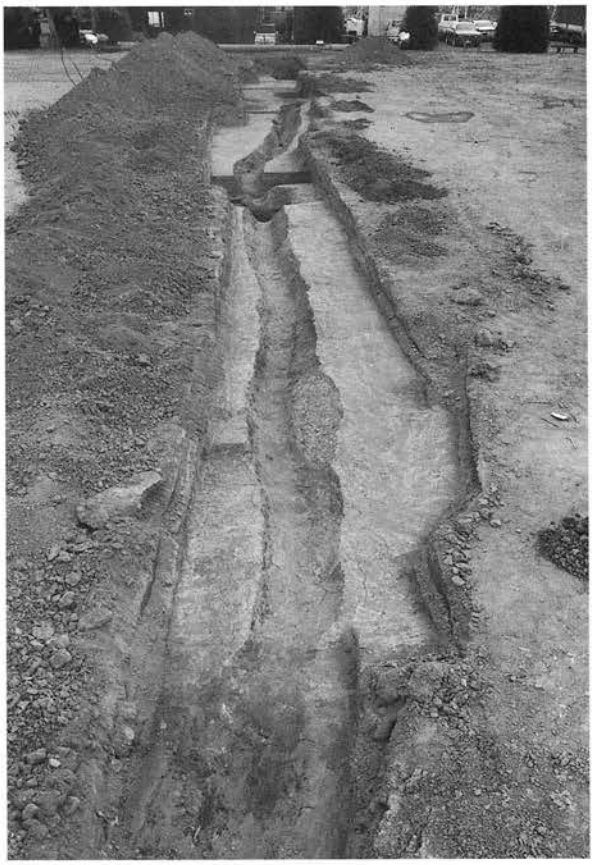
１．焼土遺構（北から）

２．A,B－３～８区
１・２・３号溝（北から）

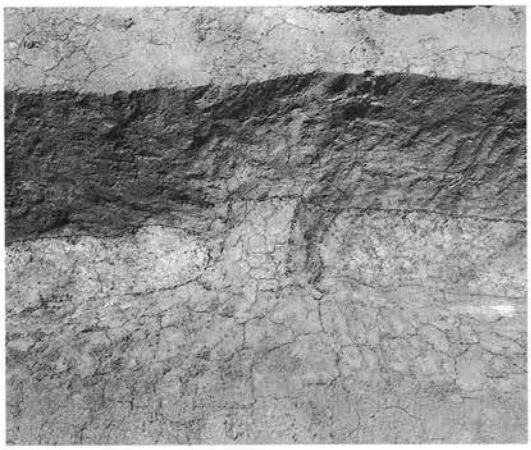
３．１・２号溝石出土状況（南から）

４．１号溝石出土状況（南から）

１．２号溝石出土状況（南東から）



３．Ｊ～Ｐ－３,４区１号溝（西から）



２．１号溝床面ステップ状遺構（南から）

４．５号溝（左）・６号溝（右）（南から）

５．４号溝（西南から）

写真図版８

１．７号溝（北から）

２．８号溝（南から）

３．９号溝（南から）

４．10号溝（南から）

1．１号ピット群・焼土遺構・ 1号溝遠景（北西から）

2．１号ピット群・焼土遺構（西から）

3．畑状遺構全景（西から）

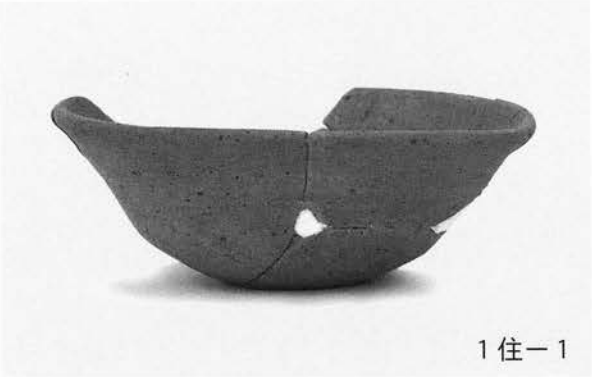
写真図版10

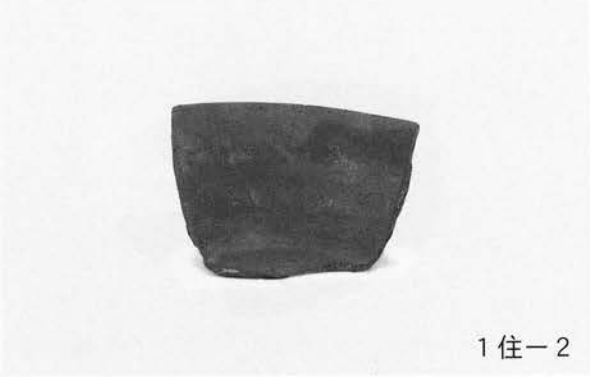
1．畑状遺構台付甕脚部出土状況

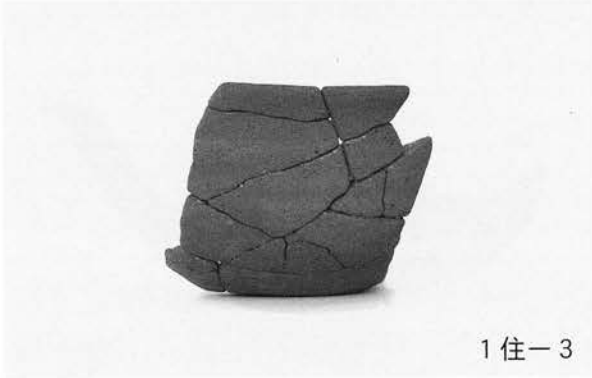
2．台付甕脚部出土状況

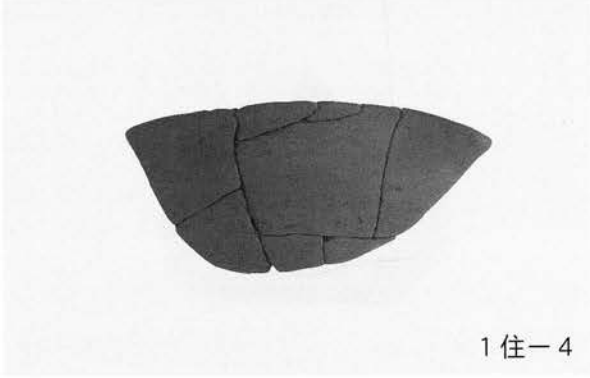
3．調査風景（1号住居址）

4．調査風景（焼土遺構）


1住－1


1住－2


1住－3


1住－4

1住－5

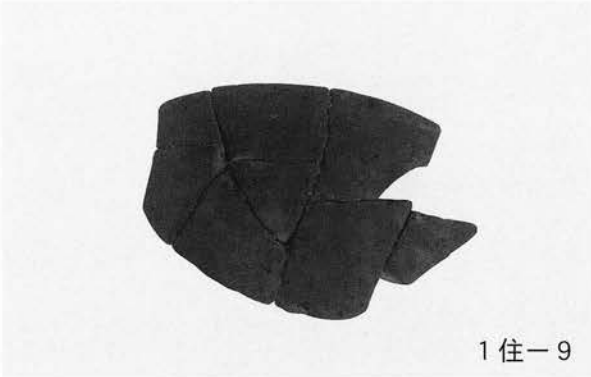
1住－6

1住－7

1住－8

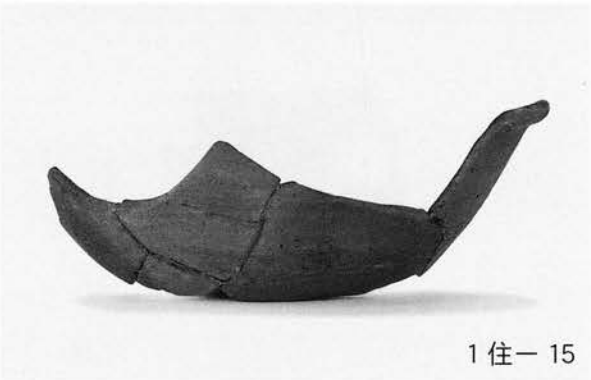
1．1号住居址出土遺物

写真図版12


1住－9

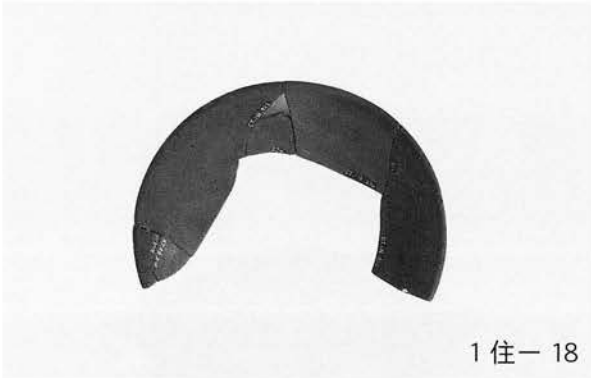
1住－11

1住－12


1住－15

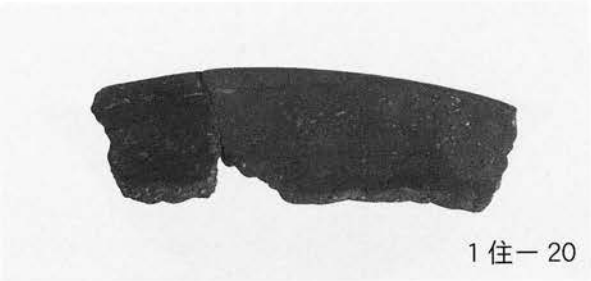
1住－16

1住－17


1住－18

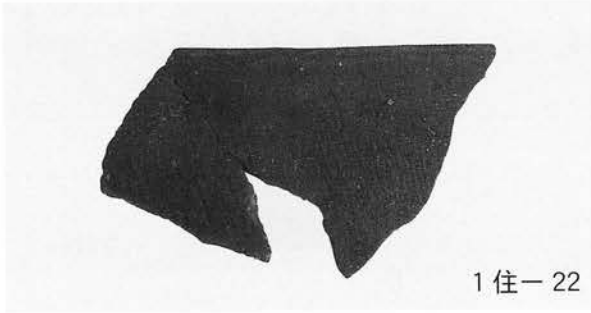
1住－19

1．1号住居址出土遺物

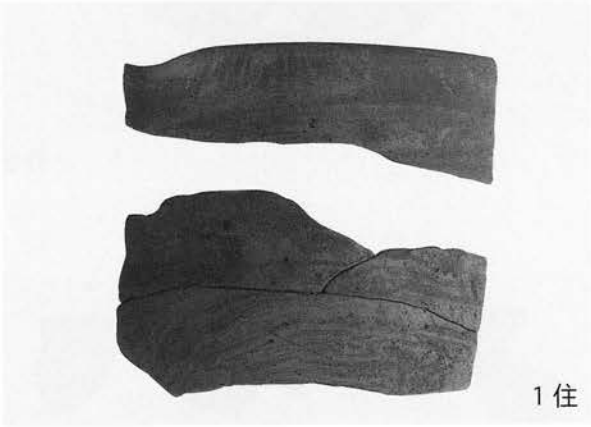

1住－20

1住－21

1住－23

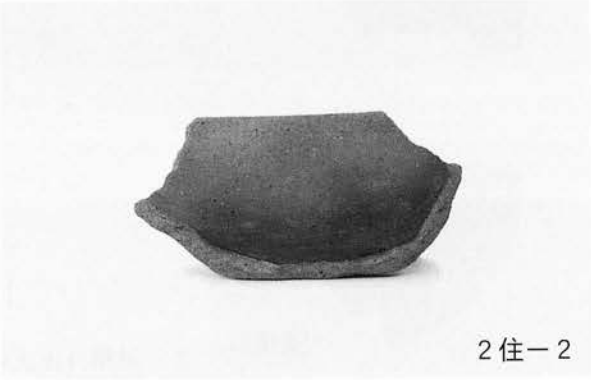

1住－22

1住－24


1住

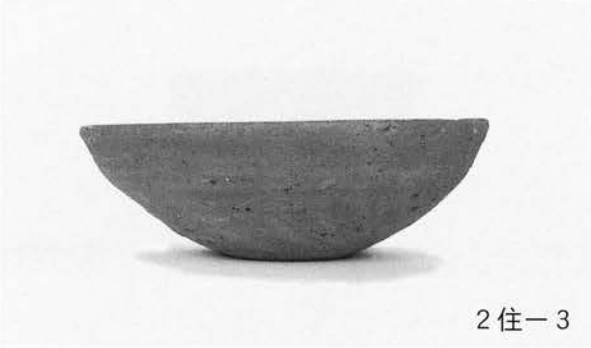
1．1号住居址出土遺物

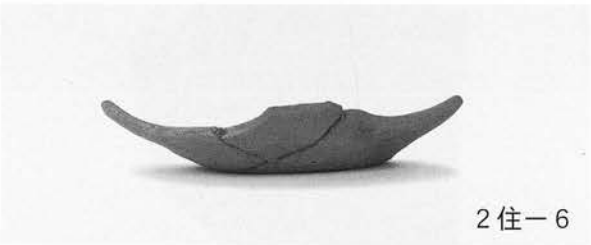
2住－1

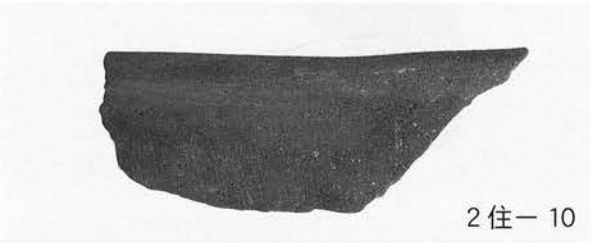

2住－2

2．2号住居址出土遺物

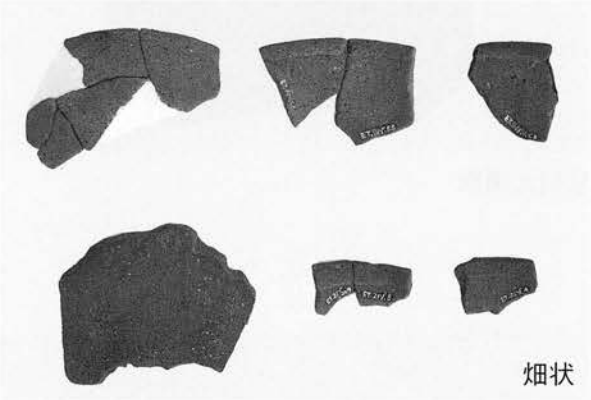
写真図版14







1．２号住居址出土遺物



2．畑状遺構出土遺物

3．遺構外出土遺物

報告書妙録

ふりがな	えのきはら・てんじんいせき
書名	榎原・天神遺跡
副書名	高度農業情報センター建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	八田村文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	斎藤秀樹
編著機関	八田村教育委員会
所在地	〒400－0204　山梨県中巨摩郡八田村榎原800
発行年月日	2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えのきはら 榎原・ てんじんいせき 天神遺跡	やまなしけんなかこまぐん 山梨県中巨摩郡 はつたむらえのきはら 八田村榎原	19384	31	35度 39分 32秒	138度 29分 9秒	20000118～ 20000303 20000417～ 20000421	2000	高度農業情報センター建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
榎原・天神遺跡	集落址	平安時代・中世	竪穴住居　2 焼土遺構　1 ピット　97 溝状遺構　10 畑状遺構　1	土師器 須恵器	前御勅使川右岸の自然堤防状の微高地に立地する集落址

八田村文化財調査報告書　第３集

山梨県中巨摩郡八田村

榎原・天神遺跡

高度農業情報センター建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　2001年３月31日

編集／発行　八田村教育委員会
〒400-0204　山梨県中巨摩郡八田村榎原800
TEL　055-285-1883
FAX　055-285-0491

印　刷　所　鬼灯書籍株式会社
〒381-0012　長野県長野市柳原2133-5
TEL　026-244-0235
FAX　026-244-0210